山梨県北巨摩郡白州町

坂下遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1988

白州町教育委員会
峡北土地改良事務所

山梨県北巨摩郡白州町

坂下遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1988

白州町教育委員会
峡北土地改良事務所

序

この報告書は、昭和62年度県営圃場整備事業に伴い、発掘調査された坂下遺跡の報告であります。

白州町には、縄文時代全般から古代・中世の各時代の遺跡が数多く存在し、各遺跡からは、それぞれの時代の土器類等が発見されています。特に、白須・鳥原・横手地区等の広い段丘面には、大規模な遺跡の存在が知られています。

全町を対象とした水田の圃場整備事業は、昭和58年度から開始され、その間の昭和59年には、縄文時代中期の根古屋遺跡の発掘調査が行われました。

坂下遺跡は、釜無川右岸の河岸段丘上、白州町白須字所帯に位置し、昭和62年度に発掘調査が行われ、その結果、縄文時代・平安時代・中世の各種遺構や遺物が発掘されました。例えば、平安時代では集落跡が検出され、古代の真衣野牧との関連性、中世では50基近い墓坑群や多量の内耳土器等から、この地域を拠点とした武川衆との関係など、白州町の歴史を解明するためにも、また北巨摩地方の歴史を知る上にも、貴重な資料と言えましょう。

「温故知新」という言葉があります。私はこの坂下遺跡から発掘された遺構や遺物を眼のあたりにして、この地に住んでいた人びとの日常生活や、またその生活を支えるためにとられたいろいろの日常活動等を連想してみるとき、何か自分自身がその時代に、タイムトンネルを通って生活しているような想いにかられます。そして、ふとその想いが現実に引き戻されたとき、現在の生活のあわただしさと、すべてのものが機械化されたと言っても過言ではない文化生活の中に生きている自分に対し、大きなギャップを感じます。私はこれらのことを踏まえ、この報告書が、地域の歴史を究明し、また昔のロマンを想起するためのひとつの資料として、多くの方々に活用していただけるならば幸いであると存じます。

最後に、この事業にご協力を賜わりました峡北土地改良事務所・山梨県教育庁文化課等各関係機関の皆様をはじめ、白須上区の上原喜隆区長を中心として直接調査にご協力をいただきました皆様方に対し、衷心から御礼を申しあげ、この報告書の序といたします。

昭和６３年３月

白州町教育委員会

教育長　堀内知幸

例　　言

1．本書は、昭和62年度県営圃場整備事業に伴って発掘調査された、山梨県北巨摩郡白州町に所在する坂下遺跡の調査報告書である。
2．発掘調査は、峡北土地改良事務所との負担協定による委託と文化庁・山梨県より補助金を受けて、白州町教育委員会が実施した。
3．発掘調査及び出土品の整理は、白州町教育委員会で行なった。
4．遺物の実測・写真撮影・本文執筆及び編集は折井が行った。
5．遺構の実測は、株式会社パスコへ委託して行った。
6．鉄製品の保存処理は、財団法人山梨文化財研究所に依頼した。
7．発掘調査及び本書の作成にあたって次の諸氏にご教示いただいた。記して感謝する次第である。（敬称略）

新津健・末木健・八巻与志夫・小林広和・田代孝・坂本美夫・長沢宏昌・萩原三雄・平野修・山路恭之助・佐野勝広・小林公明

8．本調査の出土品・諸記録・図面・写真等は、白州町教育委員会が保管している。
9．本調査にあたり、峡北土地改良事務所・山梨県教育庁文化課及び地元白須上区の皆様に御理解・御指導をいただいた。心から謝意を表する次第である。

調　査　組　織

調査主体　　白州町教育委員会（教育長　高野富徳　～９月30日）
（教育長　堀内知幸　10月５日～）

調査担当　　折井　敦

事 務 局　　宮沢元一（教育課長）・山田法親・伊藤早苗・名取利之
嶋口郁子

調査参加者　山田義則、山田雪江、望月まつ代、西中山友栄、西中山初子、伏見由美子、清水房子、植松ながよ、飯田敏子、伏見増江、原幸子、埴原みちよ、宮沢つや子、中山くに子、生井ユキ子、清水幸子、清水和子、鈴木千代子

整理参加者　水石佐江子、名取佐紀子

目　　次

序
例　　言
挿　図　目　次
図　版　目　次
第Ⅰ章　調　査　状　況…… 9
第1節　調査に至る経過…… 9
第2節　調　査　経　過…… 9
第Ⅱ章　位置と環境…… 17
第1節　自　然　環　境…… 17
第2節　歴 史 的 環 境…… 17
第3節　層　　序…… 20
第Ⅲ章　遺 構 と 遺 物…… 22
第1節　縄文時代の土器・石器…… 25
第2節　平安時代の住居跡と遺物…… 29
第3節　平安時代の小竪穴…… 41
第4節　掘立柱建物跡…… 43
第5節　グリッド出土の平安時代遺物…… 43
第6節　中世の土坑群…… 47
第7節　中世の水路状遺構…… 55
第8節　中　世　遺　物…… 56
第9節　その他の遺物…… 73
第10節　五輪塔群…… 74
第Ⅳ章　ま　と　め…… 77
参　考　文　献…… 78
図　版　集

挿　図　目　次

第１図　坂下遺跡・下地区位置図……10
第２図　坂下遺跡・下地区付近の地形図…11
第３図　下地区調査範囲と調査位置図……12
第４図　下地区１～６トレンチ土層図……13
第５図　坂下遺跡調査範囲図……14
第６図　坂下遺跡と周辺遺跡……18
第７図　坂下遺跡土層図……21
第８図　遺構配置図……23－24
第９図　グリッド出土縄文土器拓影……25
第10図　グリッド出土縄文土器実測図……26
第11図　グリッド出土縄文時代石器……27
第12図　第１号住居跡……28
第13図　第１号住居跡出土土器……30
第14図　第１号住居跡出土土器……31
第15図　第２号住居跡……32
第16図　第２号住居跡出土土器……33
第17図　第４号住居跡出土土器……33
第18図　第４号住居跡……34
第19図　第３号住居跡……36
第20図　第３号住居跡出土土器……37
第21図　第３号住居跡出土土器……38
第22図　Ｂ－６　遺構群……39－40
第23図　Ｂ・Ｃ－３　掘立柱建物跡と遺構群……42
第24図　グリッド出土土師器等……44
第25図　グリッド出土須恵器……45
第26図　グリッド出土灰釉陶器……46
第27図　Ｄ－１・２　土坑群……49－50
第28図　Ｅ・Ｆ－３・４・５　土坑群（その１）……51－52
第29図　Ｅ・Ｆ－３・４・５　土坑群（その２）……53－54
第30図　Ｂ－２・Ｃ－２・３　水路状遺構石組……55
第31図　Ｄ－３　水路状遺構内石組……56
第32図　水路状遺構周辺出土内耳土器……57
第33図　グリッド出土内耳土器……58
第34図　グリッド出土内耳土器……60
第35図　グリッド出土擂鉢……61
第36図　土坑上面及びグリッド出土土師質土器……63
第37図　グリッド出土中世陶器……65
第38図　グリッド出土凹石状石器……67
第39図　グリッド出土凹石状石器……68
第40図　グリッド出土凹石状石器……69
第41図　刀　子……71
第42図　水路状遺構内出土鋤先……71
第43図　グリッド出土古銭……72
第44図　土製品……73
第45図　その他の石器……74
第46図　五輪塔群　空風輪……75
第47図　五輪塔群　火輪……75
第48図　五輪塔群　水輪・地輪……76
第49図　宝篋印塔……76

図　版　目　次

図版１　坂下遺跡全景

図版２　調査風景　上…表土剥ぎ、中…遺物包含層発掘、下…遺構検出作業

図版３　土師質土器出土状況　上…Ｅ－６、中…Ｆ－３・Ｐ６上面、下…Ｃ－３・Ｐ48上面

図版４　内耳土器等出土状況　上・中…Ｄ－６水路状遺構付近、下…Ｅ－６

図版５　上…Ｄ－６水路状遺構付近擂鉢出土状況、中…Ｃ－７水路状遺構内鋤先出土状況、下…Ｄ－１・２土坑群上面刀子出土状況

図版６　第１号住居跡　上…遺物出土状況、中…Ｅ－４・Ｐ６との重複状況、下…完掘状況

図版７　第２号住居跡　上…炭化物分布状況、中…カマド袖石状況、下…完掘状況

図版８　第３号住居跡　上・中…カマド完掘状況、下…完掘状況

図版９　小竪穴完掘状況　上…第１号、中…第２号、下…第３号

図版10　上…第１号掘立柱建物跡完掘状況、中…水路状遺構完掘状況、下…水路状遺構石組部完掘状況

図版11　上…Ｄ－３水路状遺構内石組完掘状況、中…同石組内土師質土器出土状況、下…土坑Ｄ－２・Ｐ72集石状況

図版12　上…Ｄ－１・２土坑群完掘状況、中…Ｅ・Ｆ－４・５土坑群完掘状況、下…Ｂ・Ｃ－５・６遺構群完掘状況

図版13　上…国道建設時発見五輪塔群、中…縄文土器、下…縄文時代石器

図版14　第１・３号住居跡出土遺物

図版15　グリッド出土内耳土器

図版16　グリッド出土内耳土器、擂鉢

図版17　グリッド出土中世土師質土器

図版18　グリッド出土凹石状石器・鉄製品

図版19　グリッド出土平安時代土器類・中世陶器・土製品・その他の石器

図版20　上…下地区全景、中…下地区作業風景、下…下地区３トレンチ完掘状況

図版21　上…下地区３トレンチ土層断面、中・下…下地区５トレンチ完掘状況・土層断面

凡　　例

１．遺構平面図は、すべて国土地理院の座標方向で作成してあり、上が北を示す。

２．遺構平面図は、全体図を除き、すべて縮尺60分の１である。

３．ピット番号は、グリッド毎の通し番号で表示している。

４．住居跡遺物で、単に坏・皿のごとく記述してあるものは、土師器である。

第Ⅰ章　調　査　状　況

第１節　調査に至る経過

山梨県北巨摩郡白州町白須字所帯4288番地ほかに所在する坂下遺跡は、昭和62年度着工予定の県営圃場整備事業に伴い、昭和６１年３月11日～17日の間、埋蔵文化財試掘調査を実施し、新たに発見された遺跡である。

試掘調査は、県営圃場整備事業予定区域（74,500㎡）を対象として、幅 1.5m、長さ10mの試掘坑を任意に11ヵ所設定し、重機及び人力で掘り下げ、遺構、遺物の有無を確認する方法で行われた。

その結果、坂下遺跡及び山梨県北巨摩郡白州町白須字坂下3800番地ほか（以下「下地区」と呼ぶ。）の、黒褐色土中より縄文時代～平安時代にかけての土器片が出土したが、坂下遺跡は各試掘坑より量は少ないもののまんべんなく遺物が出土したのに対し、下地区は遺物が出土しない試掘坑もあった。

そのため、上記２地点の全面ないしは部分の発掘調査が必要であると判断され、当該遺跡の措置について、県文化課・峡北土地改良事務所・町教育委員会との間で協議を行ったところ、峡北土地改良事務所の委託を受け、町教育委員会が主体となり、本調査を実施することとなった。調査範囲は、坂下遺跡が3000㎡・下地区が調査対象面積3300㎡のうち1000㎡、合計4000㎡とした。

昭和62年５月22日付け、峡北土第５－48号で峡北土地改良事務所長より、文化財保護法第57条の３第１項の規定による、埋蔵文化財発掘の通知書の提出を受け、昭和62年５月26日付け、白教発第５－33号で山梨県教育委員会教育長に進達する。

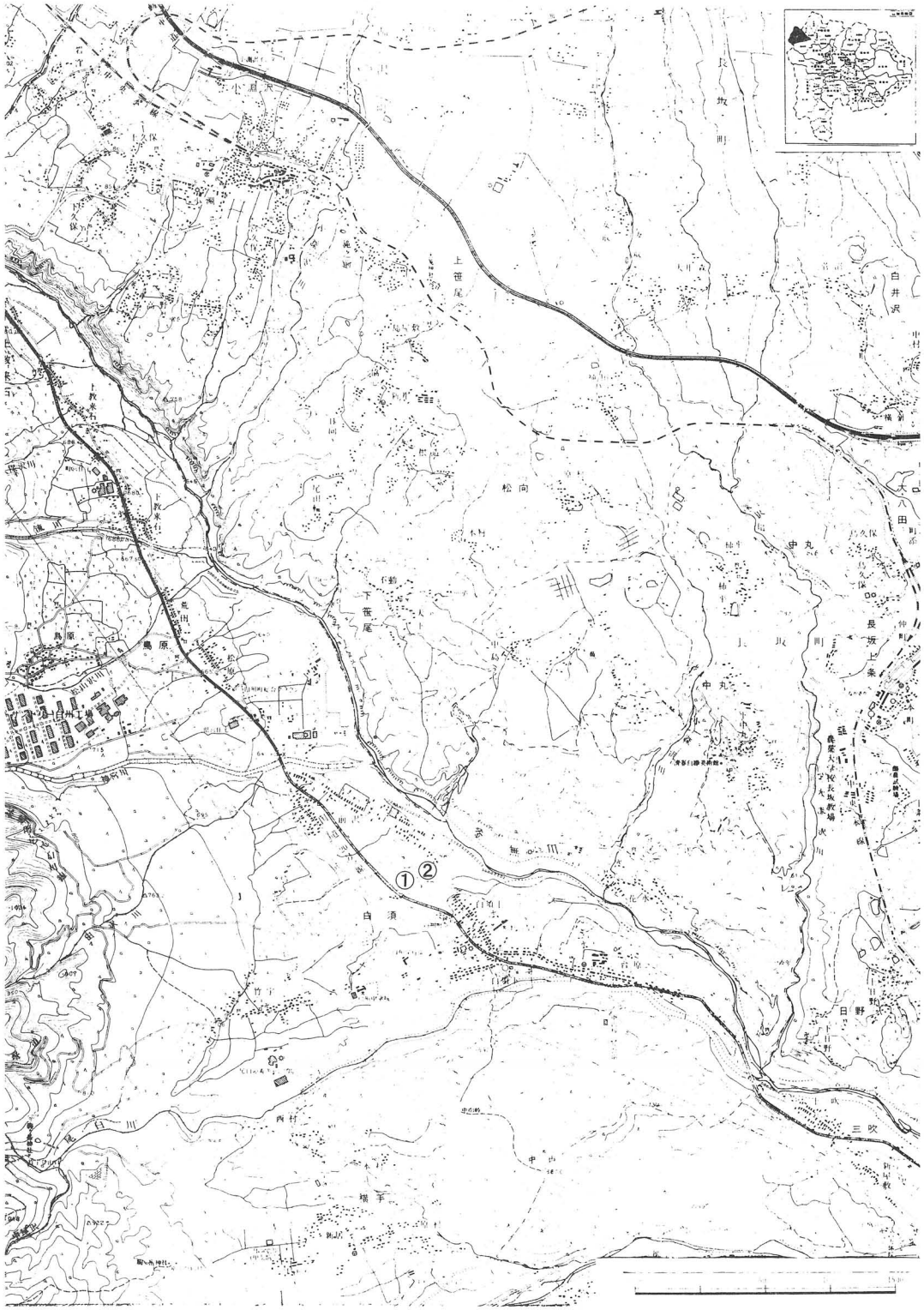
昭和62年５月８日付け、白教発第５－９号で文化庁長官（県教委経由）に、文化財保護法第98条の２第１項の規定による、埋蔵文化財発掘調査の通知書を提出する。

第２節　調 査 経 過

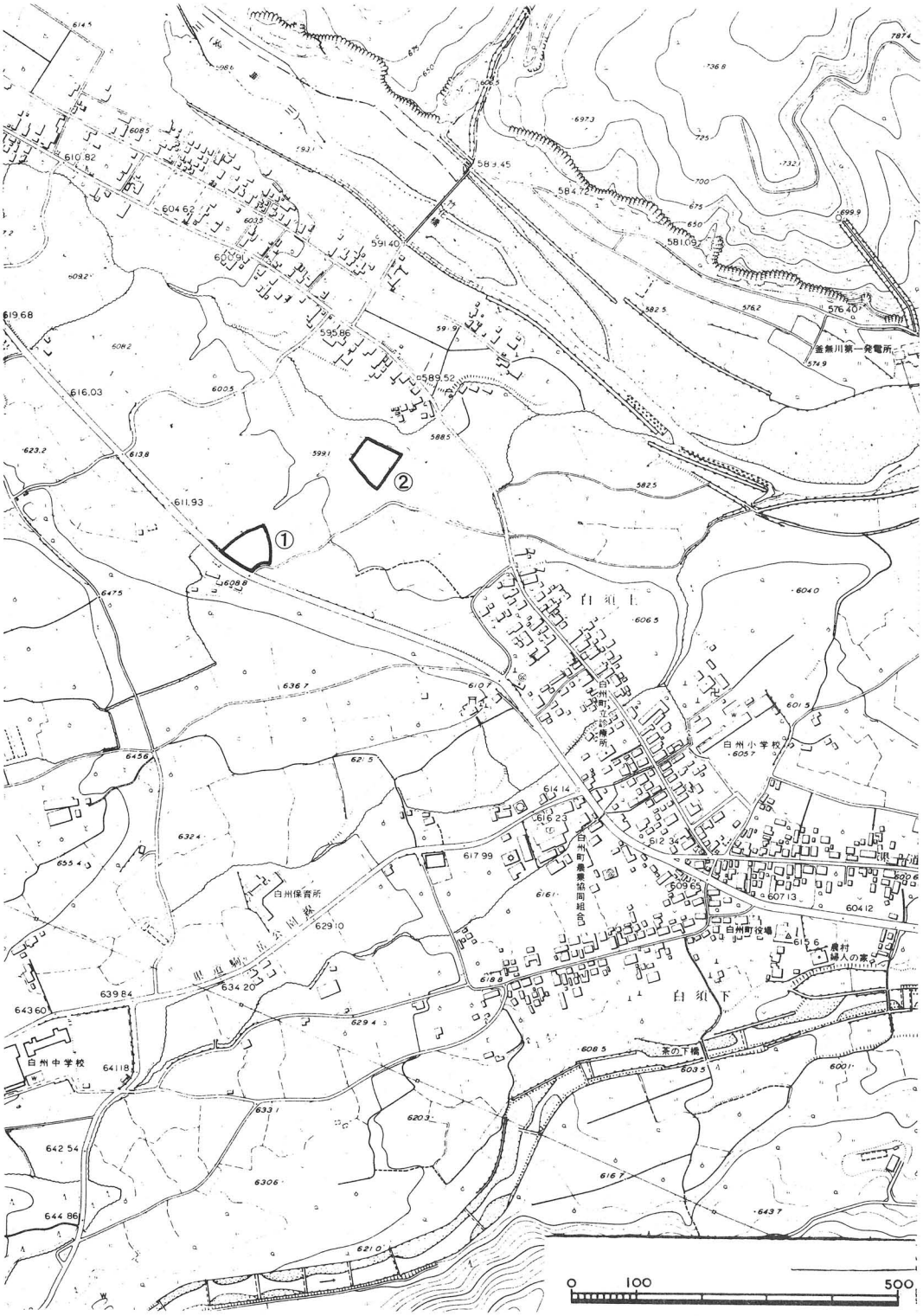
発掘調査は昭和62年5月20日より開始し、８月21日現地調査終了、その後、報告書作成までの整理作業が完了したのは昭和63年３月31日であった。

５月20日～５月25日の間、下地区の発掘調査を行った。調査は対象区域内に、幅４m、長さ40m程度のトレンチを10m間隔で６本設定し、北側より１～６トレンチと番号をつけ、バックホーにより表土剥ぎ等を行い、人力により仕上げを行った。

土層は、扇状地に特有な層序で非常に乱れている上に、水田の構築に伴う切土・盛土部分が



第１図　坂下遺跡　①・下地区　②・位置図



第２図　坂下遺跡　①・下地区　②・付近地形図

多く見られ、さらに小さな谷が幾筋か入り込み、基準層序とするような確かな地層は見受けられない。しかし、大きく分類すると以下のとおりである。

第Ⅰ層　表土　　Ⅰａ　耕作土

Ⅰｂ　水田構築時盛土（細粒の白色砂を盛り、土手の部分はロームで補強している。）

第Ⅱ層　旧表土　　砂礫混じりの暗褐色土

第Ⅲ層　洪水堆積層（沢筋のみ）

Ⅲａ　細粒の白色砂

Ⅲｂ　水分を多量に含む泥状の黒色粘性土

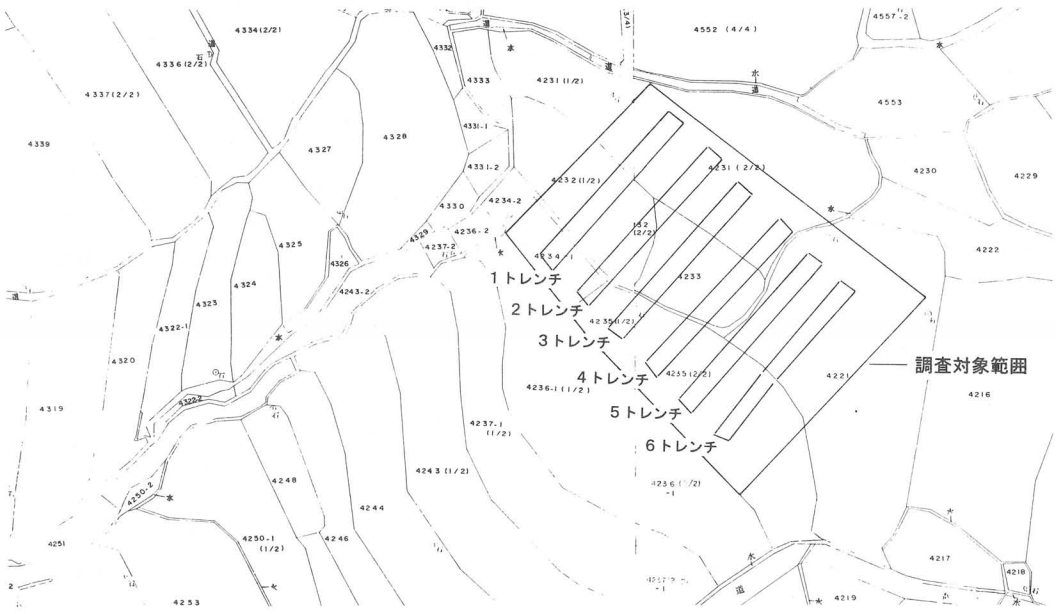
Ⅲｃ　砂礫を多量に含む黒褐色土

Ⅲｄ　砂礫層

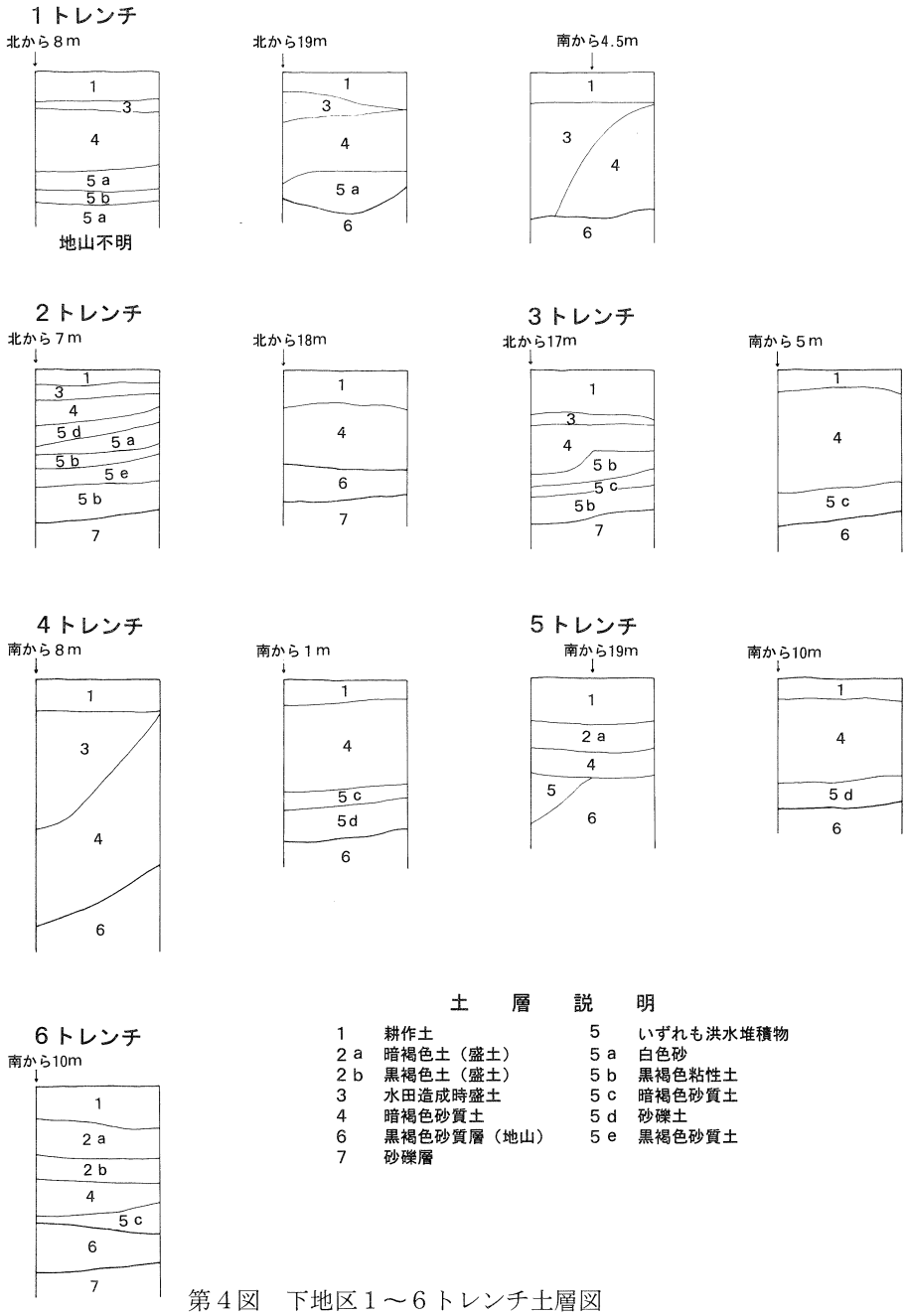
Ⅲｅ　砂礫及びローム粒を含む暗茶褐色土

第Ⅳ層　地山　　固くしまった砂礫混じりの黒褐色砂質土（沢筋では不明）

各トレンチの土層の状況は第４図土層柱状図のとおりである。１～４トレンチ北東側の水田（4231番地）は、厚い洪水堆積層となっており、２ｍ近くの掘削でも地山に達せず、２トレンチのⅢｃ層より磨滅した縄文土器と思われる小片が２点出土している。３・４トンンチでは、昭和60年度の試掘調査において、試掘坑をあけた部分を含むが、いずれも旧表土の下層は厚い洪水堆積層であり、その層中より遺物が出土したことが確認された。これらの遺物はすべて上流からの流れ込みと判断できる。



第３図　下地区調査範囲と調査位置図（１：1500）



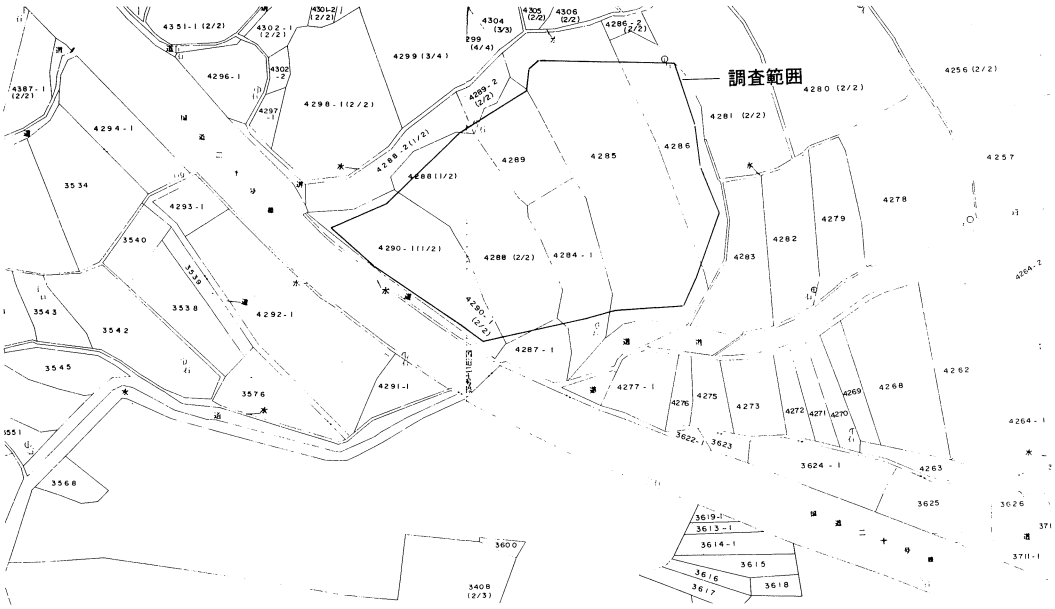
土　層　説　明

1	耕作土	5	いずれも洪水堆積物
2a	暗褐色土（盛土）	5a	白色砂
2b	黒褐色土（盛土）	5b	黒褐色粘性土
3	水田造成時盛土	5c	暗褐色砂質土
4	暗褐色砂質土	5d	砂礫土
6	黒褐色砂質層（地山）	5e	黒褐色砂質土
7	砂礫層		

第４図　下地区１～６トレンチ土層図

１～６トレンチにかかる水田（4232・4233・4234－１・4235・4221番地）は、舌状台地先端部及び先端部斜面にかかっており、水田構築時の盛土を排土した旧地形は、小さな沢が多数入り込んだ複雑な地形となっている。地山は水田構築時に削土した部分以外は、旧状を残しているが、遺構・遺物は全く見られない。

以上のように下地区は、流れこみによる遺物が数点見られるのみで、遺跡とは判定できない状況であったため、５月25日、調査を終了した。



第５図　坂下遺跡調査範囲図（１：1500）

坂下遺跡は、５月22日より発掘調査を開始した。まず、調査区域の縮小が可能かどうかを確認するため、調査区域内に10m間隔で幅４mのトレンチを４本設定し、バックホーにより水田耕作土及び床土を排土したところ、量的な濃淡はあるものの各トレンチとも床土下層に、まんべんなく遺物の分布が見られた。また、地山は水田構築の際に削平されている部分も認められたが、全般には遺存状況は良好と判断され、試掘調査では確認されなかった住居跡等の遺構も十分に予想される状況であった。

そのため、バックホーとブルドーザーを併用し、調査区域全体の表土（水田耕作土・床土）の排土を行い、５月30日完了した。

重機による表土剥ぎ完了後、トレンチ方向を基線として、10mピッチで基準杭を打設し、メッシュを組み、調査の基準とした。各グリット名は、南東より北西方向にＡ～Ｆとし、南西より北東方向に１～７として、両者を組み合わせ各グリッドの名称とした。さらに、このグリッドを２m四方に細分し小グリッドを設定した。

人力による発掘調査は、水田面に段差があるため、グリッドを意識しつつ、水田（4290－１・4288）・水田（4289・4284－１）・水田（4285・4286）の三ブロックに分け、順次調査を進めることとした。また、各ブロック毎に遺物包含層の掘り下げと遺構の確認・発掘の作業を連続して行うことを原則とするが、天候の影響で地山が著しく乾燥した等の場合には、作業順の変更も考慮した。

５月26日から６月16日まで、まず、水田（4290－１・4288）の遺物包含層の掘り下げを行っ

た。５月27日には、Ｂ・Ｃ－３の地山面に南北に並ぶ柱穴と見られる落ち込みが検出され、掘立柱建物跡の存在が予想された。遺物は、平安時代と中世の土器片が混じっていた。しかし、この遺構群より東側では、遺構はもとより遺物もほとんど見られなくなった。また、Ｂ・Ｃ－３では、土坑状の遺構が10基ほど確認され、その付近より内耳土器片や土師質土器が出土した。６月４日には、Ｂ・Ｃ－２で水路と考えられる配石を含む溝状遺構が検出された。この溝状遺構は、覆土が白色砂で中世遺物を多く含んでいる。また、配石のなかには五輪塔の火輪が入っていた。

五輪塔の発見に関連して、地元の古老より、調査区域に隣接する国道20号線の建設にあたり、その用地内より多数の五輪塔が掘り出され、現在も国道脇に放置されている、との情報があり、坂下遺跡との関連が深いと判断できることから、散在している多数の五輪塔等の石塔の残欠を収集した。

６月16日～18日、水田（4290－１・4288）の遺構検出及び遺構半掘に入り、Ｅ・Ｆ－２・３の土坑状の大形ピット群、Ｄ－１・２・３の土坑状の大形のピット群を含む遺構群の調査を行った。Ｅ・Ｆ－２・３のピット群は、直径120～140cm、深さ40～80cmと規模の大きいもので、覆土中より少量ながら土師器、須恵器片が出土した。しかし、覆土上面では土師質土器が出土しているものもあり、年代の決定には至らなかった。Ｄ－１・２・３の大形ピットは直径 160cm、深さ80cm位と規模が大きいが、遺物は極めて少ない。また、Ｄ－２で大形ピットと重複する形で、直径30cm、深さ40～50cmの柱穴と思われるピットがいくつか確認されたが、建物跡と判断するには至らなかった。なお、Ｄ－２の遺構確認の際、刀子が１点出土している。

引き続きＢ・Ｃ－２・３の遺構発掘を予定していたが、晴天続きにより地山面が極めて乾燥したため、後日行うこととし、６月19日より７月１日まで、水田（4289・4284－１）の遺物包含層の掘り下げ、一部遺構発掘を行った。Ｄ－４では、遺構は少ないものの内耳土器片等の中世遺物が多量に出土した。また、このグリッド内に、Ｂ・Ｃ－２で検出された水路状の遺構がＣ－３・Ｄ－３を経てつながっているのが確認された。６月25日～30日にかけてＥ・Ｆ－４と５の一部の遺物包含層の掘り下げと遺構発掘を行った。この部分では、Ｅ・Ｆ－２・３から集中して見られる土坑状の大形ピットと竪穴住居跡（第１号住居跡）が発掘され、竪穴住居跡を大形ピットが切る重複関係が見られる。１号住は、辺 3.9ｍ位の方形で、周溝、柱穴をもつ。カマドは大形ピットに切られ、焼土が散在する状況を呈していた。また、床面の低い部は粘土を貼って整えてあった。遺物には土師器、須恵器片が見られ、なかでも内面暗文付の土師器片は年代を決定する上で、大きな手掛りとなった。次に、土坑状の大形ピットは十数基確認され直径が 120cmと 150～ 160cm位で深さは60～80cmとなっている。

７月２日から８月５日まで、水田（4285・4286）の遺物包含層の掘り下げ及び遺構発掘を行った。その間の７月８日、Ｂ・Ｃ－２の配石下部の落ち込みを調査し、東へのびる沢であることが判明した。遺物は平安時代のみで、中世には埋まっていたことが確認された。また、７月24日にはＢ・Ｃ－２・３、７月27日にはＢ・Ｃ－３・４の未発掘部分の遺構発掘を行った。Ｂ・Ｃ－６・７では、極めて多数のピットが発掘され、形状から多くは柱穴と考えられ、掘立柱

建物跡の存在が予想されたが、配列は不明である。遺物は中世が主体であった。７月８日、Ｃ・Ｄ－６の遺構発掘で竪穴住居跡（第２号住居跡）が確認された。床面には焼土及び屋根材と考えられる炭化物が多く見られ、火災にあったものと推定された。遺物は極めて少なかったが１号住と同時期のものであった。また、２号住はＢ・Ｃ－２からＤ－４を経て続く溝に切られていた。７月９日、Ｄ－６の遺物包含層より内耳土器の破片が多量に発掘され、それに混じって楕円形の安山岩を加工し大きな凹みとした石器が３点出土した。縄文時代の凹石とは全く異なった特徴を見せている。７月15日、Ｃ－５で竪穴住居跡（第３号住居跡）を発掘した。辺４.2× 3.6mで周溝と柱穴がある。床面は１号住同様に一部粘土貼りとなっている。カマドは粘土と偏平礫を組み合わせて構築している。遺物は、１号住同様に花弁状暗文付土師器や須恵器のほかに、内面黒色処理された土師器坏が出土している。７月20日～21日、Ｄ・Ｅ－６、Ｅ・Ｆ－５にかけて蛇行しながら走る幅10m程度の水性堆積層が確認され、Ｆ－５で深さ 1.5mまで掘り下げたところ、砂層と黒色粘性土の互層となっており、洪水における河道の跡と判断された。河道堆積層上面より中世遺物が出土している。７月21日、Ｄ－６の２号住北西側に、上述した河道によって大半が削られた竪穴住居跡（第４号住居跡）が検出された。７月23日、Ｂ－６の遺構発掘で辺 1.5～ 2.3mの方形の小形竪穴住居跡風の遺構を３基発掘した。若干の焼土も伴っているが、柱穴等が判然とせず、小竪穴状遺構と呼んだ。また、Ｂ－６・Ｃ－６ではピットの数量が多く、10m四方あたり 150基にも達した。７月30日より、沢筋より北側のＤ・Ｅ－６・７の遺物包含層の掘り下げ、遺構確認を行ったが、沢筋堆積層上面からは内耳土器・土師質土器等の中世遺物の出土は見たものの、遺構は全く検出されなかった。

８月３日から11日まで、メインセクションベルトの断面図作成及び各住居跡、ピット等の断面図作成ならびに遺構の完掘作業を行った。８月17日～20日、航空写真測量による平面図作成のための撮影及び補足調査を行い、８月21日、発掘調査を完了し引渡しを行った。

なお、発掘面積は坂下遺跡－2820㎡、下地区－ 870㎡、合計3690㎡である。

昭和62年８月27日付け、白教発第８－13号で長坂警察署長に、遺失物法第13条に基づき、埋蔵物発見届を提出した。

第Ⅱ章　位　置　と　環　境

第１節　自　然　環　境

坂下遺跡の所在地は、山梨県北巨摩郡白州町白須字所帯4288番地他にあって、南西側を国道20号線が南東より北西に走っている。遺跡から南東 500ｍに白須上集落、北西1000ｍに前沢集落の中心がある。また、釜無川は北東 600ｍを北西より南東に流れている。標高は 605～ 607ｍである。

本遺跡周辺の地形は、釜無川によって形成された低位段丘・中位段丘・高位段丘の三面の河岸段丘を基盤としているが、※注1 前沢側では田沢川の扇状地堆積物が厚く段丘面を覆い、各面の境が不明瞭になっている。田沢川は、主峰甲斐駒ヶ岳を中心とする巨摩山地の主脈より東に分岐した先端の日向山を源流とする河川で、現在は前沢集落の西側で神宮川に合流している。しかし、以前には大雨ごとに流れを変える暴れ川であったことが、段丘面に刻まれた河道跡によって知ることができる。本遺跡の西側の崖線も、田沢川が山地から流れ出た後、現在のように北に曲がらず、そのまま東へ流れ遺跡西側の高位段丘面を切って、釜無川へ流れ込んだ際の名残りである。

本遺跡を含む低位段丘面は、ほとんどが水田であり、中位段丘面は、白須上集落・前沢集落の国道より西側の部分に見られ、さらに、高位段丘面は本遺跡の西側で比高差40～50ｍ位の高台となり、畑や果樹園となっている。なお、低位段丘面のみローム層は見られない。

第Ⅱ節　歴　史　的　環　境

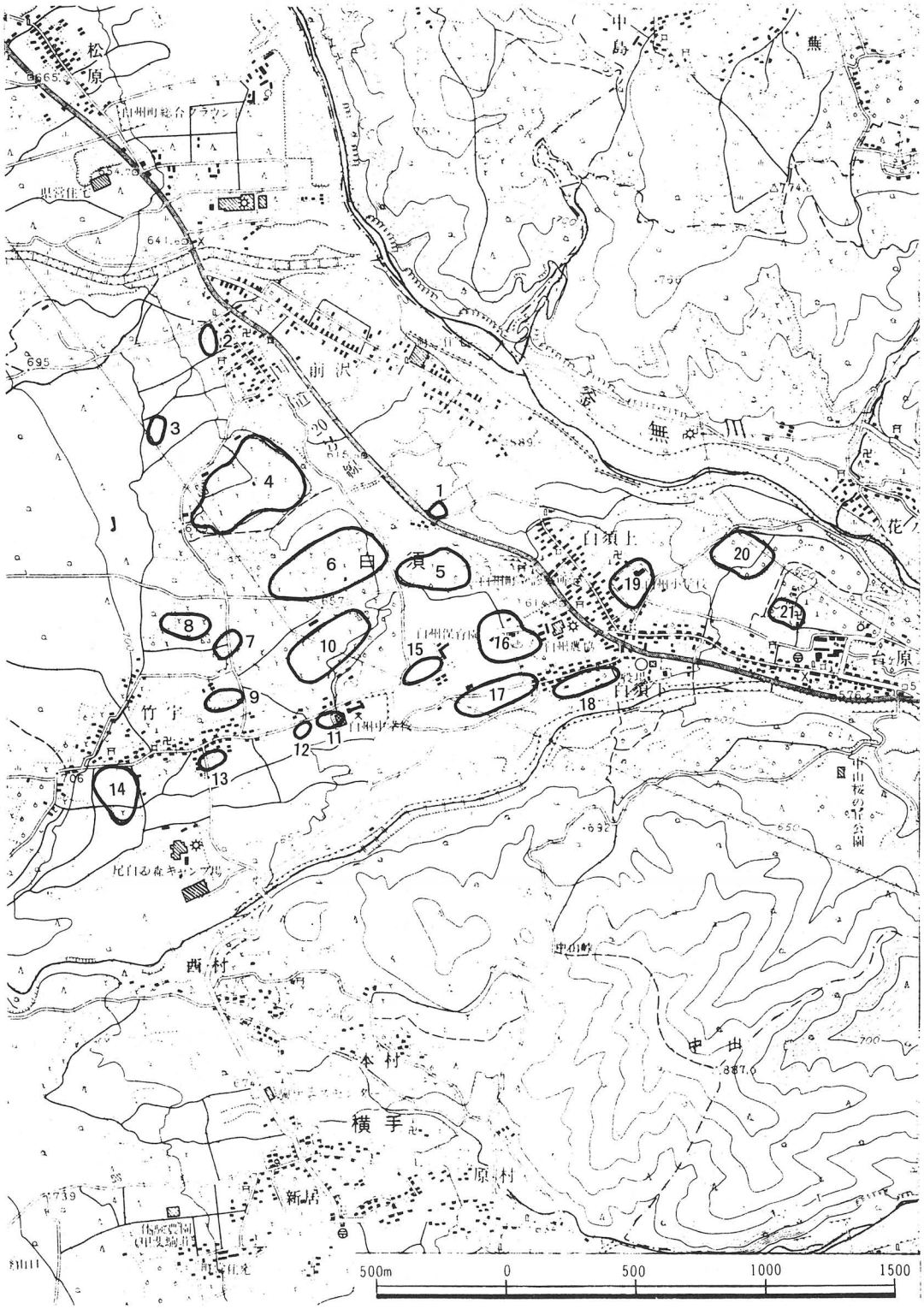
白州町内では、昭和59年の根古屋遺跡の調査例しかないため、個々の詳細については不明であるが、分布調査等により現在60ヵ所の遺跡が知られている。

本遺跡周辺の主な遺跡をあげてみると、※注2 縄文・平安・中世にかかる北原遺跡、特に縄文土器・平安時代の土師器・灰釉陶器が顕著である。北原遺跡の南には大除遺跡群、竹宇遺跡群と広がり、各地点ごとに縄文前期諸磯式・中期五領ヶ台式土器、平安時代・中世の遺物が採集される。これらは、いずれも高位段丘面に立地し、規模の大きな遺跡と推定される。

また、中位段丘面には、平安時代の土師器が多量に散布している中村№１遺跡、中世の遺物が多く館跡の可能性が強い中村№２遺跡、さらに、縄文前期・平安時代・中世の遺物が見られる南田遺跡等の遺跡が知られている。

以上のように、白須地区には多く遺跡が知られているが、ほかにも、縄文中期曽利式を主体とする竹宇遺跡、桜井№１遺跡、縄文前期及び後期を中心とする桜井№２遺跡、縄文前期黒浜

※注1　野出道孝　1986　「第１章　地形と地質」『白州町誌』　白州町
※注2　新津　健　1986　「第１章　考　古」『白州町誌』　白州町



第６図　坂下遺跡と周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	主な時代	11	堰口	白須字堰口	縄文(前)・平安
1	坂下	白須字所帯	平安・中世	12	堰口東	〃 字 〃	平安・中世
2	竹花	〃 字竹花	縄文(中)・中世	13	桜井1	〃 字桜井	縄文(中)
3	雑木	〃 字雑木	縄文(中)	14	桜井2	〃 字 〃	縄文(前・後)
4	北原	〃 字北原	縄文・平安・中世	15	中村1	〃 字中村	縄文・平安・中世
5	大除1	〃 字大除	中世	16	中村2	〃 字 〃	縄文・平安・中世
6	大除2	〃 字 〃	縄文(中)・平安・中世	17	南田	〃 字南田・柳原	縄文(前・中)・平安・中世
7	大除3	〃 字 〃	縄文(前)	18	柳原	〃 字柳原	縄文(前・中)
8	大除4	〃 字 〃	縄文・中世	19	旧菅原小学校	〃	縄文(中)
9	竹宇1	〃 字竹宇	縄文(中)・中世	20	大久保	〃 字大久保	縄文(中)・中世
10	竹宇2	〃 字 〃	縄文(中)・平安・中世	21	中台2	台ヶ原字中台	縄文(中)・平安

式・中期曽利式の柳原遺跡、縄文中期及び平安時代の大久保遺跡などが確認されている。さらに、旧菅原小学校（現白州小学校）建設の際に、多量の土器・石器が発見されたと伝えられており、それらの資料から縄文中期全体にわたる大規模な集落遺跡であったことが推定される。

現時点で知られている範囲における白須地区の遺跡は、縄文時代前期初頭（花積下層式）・縄文前期（黒浜式・諸磯式）・同中期（五領ヶ台式～曽利Ⅴ式）・同後期・平安時代・中世と空白の時期があるものの、長期間にわたって生活が営まれたことを知ることができる。また、広い段丘面上に立地し、遺物の分布範囲も広いことから、規模の大きい拠点的な集落遺跡であったものと考えられる。

次に、文献資料から見ると、平安時代に甲斐たは三つの御牧が設置され、そのうちの一つ真衣野牧が白州町から武川村にかけての駒ヶ岳山麓に置かれたと推定されている。[※注1] 御牧は、周囲は格（木の柵）で囲うこととされ、境界を明確化するためや馬の逃亡、外敵の侵入防止の意味をもっていたものと考えられる。しかし、維持は大変だったらしく、信濃国では、格の外に涅（堀）を設けたにもかかわらず、火災や盗難によって格が壊され、その改修が思うにまかせず馬が逃亡した状況が伝えられている。真衣野牧でも同様な状況が推測される。そのため、定例の期日に貢進しない違期や定数を欠く減例貢が恒例化し、中央政府から国司に貢馬を厳重に命じているが、実効のほどは疑しい。そして、武士団の胎頭に伴って、11世紀の末に御牧は記録上から消え去っている。

真衣野牧の範囲が白州町のどのあたりまで広がっていたのかは不明であるが、私牧化されていったことは十分に推測できる。後に武川筋に分封された教来石氏・横手氏・白須氏等の武川衆の支配地は、この牧を中核に形成されていったものと考えられる。白須地区には白須氏が入ったとされるが、不明な点が多い。

戦国時代に入ると、白須地区には馬場民部信春の居域があったと伝えられている。北巨摩郡勢一班[※注2]によると、「白須西方の宏野に、馬場美濃守信房（民部信春）の宅跡がある。東西大凡二町余、南北二町、今は全部田畑となっているが、四周に濠跡があり、尚邸内に一条の濠を通

した跡がある。…〈中略〉…殿町と称する部落よる竹生（竹宇）に通ずる古道に沿いたる地に、門があったと見え今に礎石が存してある。」と記され、昭和初期においても遺構が確認されている。なお、現在は水田の整地で判然としない。馬場民部は、元武川衆の教来石民部と称していたが、天文十五年、抜擢されて五十騎の士隊将となり、姓も馬場と改めたものである。※注3 所領は教来石・白須・台ヶ原・三吹・小淵沢等である。※注4

このように、白須地区は、縄文時代には拠点になる集落遺跡・平安時代には真衣野牧に関連した遺跡が数多く見られ、さらに中世では馬場氏の居城を中心として集落が点在していたものと考えられる。

※注1　秋山　敬　1986　「第２章　古代」　『白州町誌』　白州町
※注2　山梨県北巨摩郡教育会　1930　『北巨摩郡勢勢一斑』
※注３　甲斐叢書刊行会　1974　「甲斐国志」　『甲斐叢書　12巻』
※注４　注３に同じ

第Ⅲ節　層　　序（第７・８図）

坂下遺跡は、南西から東北にむかって緩やかに傾斜した低位段丘面上に立地している。現況はすべて水田である。

基本層序は、水田造成時及び拡張時における土手の部分を除いては、極めて簡単な構成となっている。

第Ⅰ層：耕作土　水田の耕土で層厚は15～20cmとなっている。

第Ⅱ層：床土　鉄分を含む赤褐色の固くしまった層で、現床土（Ⅱａ）の層厚10～15cm、水田拡張により埋めたてられた部分に見られる旧床土（Ⅱｂ）の層厚25cmである。

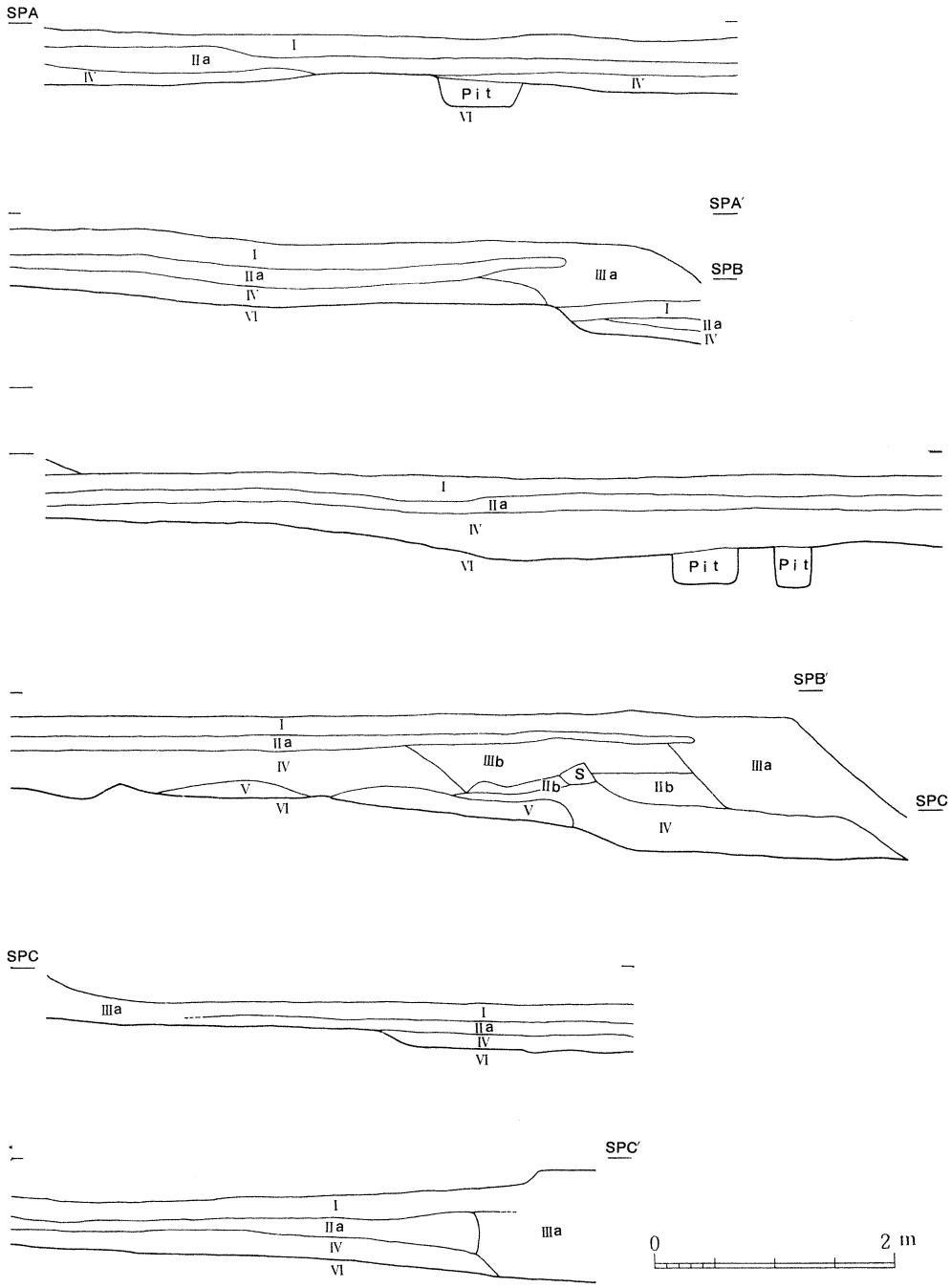
第Ⅲ層：埋土　水田の土手部分の埋土（Ⅲａ）は、低位段丘面には見られないロームと削土した地山を混ぜ合わせ、さらに削土時に出た礫を石垣状ないしは点々と並べている。なお、埋土（Ⅲａ）と耕作土の境目ははっきりしない。水田拡張時に旧水田面を埋めたてた部分に見られる埋土（Ⅲｂ）は、耕作土と同様に粘性をもつ。

第Ⅳ層：暗褐色砂質土　遺物包含層である。層厚は最も大きい部分で35～40cmとなっているので、これより層の薄い部分は、大なり小なり水田造成時等において削土を受けた部分と考えられる。

第Ⅴ層：鉄分を含む赤褐色の砂質土　水の流れた痕跡のある部分に見られる。

第Ⅵ層：低位段丘面の地山　黒褐色の固くしまった砂質層である。

本遺跡において、Ⅳ層（遺物包含層）からは、若干の縄文時代（前期末・中期前半・中期末）の土器片・石器、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器、及び中世の内耳土器・土師質土器・陶器類・石器・鉄器等が出土している。なお、時代別による出土位置の上下関係は見られない。また、遺構の検出面はⅥ層（地山）である。



第７図　坂下遺跡土層図（１：60）

第Ⅲ章　遺　構　と　遺　物

坂下遺跡は、第Ⅱ章第３節の「層序」でも述べたように、地山面まで削平して水田造成を行った部分が各水田で確認されている。さらに、その上層にある遺物包含層もかなりの範囲で全部ないしはその一部が削土されている。そのために、遺物もかなりの量が失われたものと考えられる。また、遺構も上部が削平されて、底面付近が残存するものもある。

さて、発掘した遺構や遺物から坂下遺跡を概観すると、縄文時代・平安時代・中世の遺跡であったことがわかる。

縄文時代　遺物量は極めて少ないが、ほぼ全域より縄文土器片や打石斧・磨石斧の石器類が出土している。特に打石斧はＤ・Ｅ－２・３に集中している。縄文土器の年代は、前期後半～中期初頭と中期末に分けられる。

遺構は判然としない。

平安時代　中世とともに本遺跡の主体をなす時代で、遺物量も比較的多く、遺跡全体より出土している。遺構は竪穴住居跡等が検出されている。

遺構は、竪穴住居跡が４基、小形の竪穴住居跡と推定される小竪穴が３基、掘立柱建物跡が１基、ほかに多数の柱穴状のピット群が確認されている。なお、Ｄ－１・２でも掘立柱建物跡の一部と見られる柱穴群が検出されているが、後述する中世の土坑群に切られているため不明部分が多く、建物跡として抽出できなかった。遺構からの出土遺物は住居跡を除けば極めて少ない。

遺物は、住居跡を中心として出土している。その主なものは、土師器の坏・皿・甕、須恵器の坏・坏蓋・甕、灰釉陶器の埦・壷、羽釜等が見られる。なお、土師器の坏には、内面に暗文を施したものや内面を黒色処理したものが目立つ。また、特殊なものとしては墨書土器が数点出土している。

中世　平安時代とともに本遺跡の主体をなす時代で、遺物量も多いが、多数のピット群が検出されているＢ・Ｃ－５・６・７では、遺物は極めて少ない。

遺構は、Ｂ－２からＥ－５を経てＤ－６に至る石組を含む水路状の遺構及び墓坑と見られる土坑が50基検出されている。なお、土坑内からはほとんど遺物は出土せず、上面より土師質土器が出土している。水路状遺構内からは内耳土器等の中世遺物がかなり出土している。

遺物は、水路状の遺構及びその周辺を中心として出土しており、内耳土器、土師質土器、擂鉢、天目茶碗等の陶器類、古銭、凹石状の石器、刀子等の鉄器、さらに五輪塔の残欠等が出土している。特に、内耳土器は量的にも多く、実測図としたものが26点に及んでいる。また、凹石状の石器も注目される。なお、特殊なものとして、底部に足をもつ土師質の鉢の破片が出土している。

調査区域外ではあるが、隣接する国道20号線の工事において発見された五輪塔群は、本遺跡の性格づけに意味をもつものと考える。

第８図　坂下遺跡遺構配置図（１：300）

第Ⅰ節　縄文時代の土器・石器

縄文土器（第９・10図、図版13）

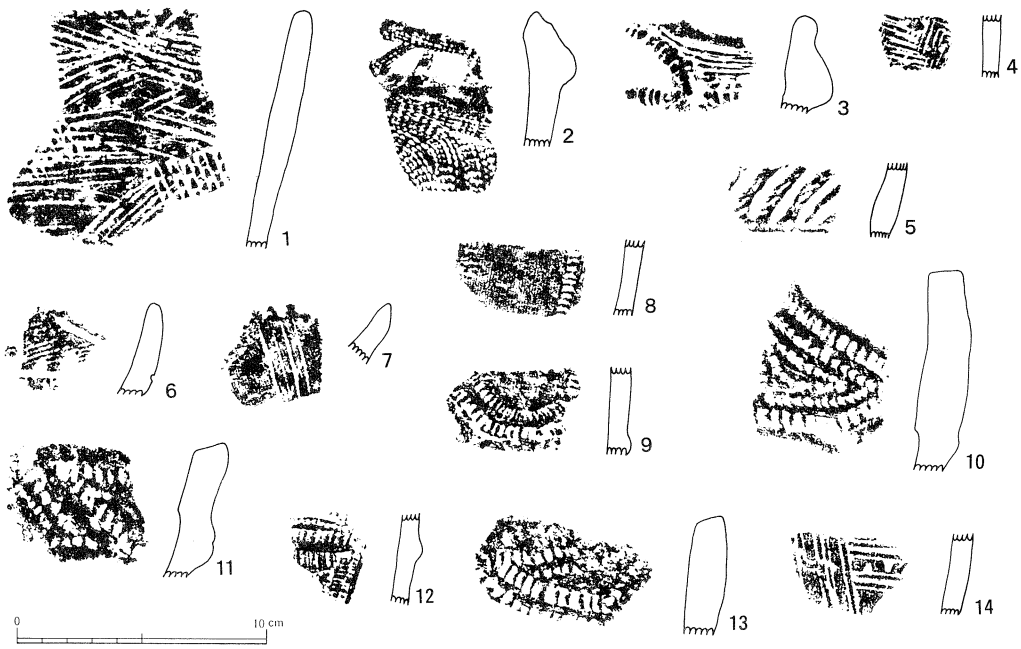
１．口縁が外に開く器形で、胎土に石英・黒雲母を含む。せいけいでは内面にヘラ調整痕が見られる。施文は半割竹管状工具を用いて、地文は数条の沈線を交互に施し綾杉状としている。この地文の沈線は竹管状工具を斜めにし、片側の線を深く刻んでいる。また、口縁端の全体と地文上の一部には結節状浮線文が施されている。

２．波状口縁で内彎する器形で、胎土に金雲母を含む。せいけいでは口縁部に粘土帯を貼り付けて厚くし、透し彫状の表現が見られる。内面はヘラ調整されている。施文は口縁端・透し彫状部・胴部にわたり、細かい三角陰刻文をすき間なく施している。

３．波状口縁の外に開く器形で、胎土に石英を含む。せいけいでは口縁端及び口縁下部を厚くし、それらを隆帯でつないでいる。この凸部に結節状の浮線文を施している。内面は調整痕が見られ、煤が付着している。

４．半割竹管状工具による綾杉状の文様が施されている。内面はよく磨かれている。　５．口縁下半部の破片で若干内彎し、胎土に石英を含む。施文は地文の縄文を施した後、竹管の丸い部分で沈刻している。

６．山形をもつ波状口縁で、胎土に金雲母を多量に含む。施文は縄文を地文とし、沈線・刺突を施す。口縁端は刻目を施す。　７．山形をもつ波状口縁で浅鉢と考えられる。胎土は金雲母を多量に含む。文様は口縁端から内側にかけて深い刻目を施す。また、山形の部の外面には



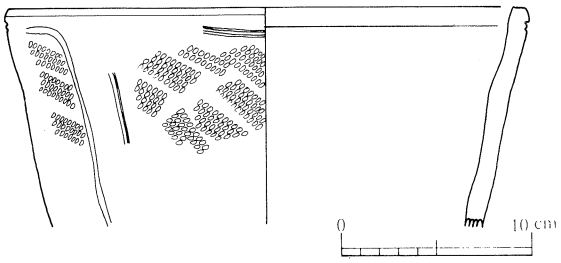
第９図　グリッド出土縄文土器（１：３）

半割竹管文が２条垂下している。

８～13は区画文の土器群で、胎土に金雲母は見られない。　８．胴部の破片で、沈線で区画した内側に押引文を施す。　９．口縁部下半の破片でやや内彎する。隆線で区画し、押引文を二列施す。　10．波状口線で、隆線で区画し、キャタピラ文を施文し、その内側は三角押引文を充填する。　11．口縁部破片でやや内彎する。隆線で区画し、キャタピラ文ないしは三角押引文で区画する。　12．胴部破片で、隆線で区画し、内側にキャタピラ文を施文し、その内側は三角押引文を充填する。　13．口縁部破片であるが磨滅が著しい。キャタピラ文を施文した内側に三角押引文を施す。

14．胴部破片で、胎土に若干金雲母を含む。施文は半割竹管状工具による沈線及び刺突で構成されている。

以上、第９図の縄文土器は、縄文時代前期末葉から中期前半の所産である。



第10図　グリッド出土縄文土器(1:4)

第10図の縄文土器は、口縁がわずかに内彎する器形で、胎土に石英・雲母を含む。せいけいでは内面に輪積痕、横位の調整痕が見られる。外面は比較的よく磨かれている。施文は口縁直下に浅い半割竹管によるものと見られる沈線をめぐらし、その下に枠状区画文を配している。区画内のほぼ全体に縄文を充填し、一部は区画の外にまで施文されている。

この土器は、縄文時代中期末葉に比定される。

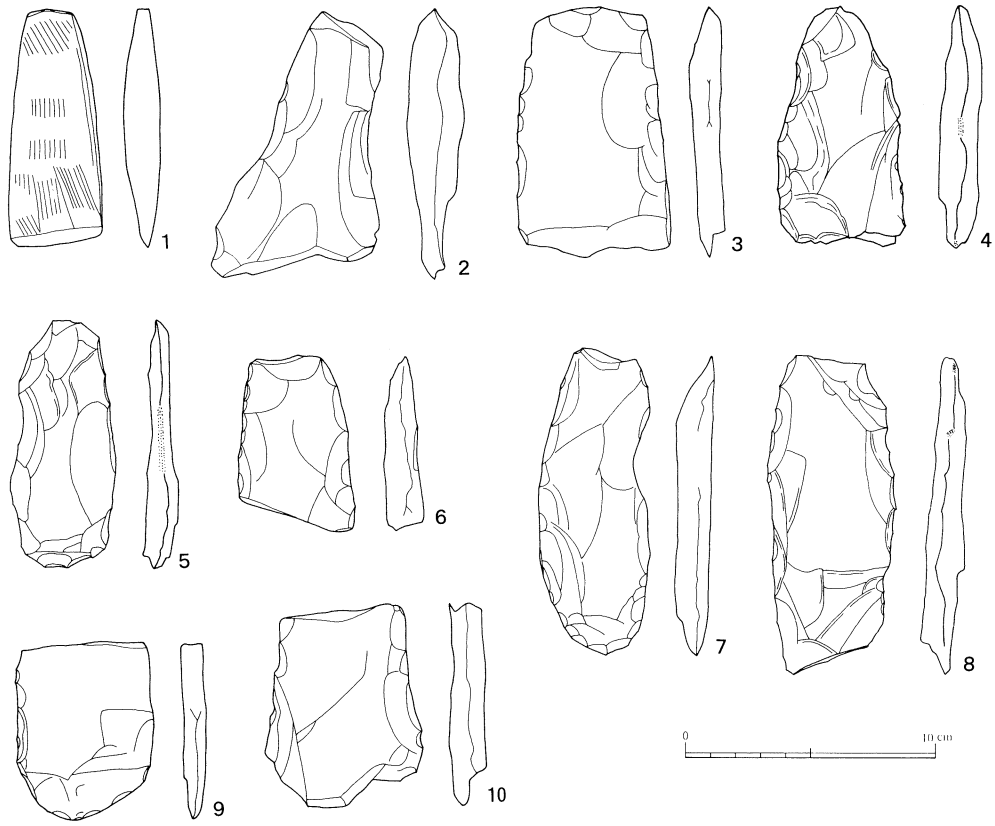
縄文時代石器（第11図・図版13）

縄文時代の石器は破片も含めて10点出土し、１・２を除けば、他はすべてＤ・Ｅ－２・３に集中している。

１．定角式磨製石斧である。全体によく研磨されており、石材は蛇紋岩を用いている。刃部は一部欠損しているが、入念な研磨により片刃に仕上げられている。大きさは長さ9.0～9.5cm、刃部幅 3.7cm、最大厚は 1.5cmとなっている。各面には擦痕が見られるが、そのうち基部付近には斜めに細かく入る研磨痕があり、刃部から石器中ほどにかけては刃部にほぼ直角に入る多数の使用痕が観察される。

２．撥形打製石斧で刃部が欠けている。石材は粘板岩質のものを用いている。大きさは長さ11.5cm、最大幅 6.5cmである。加工の状態は基部と刃部とで異なり、境目となる身の中ほどに両側より抉りが入る。基部は幅 3.5cm、最大厚 2.5cmと厚く加工され、礫面も残っている。刃部は裏面に大きな剥離が見られる。

Ｄ・Ｅ－２・３から出土した３～10のうち、ほぼ完形品は４・５・７・８で、３・６は基部のみ、９・10は先端部のみである。石材はいずれも粘板岩質のものを用いている。



第11図　グリッド出土縄文時代石器（１：３）

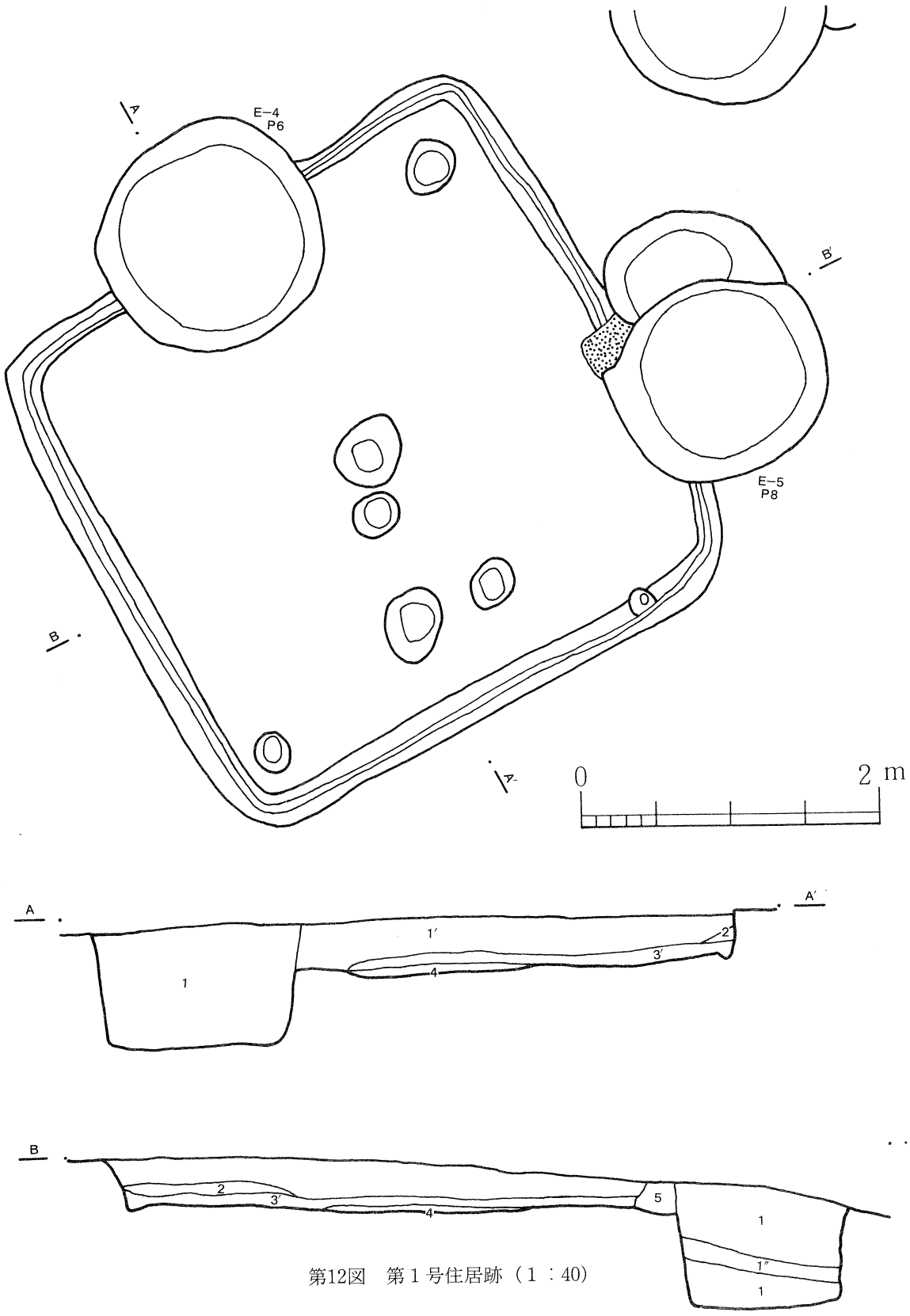
４．長さ 9.3cm、最大幅 5.0cmで、先端部が欠けている。加工の状態は両側より剥離調整を行っている。　５．長さ 9.7cm、最大幅 4.3cmである。加工の状態は両側より剥離を行い外形を整えた後、左側をさらに剥離調整し、鋭利に仕上げている。　７．長さ12.3cm、最大幅 4.3cmである。基部は礫面を残し、刃部との境目に右からの抉りがある。この抉りより先端までは両側とも鋭利な刃部となっている。加工の状態は先端部から左側に階段状の剥離が見られる。

８．長さ12.7cm、最大幅 5.2cmである。正面・裏面ともに上下左右の各方向より不規則に剥離が見られる。左側に鋭利な部分がある。

３．長さ 9.8cm、最大幅 6.2cmで、左側に両面より細かい剥離調整を行い鋭利になっている。

６．基部のみで、長さ 7.0nm、最大幅 4.7cm、両側より剥離調整している。　９．先端部破片で、先端から左側を剥離調整により鋭利につくり出している。　10．先端刃部は欠けているが左右に調整痕が見られる。

３～10の打製石斧と呼ばれているもののなかには、３・５・８・９のように片側に鋭利な刃部をもつものがあり、用途を異にする石器なのか、製作技法上の結果なのか検討を必要とする。



第12図　第１号住居跡（１：40）

〔土　層　説　明〕

第１号住居跡	1′	暗褐色砂質土	焼土・木炭・粘土を含む	Ｅ－５　Ｐ８	1	暗褐色砂質土
	2	横褐色土	ロームブロックを含む		1″	暗褐色砂質土
	3′	黒褐色土	焼土・木炭を多量に含む			カマドを切った際の焼土・粘土を多量に含む。
	4	貼　　床	黄褐色粘土			
	5	カマド	焼土・粘土	Ｅ－４　Ｐ６	1	暗褐色砂質土

第Ⅱ節　平安時代の竪穴住居跡と遺物

第１号住居跡（第12～14図、図版６・14）

位　置　Ｅ－４－17・18・22・23、Ｅ－５－２・３に位置する。比較的平坦な場所に占地するが、西から東にわずかに傾斜している。この地区には土坑群があり、その２基と重複している。重複部分を除けば、水田造成時の削平は受けておらず、保存状態は良好である。

覆　土　壁穴住居跡は地山面を掘り込んで形成されている。北側と東側のカマド部が土坑によって切られている。土坑の覆土はいずれも暗褐色砂質土であるが、カマドを切った土坑では、焼土やカマドの壁材である黄褐色粘土の混在した層が見られる。住居跡の第1′層は暗褐色砂質土で焼土・木炭・粘土粒を含む。第２層はロームブロックを含む黄褐色土である。第３層は黒褐色土で焼土・木炭を多量に含み、火災にあった可能性が強い。

形　状　3.9m×3.9mの隅丸の方形である。各辺に歪みはほとんどみられない。

壁　高　北東の壁高のみ20cmと低いが、他の三辺は30cm程度となっている。壁の立ち上がりは、南西壁のみに若干傾斜した部分が見られるが、全体には垂直に近い状態となっている。

周　溝　カマド部を除く、すべての壁下に１本の周溝がある。周溝の幅は15～20cm、深さは４～５cmで浅いＵ字溝となっている。

床　面　砂質層のため、住居構築時の凹地が目立つが、その大半を黄褐色の粘土により貼床し、平坦な床面にしている。

柱　穴　４本柱と考えられるが、南・北隅の２本が検出されたのみで、東・西隅は判然としない。検出された２本は、直径20～30cm、深さ10～13cmとなっている。

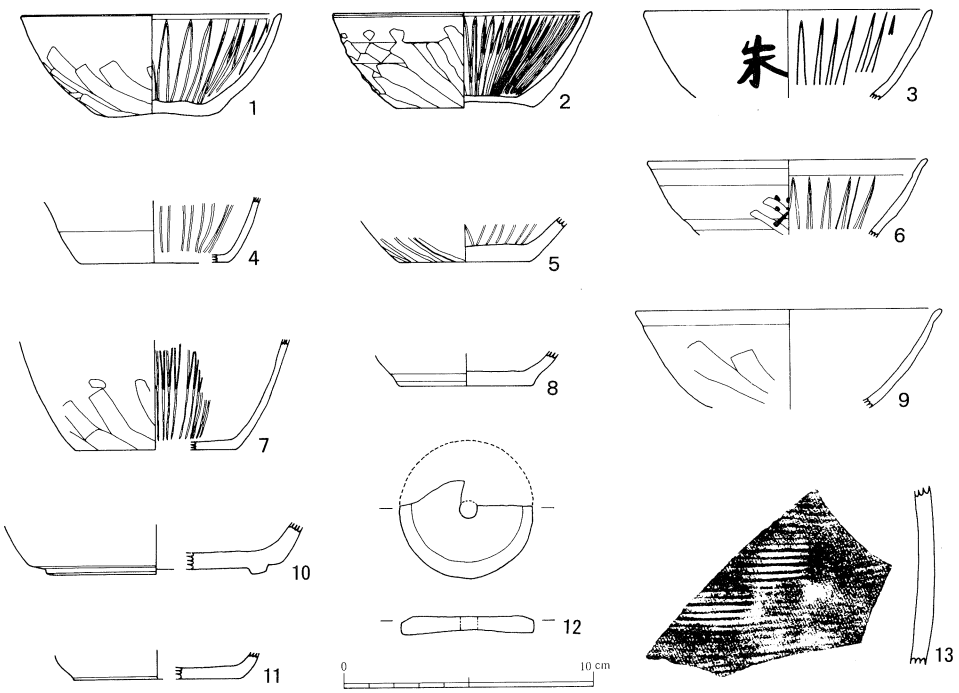
カマド　北東壁を切り込んで構築されているが、土坑により大半が切られている。残存部分で見る限り、礫は使用せず粘土の積み上げにより構築されたものと思われる。床面下への掘り下げは残存部で４～５cmと浅い。カマド内部は焼土と剥落した粘土の混在した層が厚く堆積しており、最厚部は20cmとなっている。

遺物の出土状況　遺物は床面直上の第３層ないしは第1′層の下部の第３層直上より出土している。完形品は全く見られず、復元可能な土器や大形破片の土器もわずかであった。遺物の出土位置はカマドより南側の住居跡四半分の範囲に集中している。

所　見　住居跡の覆土第２層のロームブロックを含む黄褐色土は、本遺跡の所在する低位段丘面には見られないため、中位段丘面ないしは高位段丘面より搬入したものである。また、火災を受けたと見られる木炭・焼土を多量に含む第３層の上にあることから、住居の屋根の地面に近い部分に塗られていた可能性が強い。

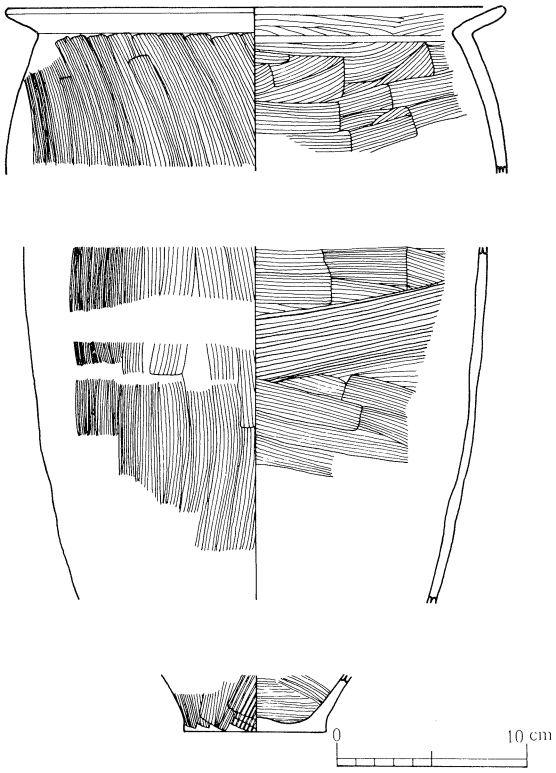
土器

１．床面直上出土。坏。口径10.4cm、器高 4.0cm、底径 4.6cmを測る。内面はロクロ撫で後、暗文を施す。暗文は見込みの一部にも及んでいる。外面はロクロ撫で後、体部下半にヘラ削りを行う。底部は糸切り後、外周部にヘラ削りを行う。底部と体部との稜は明瞭ではない。胎土は精選され、焼成も良好で、明褐色を呈する。　２．床面直上出土。坏。口径10.4cm、器高は 3.8cm、底径 5.6cmを測る。内外面ともロクロ撫で後、内面には暗文を施し、外面はヘラ削りを行う。底部は糸切り後、外周を中心にヘラ削りを行い、底部と体部を明瞭な稜によって区切る。暗文は見込みには及んでいない。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成も良好で、明褐色を呈する。　３．床面直上出土。坏。内面はロクロ撫で後、暗文を施す。外面はロクロ撫でを行う。体部には墨書「朱」がある。胎土は精選され、焼成も良好で、黄褐色を呈する。　４．床面直上出土。坏。内面はロクロ撫で後、暗文を施す。外面はロクロ撫で後、体部下半にヘラ磨きを行っている。胎土は精選され、焼成も良好で、明褐色を呈する。　５．床面直上出土。坏と考えられる。内面はロクロ撫で後、暗文を施す。外面はロクロ撫で後、ヘラ削りを行う。底部は糸切り後、外周を中心にヘラ削りを行い、体部と明瞭を稜をつくり出す。底径は 5.4cmを測る。胎土は精選され、焼成良好で、茶褐色を呈する。　６．床面直上出土。坏。内面はロクロ撫でにより、口縁部と体部を段で区切る。暗文は体部にのみ見られる。外面はロクロ撫で後、体部下半にヘラ削りを行う。体部には墨書がある。胎土は精選され、焼成も良好で、黄褐色を呈する。　７．床面直上出土。坏。内面はロクロ撫で後、暗文を施す。外面はロクロ撫で



第13図　第１号住居跡出土土器（１：３）

後、体部下半及び底部にヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、赤褐色を呈する。8．床面直上出土。坏。内面はロクロ撫で後、暗文を施す。外面はロクロ撫で後、ヘラ削りを行う。底部も糸切り後、ヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、明褐色を呈する。9．床面直上出土。坏。内外面ともロクロ撫で。外面は体部上半までヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、明褐色を呈する。　10．床面直上出土。高台付坏。内外面ともロクロ撫でを行う。底部はナデ調整を行う。胎土は多量の砂粒を含む。焼成は良好で、明褐色を呈する。底部高台内に墨が付着していることから転用硯の可能性がある。　11．床面直上出土。須恵器坏。底部糸切りで、内外面ともにロクロ撫でを行う。　12．床面直上出土。土製紡錘車。上底径 4.4cm、下底径 5.4cm、器高 0.7cm、孔径は 0.7cmを測る。上底は糸切り後、ヘラ削りを行い、斜めの面をもつくり出している。下底及び側面にはナデ調整を行う。胎土は精選され、焼成も良好で、明褐色を呈する。　13．床面直上出土。須恵器甕。内面はロクロ撫で、外面は平行叩き目である。



第14図　第１号住居跡出土土器(1:4)

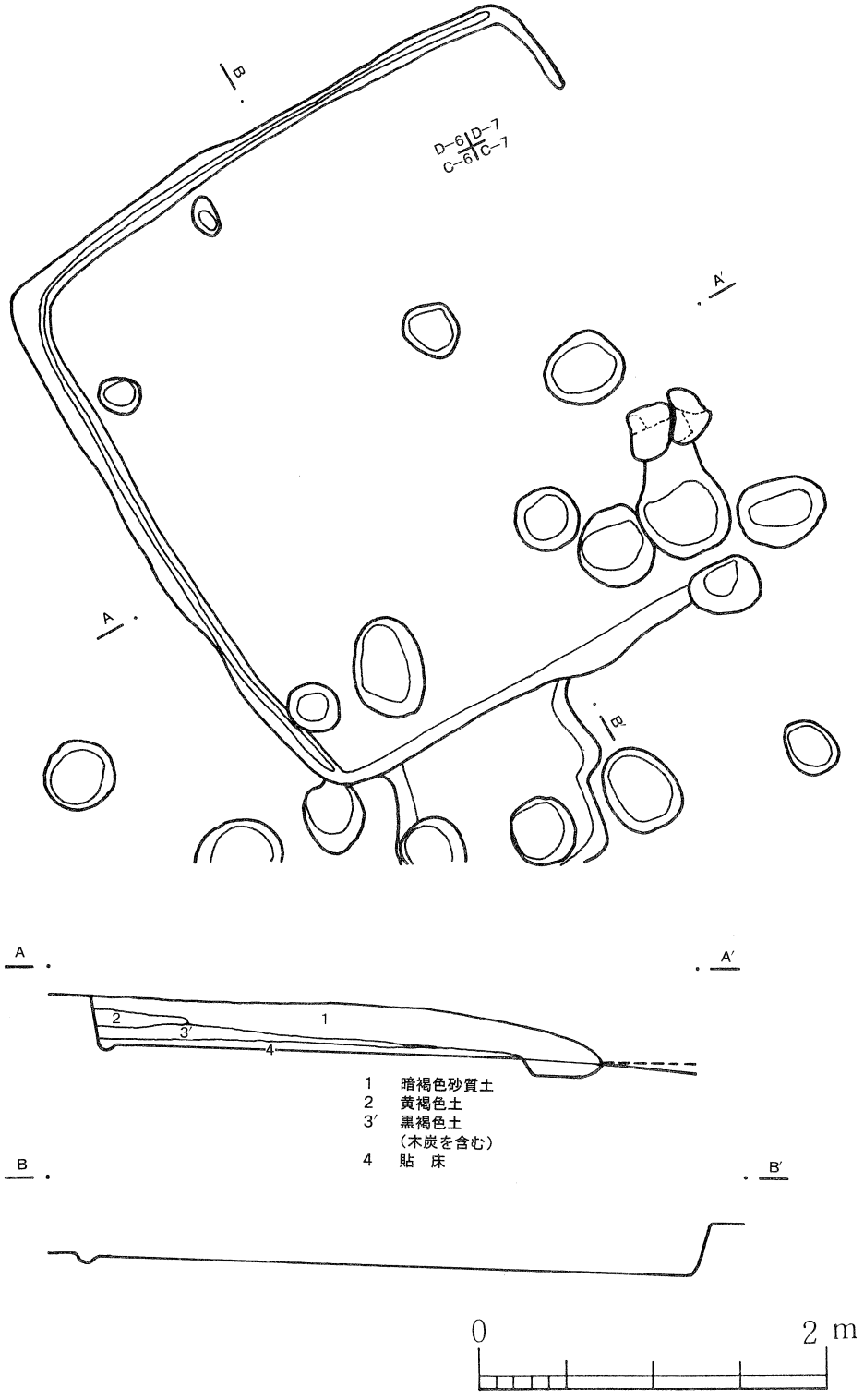
第14図　床面直上出土。甕。同一個体と見られる。口径は推定26.0cm、底径は 8.0cmを測る。非常に薄手の甕で、外面に輪積痕が見られる。内面は横方向のハケ調整後、中段付近にヘラ調整痕・指頭痕が残っている。外面は縦方向のハケ調整を行う。底部は木の葉底である。胎土は多量の石英・金雲母が含まれ、焼成は良好である。内外面に多量の煤が付着している。

小結　暗文付土師器の特徴からみて、本住居跡の年代は９世紀末～10世紀の初頭と考えられる。

第２号住居跡（第15・16図、図版７）

位　置　Ｃ－６－19・20・24・25、Ｃ－７－４・５、Ｄ－６－16・21、Ｄ－７－１にかけて位置する。東から西にかけてわずかに傾斜した場所に占地するが、Ｃ－７、Ｄ－７にかかる住居跡の壁は水田造成により削平されている。また、北西側の壁の一部は中世の水路状遺構により切られている。

覆　土　竪穴住居跡は地山面を掘り込んで形成されているが、カマドを含む北東側の一部が地



第15図　第２号住居跡（１：40）

山まで削土され、覆土の状態は不明である。第1′層は暗褐色砂質土で焼土・木炭粒を含む。第２層はロームブロックを含む黄褐色土である。第３層は黒褐色土で焼土・木炭を多量に含む。特に床面直上では屋根材と考えられる炭化物が多量に分布しているので、火災にあった可能性が極めて強い。

形　状　北東側の壁が不明のため一部推定になるが、 3.6m× 3.6mの方形と考えられる。

壁　高　北東壁及び中世の水路状遺構で削られている北西壁の一部は不明である。残存部分では20～25cm程度となっている。壁の立ち上がりはすべて垂直に近い状態となっている。

周　溝　南西壁から北西壁にかけての壁下に周溝が一本検出されている。周溝の幅は10cm、深さは３～４cmで浅いU字溝となっている。

床　面　砂質層のため、住居構築時の凹地が目立つが、南東側を中心として、その大半を黄褐色粘土及びロームにより貼床をしている。

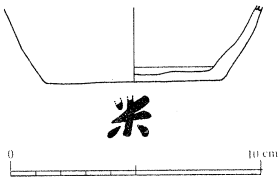
柱　穴　４本柱と考えられるが、北東側の２本は削土されているため検出されず、南及び西側の２本のみ確認された。直径は20～30cm、深さは５～７cmと非常に浅い。柱間寸法は 2.1mとなっている。

カマド　削土により大半がこわされているが、北東側の中央より東に偏った位置に、黄褐色粘土で固めた袖石が２個見られる。袖石は厚さ30cm、高さ20～30cmの礫である。焼土等は削土され、確認されていない。

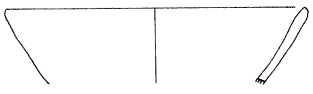
遺物の出土状況　遺物はすべて床面直上より出土しているが、完形品もなく、量的にも非常に少ない。

その他　カマド付近を中心として、いくつかのピットが検出されているが、これらは住居跡に伴うものではなく、南東側のピット群との関係で考えたい。

所　見　本住居跡は第１号住居跡と同様に、火災にあった可能性が強い。また、覆土第２層のロームブロックを含む黄褐色土は、住居の屋根の地面付近に塗られていた可能性が高い。これも第１号住居跡と同様である。



第16図　第２号住居跡出土土器
（１：３）


第17図　第４号住居跡出土土器
（１：３）

土器

本住居跡からの遺物の出土量は少なく、その上、ほとんどが実測できないような小破片であった。そのなかの主な遺物と特徴を示せば、１，土師器坏。内外面ともロクロ撫で後、内面に暗文を施し、外面にはヘラ削りを行う。本住居跡の年代決定のきめ手となった。２，土師器坏。外面はロクロ撫で後、ヘラ磨きを行う。内面は黒色処理されている。３．土師器甕。内面は横方向のハケ調整、指頭痕が見られる。外面は縦方向のハケ調整を行う。

第16図　床面直上出土。須恵器坏。内外面ともにロクロ撫でを行う。底部は糸切りで、墨書「米」がある。

小結　暗文付土師器により、第１号住居跡と同時期と考えられる。

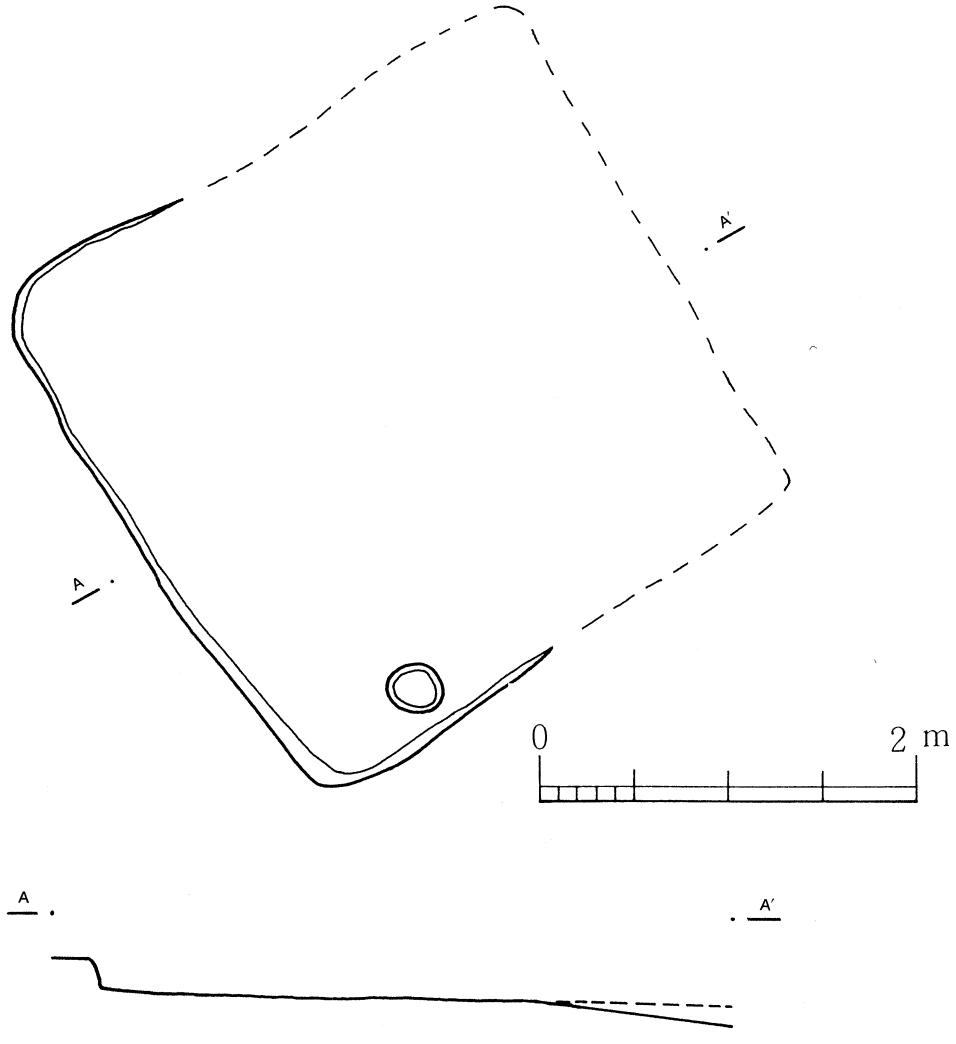
第４号住居跡（第17・18図）

位　置　Ｄ－６－17・18、19・22・23・24に位置する。住居跡の大半は洪水による旧河道で切られている。保存状態は不良である。

覆　土　竪穴住居跡は地山面を掘り込んで形成されている。北東側は旧河道によって切られ、その堆積物が床面の大半を覆っている。住居跡の覆土は、南西側の壁が残っている部分にのみ見られる。層は１層のみで、遺物包含層とほぼ同質の暗褐色砂質土である。

形　状　住居跡の大半が旧河道の影響を受けているため、残存部分の推定で 3.2ｍ× 3.2ｍの方形である。

壁　高　壁は南西側とそれに続く南東側・北西側の一部が残存している。壁は垂直に近い状態



第18図　Ｄ－６　第４号住居跡（１：40）

となっており、最大高は18cmである。

周　溝　検出されなかった。

床　面　比較的しまりがなく、大半が洪水の影響を受けている。

柱　穴　南側の１本のみ確認された。直径30cm、深さ11cmである。

カマド　検出されなかった。

遺物の出土状況　土師器・須恵器の小破片が床面直上より若干出土したのみである。遺物のほとんどは洪水により流されたものと考えられる。

所　見　本住居跡は、遺構・遺物ともそのほとんどが流失しているため、詳細は不明である。

土器

本住居跡からの遺物の出土量は極めて少なく、そのほとんどが小破片である。それらは、土師器・須恵器の坏がほとんどである。

第17図　床面直上出土。須恵器坏。内外面ともに横ナデを行う。

小結　上記の状況から、本住居跡の年代は判然としない。

第３号住居跡（第19～21図、図版８・14）

位　置　Ｃ－５－16・17・21・22に位置する。南西から北東になだらかに傾斜している場所に占地するが、水田造成時に地山の一部も含めて削平されている。しかし、住居跡の遺存状態は比較的良好である。

覆　土　竪穴住居跡は地山面を掘り込んで形成されている。層は１層のみで、遺物包含層とほぼ同質の暗褐色砂質土である。ただし、カマド付近には焼土・木炭粒の分布が見られる。

形　状　長軸 4.2m×短軸 3.6mの長方形を呈す。南東側の壁がやや内彎し、カマド部が若干外側にふくらんでいるため、多小の歪みがある。

壁　高　水田造成時に削平されているため不明である。現況では15～20cmとなっている。立ち上がりは多少の傾斜はあるが、垂直に近い。

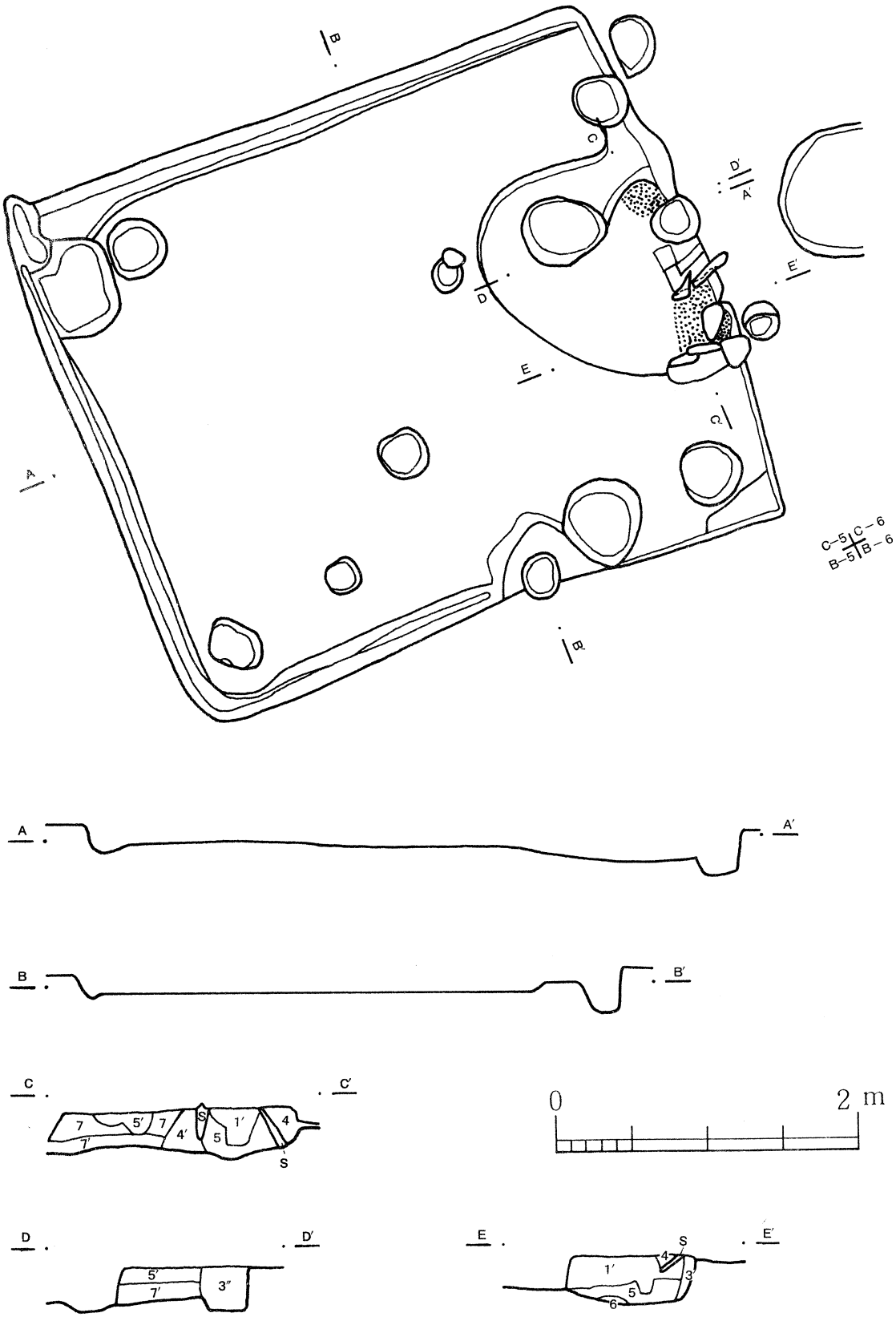
周　溝　北西壁及び南西壁・南東壁下の一部に１本の周溝が認められる。周溝の幅は10～16cm、深さは３～６cmで浅いU字溝となっている。

床　面　砂質層のため、住居構築時の凹地が目立つが、比較的よくしまっている。なお、カマド周辺から南東壁側の周溝の認められなかった部分の床面は、黄褐色の粘土によって貼床にしている。

柱　穴　住居跡の四隅に検出された４本柱が相当する。直径は30～40cm、深さ10～32cmとばらつきが大きい。柱間寸法は長軸方向 3.2m、短軸方向 2.7mである。

カマド　北東壁側に新旧２基のカマド跡が重複している。炊口側には 1.5m×１m、深さ15cmの浅い楕円形の落ち込みが見られる。なお、北西側が新カマド、南東側が旧カマドである。

旧カマドは、残存状況がよく、袖石に30cm×40cmの偏平な礫を用いているほか、天井部にも偏平な礫が使用されている。これらの礫の外側を粘土で固め、カマドを形成している。掘り方は80cm×80cmの円形を呈し、床面下への掘り込みは最深部で10cmである。なお、袖石間は最大



第19図　第３号住居跡（１：40）

〔土　層　説　明〕

●新カマド
3″ 黒褐色砂質土　木炭を多量に含む
5′ 焼土・粘土
7　黄褐色砂質土　粘土を多量に含み・よくしまる
7′ 黄褐色砂質土　粘土・木炭を含む

●旧カマド
1′ 暗褐色砂質土　粘土まじり
5　焼土・粘土　　6　焼土
4　粘土　　カマド壁材
4′ 黄褐色砂質土　粘土を含む・カマド壁材・木炭を多量に含む
3′ 黒褐色砂質土　木炭を多量に含む

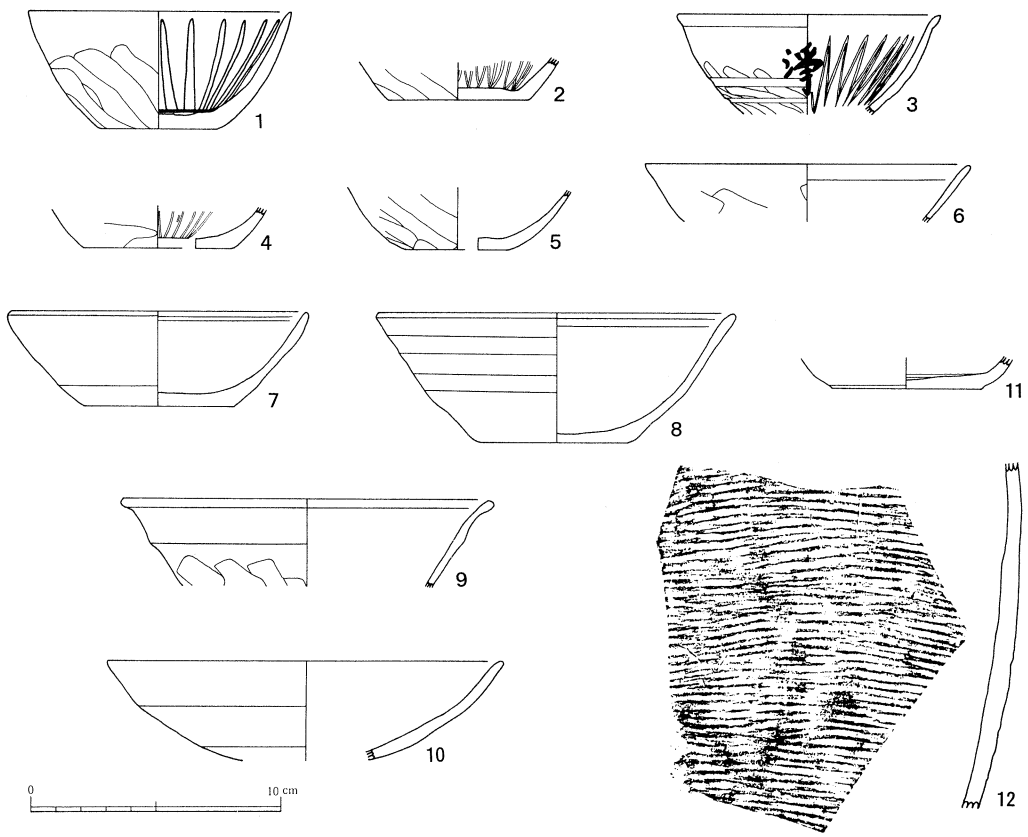
で50cmを測り、内部断面はカマボコ形を呈している。内部は焼土と剥落した粘土の混在した層が厚く堆積しており、最厚部15cmである。

新カマドは、天井部が削土されているため残存状態はよくない。袖部はすべて黄褐色粘土を用いている。床面は住居床面の黄褐色粘土による貼床上に構築されている。内部は焼土と剥落した粘土の混在した層が厚く堆積しており、最大厚は15cmである。

遺物の出土状況　遺物はすべて床面直上より出土している。完形品は全く見られず、復元可能な土器や大形破片の土器もわずかであった。

その他　住居中央付近のピット及び新カマドを切って掘り込まれているピットは、住居より新しい年代のものである。

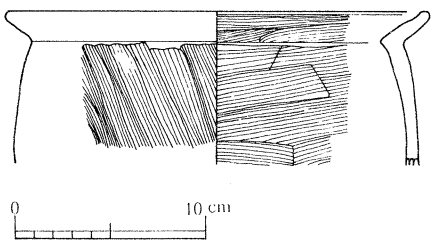
所　見　遺構上部は水田造成時に削平されていたものの、遺存状態は比較的良好である。カマドは新旧２基並んでおり、作りかえられたものと考えられる。



第20図　第３号住居跡出土土器（１：３）

土器

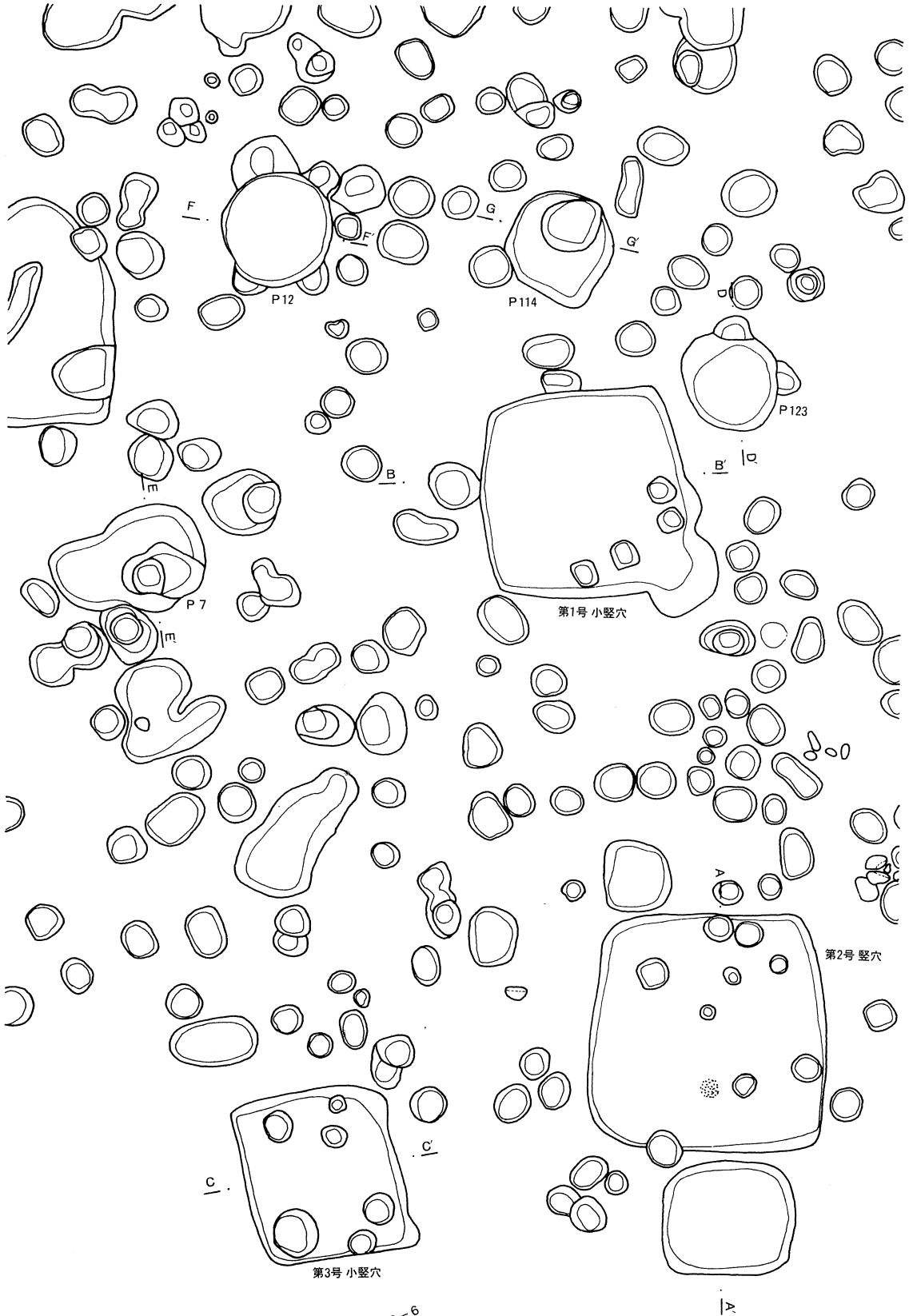
1．床面直上出土。坏。ほぼ完形。口径10.5cm、器高 4.7cm、底径 4.7cmを測る。内面はロクロ撫で後、暗文を施す。暗文は見込みには及んでいない。外面はロクロ撫で後、体部上半までヘラ削りを行う。底部も糸切り後、ヘラ削りを行う。底部と体部との境目の稜は明瞭でない。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成は良好で、明褐色を施する。　2．床面直上出土。坏。内面はロクロ撫で後、暗文を施す。見込みの外周はよく磨かれている。外面及び底部はヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、茶褐色を呈する。　3．床面直上出土。坏。内外面ともロクロ撫で後、内面には暗文を施し、外面は体部下半にヘラ削りを行う。体部には墨書「浄」がある。胎土は精選され、赤色粒子を含む。焼成は良好で、黄褐色を呈する。　4．床面直上出土。坏。内外面ともロクロ撫で後、内面には暗文を施し、外面及び底部はヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、明褐色を呈する。　5．床面直上出土。坏。内面は極めて粗雑なロクロ撫で仕上げで、暗文は見られない。見込み付近に重ね焼き痕と考えられる付着物が見られる。外面はロクロ撫で後、ヘラ削りを強く行っている。底部もヘラ削りを行う。底部と体部との稜は明瞭であるが、丸みがない。胎土はやや粗く、赤色粒子を含む。焼成は良好で、褐色を呈する。　6．床面直上出土。坏。内面はロクロ撫でにより口縁部と体部との境目を作る。外面はロクロ撫で後、体部上半までヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、明褐色を呈する。　7．床面直上出土。黒色土器坏。口径11.6cm、器高 3.8cm、底径 6.0cmを測る。内面は口縁部はヘラ削り、体部及び見込みをヘラ削り・ヘラ磨きによる調整後、黒色処理を行う。外面はロクロ撫でを行う。底部は糸切りを残す。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、黄褐色を呈する。　8．床面直上出土。黒色土器坏。内面は口縁部はヘラ削り、体部はヘラ磨きを行った後、黒色処理する。なお、体部にかすかに暗文が見られる。外面はロクロ撫でを行う。胎土は砂粒をかなり含む。焼成は良好で、体部上半が黒褐色、下半が黄褐色である。9．床面直上出土。黒色土器坏。内面はロクロ撫で後、黒色処理を行う。外面はロクロ撫で後、体部下半にヘラ削りを行う。胎土は赤色粒子や砂粒を含む。焼成は良好で、茶褐色を呈する。10．床面直上出土。皿。内外面ともロクロ撫で後、内面下半にヘラ磨き、外面下半にヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、黄褐色を呈する。　11．床面直上出土。須恵器坏。底部は糸切りを行う。内外面ともロクロ撫でを行う。底部端は強い撫でによる稜で体部とを区切る。焼成は堅緻である。　12．床面直上出土。須恵器甕。外面は平行叩き目、内面は細かい同心円叩き目である。焼成は堅緻である。

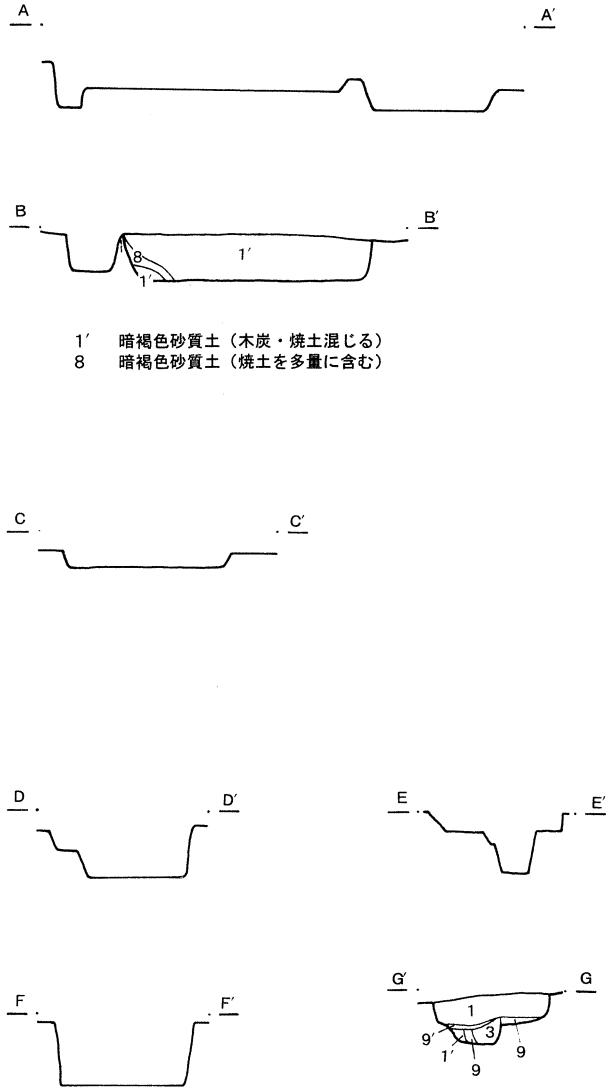


第21図　第３号住居跡出土土器
（１：４）

第21図　床面直上出土。甕。内面は横方向のハケ調整で、中段に若干の指頭痕が残っている。外面は縦方向のハケ調整を行う。胎土は均一で、多量の金雲母を含む。焼成は良好で、茶褐色を呈する。煤の付着はほとんど見られない。

小結　暗文付土師器の特徴から見て、本住居跡の年代は９世紀末～10世紀初頭と考えられる。





第22図　B－6　遺　構　群（1：60）

第Ⅲ節　平安時代の小竪穴

第１号小竪穴（第22図、図版９）

位　置　Ｂ－６－13・14・18・19に位置する。西から東へ緩やかに傾斜している場所にある。この地区には多数の柱穴状のピットが見られる。

覆　土　本遺構は地山面を掘り込んで形成されている。層は基本的には１層のみで、木炭・焼土を含む暗褐色砂質土である。ただし、南壁側に第1″層とした焼土を多量に含む暗褐色砂質土層がある。

形　状　2.0m× 2.1mの方形である。東・西の壁がいずれも外側に若干ふくらんでいるため、多少の歪みがある。

壁　高　西壁が最も高く33cmを測り、東へ進むにしたがい徐々に低くなり、最小は東壁の26cmである。立ち上がりは垂直に近い。

床　面　砂質層のため、しまりはない。

柱　穴　南側から東側にかけての壁直下に、４ヵ所の浅い落ち込みが検出されているが、柱穴と断定するには至らなかった。

焼　土　西壁側に焼土を含む層が確認されたことから、カマドが存在していた可能性がある。

所　見　規模は小さいながらも、カマドをもった住居跡の可能性がある。

第２号小竪穴（第22図、図版９）

位　置　Ｂ－６－６・７・11・12に位置する。北西から南東へ緩やかに傾斜している場所にあり、南側は 1.5m程で崖線となる。

覆　土　本遺構は地山面を掘り込んで形成されている。層は１層のみで暗褐色砂質土となっている。

形　状　2.3m× 2.3mの方形である。東壁が外側にふくらんでいるため多少の歪みがある。

壁　高　北壁が最も高く20cmを測り、南へ進むにしたがい徐々に低くなり、最小は南壁の10cmである。立ち上がりは南壁に傾斜が見られるが、他は垂直に近い。

床　面　砂質層のため、しまりはない。

柱　穴　本遺構内には９ヵ所の柱穴状落ち込みが検出されているが、P_1～P_4の４本柱と考えられる。この４本は、直径20～30cm、深さ11～15cmとなっている。

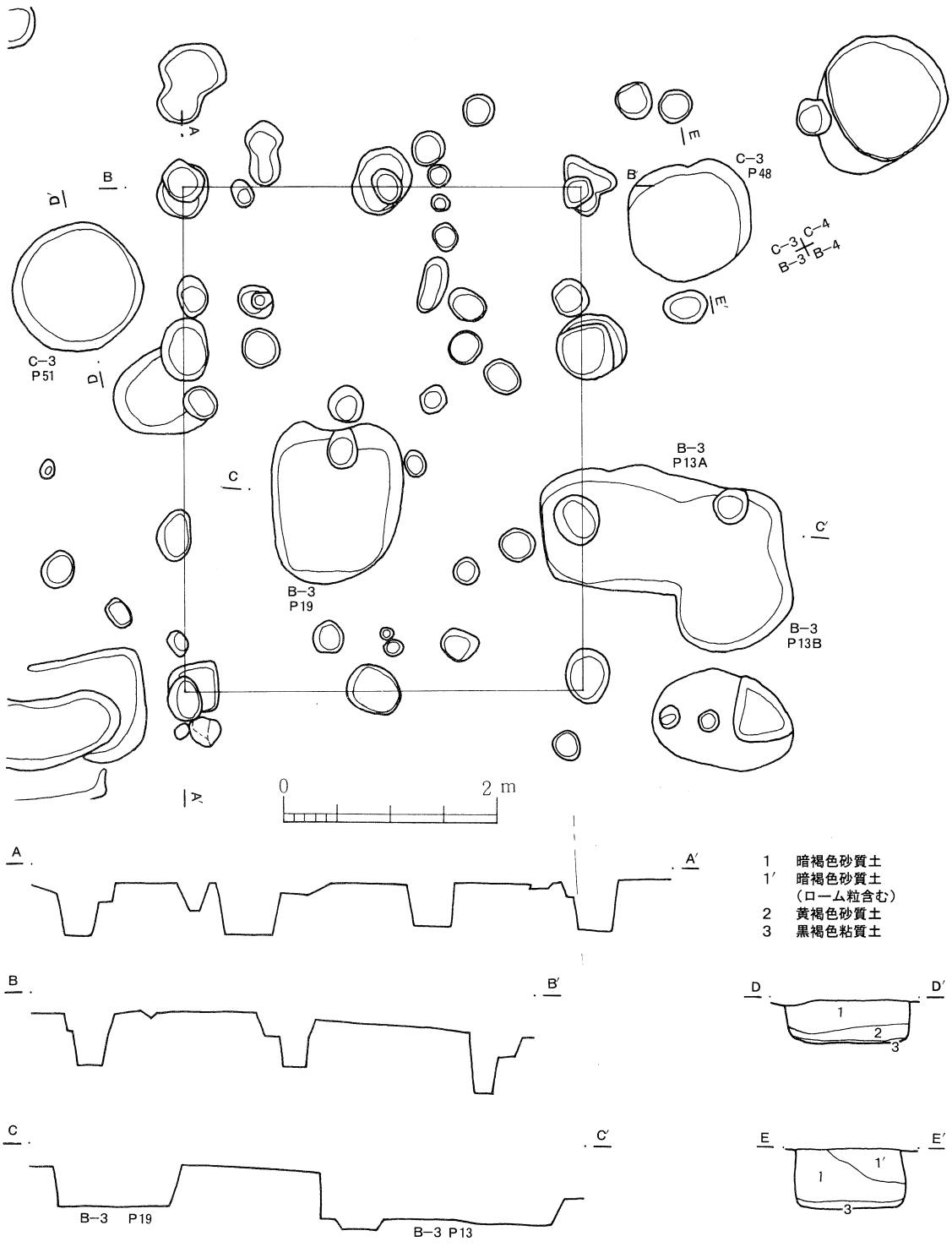
焼　土　中央やや南寄りの床面に若干の焼土が見られ、地床炉の可能性がある。

所　見　規模は小さいものの、４本柱で地床炉をもった住居跡の可能性がある。

第３号小竪穴（第22図、図版９）

位　置　Ｂ－５－21・22、Ｂ－６－１・２に位置する。崖線ぎわで、北から南へ緩やかに傾斜している場所にあるが、水田造成時に地山の一部も含めて削平されている。

覆　土　本遺構は地山面を掘り込んで形成されている。層は１層のみで暗褐色砂質土となって



第23図　B・C－3　掘立柱建物跡と遺構群（1：60）

いる。

形　状　1.7m×1.5mの長方形を呈す。東壁に若干の歪みがみられる。

壁　高　南壁のみ５cmと低いほかは、10cm程度となっている。立ち上がりは、西壁と南壁はほぼ垂直であるが、東壁と北壁は傾斜が見られる。

床　面　砂質層のため、しまりはない。

柱　穴　本遺構内の四隅に検出された４本柱が相当するものと考える。直径は15～40cm、深さは４～26cmとばらつきが極めて大きい。

焼　土　中央付近の床面に若干の焼土が見られ、地床炉の可能性がある。

所　見　規模はたいへん小さいが、４本柱で地床炉をもった住居跡の可能性がある。

第Ⅳ節　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第23図、図版10）

位　置　Ｂ－３－10・14・15・19・20、Ｃ－３－６・11・12・16・17・21に位置する。西から東へ緩やかに傾斜している場所にある。

規　模　南北３間（4.7m）×東西２間（3.9m）の南北棟建物で、方位はほぼ真北を指している。柱間寸法は、桁行が1.5～1.6m、梁間が1.8～1.9mとなっている。

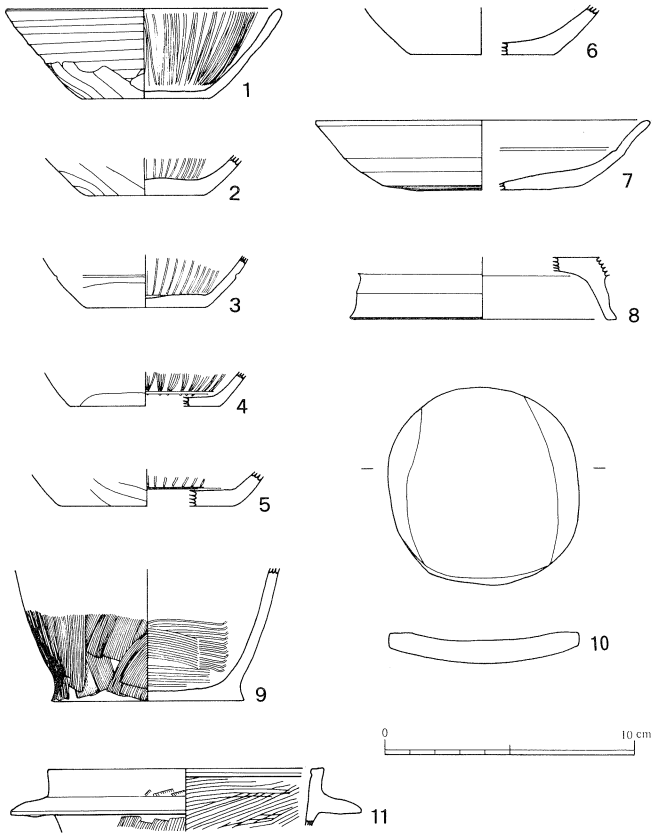
柱　穴　柱掘形は楕円形で長軸50～60cm×短軸30～50cmを測る。深さは40～50cmとなっている。柱痕跡は、北側梁間中央の柱穴で確認でき、直径約25cmを測る。

所　見　本遺構に伴う遺物はほとんど見られなかったが、同地区では平安時代と中世の遺物が遺物包含層より出土し、東側の桁行の南より２本目の柱穴が中世の土坑で上部が切られていることから、平安時代の遺構とした。

第Ⅴ節　グリッド出土の平安時代遺物

土師器等（第24図、図版19）

１．Ｃ－２水路状遺構の石組下層出土。坏。器高3.7cm、底径5.0cmを測る。内面はロクロ撫で後、暗文を施す。暗文は見込みには及んでいない。外面はロクロ撫で後、体部下半にヘラ削りを行う。底部は糸切り後、ヘラ削りを行い、体部とを明瞭な稜で区切る。胎土は精選され、焼成も良好で、明褐色を呈する。　２．Ｄ－３出土。坏。内外面ともロクロ撫で後、内面に暗文を施し、外面にヘラ削りを行う。暗文は見込みにわずかかかっている。底部は丹念にヘラ削りを行っている。胎土は精選され、焼成も良好で、茶褐色を呈する。　３．Ｄ－３出土。坏。底径4.8cmを測る。内外面ともロクロ撫で後、内面には暗文を施し、外面下半にヘラ削りを行うとともに、外面中段にヘラに沈線が巡る。底部は糸切り後、ヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、茶褐色を呈する。　４．Ｄ－３出土。坏。内外面ともロクロ撫で後、内面に暗文を施す。外面はヘラ削りを行う。底部は糸切り後、端部にヘラ削りを行う。内面の暗文

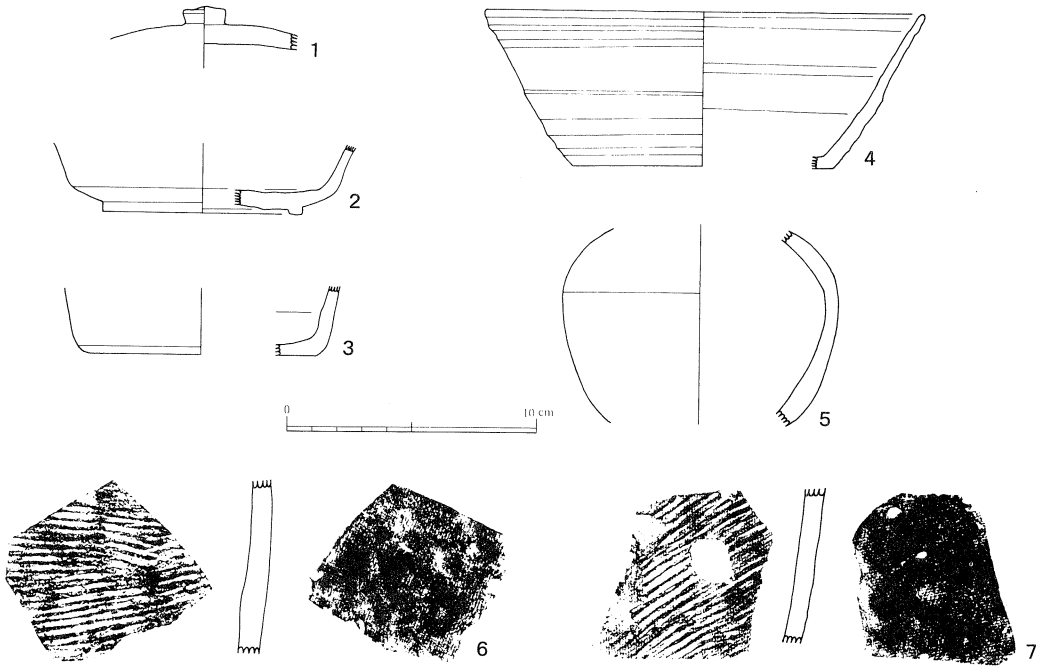


第24図　グリッド出土土師器等
(1:3、11のみ1:6)

は、放射状のものと見込みの外周を巡るものがある。胎土は精選され、焼成も良好で、茶褐色を呈する。　５．Ｃ－３出土。坏。内外面ともロクロ撫で後、内面に放射状のものと見込みの外周を巡る暗文を施し、外面はヘラ削りを行う。底部は丹念にヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、明褐色を呈する。　６．Ｆ－３出土。黒色土器坏。内面はヘラ磨きを行った後、黒色処理する。外面はロクロ撫で後、軽いヘラ削り痕が見られる。底部はヘラ削りを行う。胎土は赤色粒子を含む砂粒を多く含む。焼成は良好で、茶褐色を呈する。　７．Ｂ－３出土。皿。内外面ともロクロ撫で後、内面はヘラ調整により磨き、中段に沈線を巡らす。外面はヘラ削りを行う。底部は糸切り後、ヘラ削りを行う。胎土は精選され、焼成も良好で、明褐色を呈する。　８．Ｂ－２水路状遺構石組下層出土。硯の脚部と見られる。内外面とも丹念なロクロ撫でを行い、体部と接する部分はさらにヘラ調整を行う。見込みはヘラ削りを行い、平坦な面をつくり出しているが、外周部がわずかに低くなっている。胎土は極めて精選され、焼成も良好で堅緻である。色調は茶褐色を呈する。　９．Ｃ－７出土。甕。底径 7.6cmを測る。内面は横方向、外面は縦方向のハケ調整を行う。底部は木の葉底である。胎土は金雲母・砂粒をかなり含む。焼成は良好で、茶褐色を呈する。外面にわずかに煤の付着が見られる。　10．Ｂ－２水路状遺構石組下層出土。転用土師器片。破片を再利用したもので、外面に煤が付着している。すべての側面は磨られて丸みをもっている。内面は研磨によると見られる滑らかな面になっている。胎土は比較的精選され、焼成も良好で、褐色を呈する。　11．Ｄ－４出土。羽釜。内面は斜方向のハケ調整、外面は口縁部が横ナデ、体部が縦方向のハケ調整を行う。胎土は金雲母を含み、焼成は極めて良好で瓦質に近い。色調は赤褐色を呈する。

須恵器（第25図、図版19）

１．Ｄ－２出土。蓋。内外面ともロクロ撫でを行い、天井部中央に偏平な擬宝珠様のつまみ



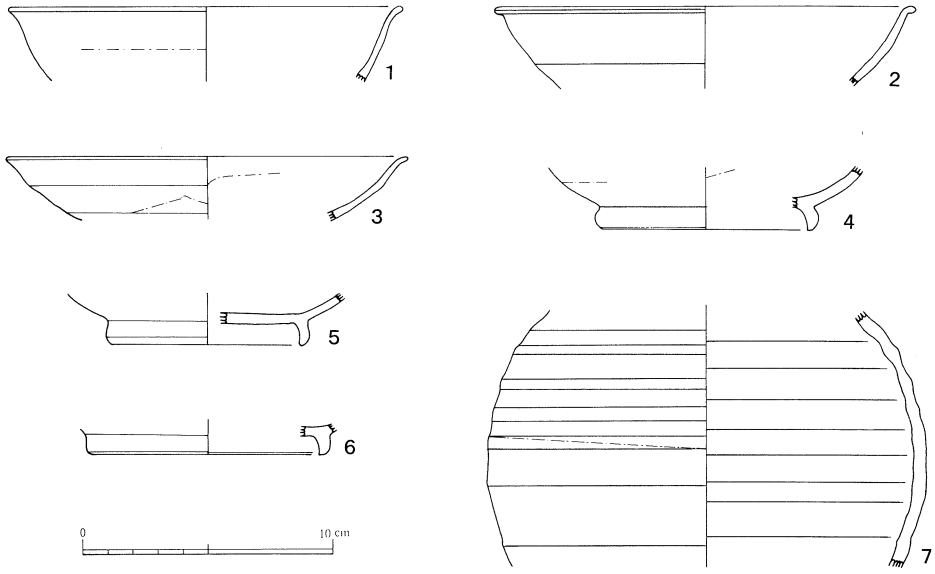
第25図　グリッド出土須恵器（１：３）

を有する。胎土は白色砂粒を小量含み、焼成は良好で、黒灰色を呈する。　２．Ｂ－６出土。高台付坏。内外面ともロクロ撫でを行う。高台は糸切り後に貼り付けられ、高台付近をヘラ調整により仕上げる。胎土は精選され、焼成も良好で、内面暗褐色、外面茶褐色を呈する。　３　Ｆ－３出土。坏。内外面ともロクロ撫でを行う。底部は糸切り後、体部との境にヘラ調整を行い、稜は不明瞭である。胎土は精選され、焼成も良好で、灰色を呈する。　４．Ｄ－３出土。坏。大形の坏で器高 6.2cmを測る。内外面ともロクロ撫で調整を行う。底部端はヘラ削りを行い、体部と明瞭な稜によって区切る。胎土は精選され、焼成も良好で、暗灰色を呈する。　５．Ｄ－２・Ｅ－２・Ｃ－３出土の破片が接合。小壷。胴部破片で丸みのある肩をもつ。内外面ともロクロ撫でを行う。肩の部分の剥落が著しい。胎土は精選され、焼成も良好で、内面は灰色、外面は暗灰色を呈する。　６．Ｄ－３出土。　７．Ｄ－２出土。いずれも大形の甕の破片である。外面は平行叩き目、内面は細かい同心円叩き目によって調整されている。胎土は精選され、焼成も良好で、外面は灰色を呈し、内面には自然釉がかかっている。

灰釉陶器（第26図、図版19）

本遺跡からは、椀・壷の灰釉陶器が出土している。点数は10点と少ないものの、暗文付土師器とともに平安時代の遺構の年代を決定する上で貴重な資料である。

１．Ｃ－３出土。椀。体部はゆるやかに立ち上がり、口縁端部がやや外反し、比較的薄手である。内外面ともロクロ撫で調整を行う。施釉は口縁端部を除く全面に見られ、特に図の一点



第26図　グリッド出土灰釉陶器（1:3）

鎖線より上面では釉が厚くなっている。　２．Ｅ－７出土。椀。体部はゆるやかに立ち上がり口縁端部は強く外反する。比較的薄手である。内外面ともロクロ撫で後、外面口縁部にヘラ調整を行う。施釉は内面に薄く見られる。　３．Ｂ－６出土。椀。体部はゆるやかに立ち上がり、口縁端部がやや外反する。比較的薄手である。内外面ともロクロ撫でを行う。施釉は刷毛塗りにより、外面体部と内面体部上半に施す。　４．Ｅ－７出土。椀。体部はゆるやかに立ち上がる。底部には比較的細長くて八の字形に外に開き、内面下端が内彎し、外面下半が内傾して稜を作り出す断面が三日月形を呈する、三日月高台が付けられる。内外面ともロクロ撫でを行う。施釉は刷毛塗りにより、内面体部に見られる。見込みには直接の重ね焼き痕がある。　５．Ｃ－５出土。椀。底部には比較的細長くて八の字形に外に開き、内面下端が内彎し、外面下半が内傾して稜を作り出す断面が三日月形を呈する、三日月高台が付けられる。内外面ともロクロ撫でを行い、底部糸切り痕は、ヘラ調整によって消す。施釉は見込みの一部を除く内面にのみ見られる。釉は比較的厚い。　６．Ｂ－５出土。椀。底部には比較的細長くて八の字形に外に開き、内面下端が内彎し、外面下半が内傾して稜を作り出す断面が三日月形を呈する、三日月高台が付けられる。内外面ともロクロ撫でを行う。施釉は見込みを除く内面に薄く見られる。見込みには直接の重ね焼き痕がある。　７．Ｃ－２水路状遺構石組下層出土。壷胴部。丸みのある肩をもつ。内外面ともロクロ撫で後、外面胴部下半にヘラ削りを行う。施釉は胴部上半に見られ、釉は比較的厚い。

灰釉陶器は、椀の特徴から黒笹90号（Ｋ－90）窯式の時期の所産と見られ、年代は９世紀後葉～10世紀前半としている[※注]。この年代は、暗文付土師器の年代と一致するものである。

※注　斎藤孝正　1982　「猿投窯における灰釉陶の展開」『考古学ジャナーナル　211』

第６節　中世の土坑群（第12・22・23・27～29図、図版６・12）

本遺跡では、50基の土坑が確認された。これらは、後述する遺跡の中央を蛇行しながら走る水路状遺構の北西側に集中し、Ｄ－１・２とＥ・Ｆ－３・４・５の２ヵ所の土坑群を形成している。前者が17基・後者が23基で、計40基と土坑のほとんどを占めている。

これらの土坑群は、Ｄ－１・２を主とした重複関係のものも見られるが、形状に規則性があることから、ほぼ同一時期のものと考えられる。これらの時期決定は困難であるが、Ｅ－４・Ｐ６及びＥ－５・Ｐ８が第１号住居跡を切っていること、Ｆ－３・Ｐ６の覆土上面に完形の土師質土器が置かれていたこと等から中世の土坑群とした。土坑からの出土遺物はほとんどなく、平安時代の土師器の小片が覆土中より数点出土した程度で混入と考えられ、年代決定する決め手とはならない。なお、Ｄ－２・Ｐ72は集石土坑で時期・性格とも異なると考えられる。

ここでは、Ｄ－１・２とＥ・Ｆ－３・４・５の土坑群について、その特徴を記述する。

Ｄ－１・２の土坑群

この地区の土坑群には多くの重複関係が見られ、平面形を推定したものが多い。

形状は、Ｄ－１・Ｐ１、Ｄ－２・Ｐ48、Ｐ55の３基のみ円形で、直径 125～ 140cm・深さ40～60cm程度を測る。他は楕円形で、平面形の明らかなものは、平面寸法 150× 135cm～ 200× 180cmとばつきは大きいが、長径が短径より20cm程度長い点で共通している。現況の地山面からの深さは50～ 100cm程度となっている。

覆土の状態は、ローム粒を含む薄い黄褐色砂質土層を含むものがあるが、全体には暗褐色砂質土により埋め戻されているものがほとんどである。一部には最下層に黒褐色粘質土の見られるものもある。これらは自然堆積によって形成されたものではないと考えられる。ただし、Ｄ－２・Ｐ69－Ｃ等の不明瞭なものは除く。

Ｅ・Ｆ－３・４・５の土坑群

この地区の土坑群では、土坑群どおしの重複関係は１ヵ所と少ないが、上述した第１号住居跡との重複関係が認められるほか、Ｅ－５・Ｐ７上面を水路状遺構が通っている。

形状は、直径 115～ 155cm、地山面からの深さ50～80cm程度の平面円形のものと、長径×短径が 140×100cm～ 185× 155cm、地山面からの深さが50～85cm程度の平面楕円形のものとがある。長径は短径より30cm程度長くなっている。

覆土の状態は、そのほとんどが地山ブロックを多量に含む暗褐色砂質土で埋め戻されており、自然堆積によって形成されたものではない。

小結　本遺跡の土坑は、円形と楕円形（長方形を含む。）とがあるが、規模にそれぞれ規格性がある。さらに人為的に埋め戻され、上面に土師質土器を置くことから、墓坑とみて差し支えないものと考える。時期は第１号住居跡より新しく、水路状遺構より古いと見られることから

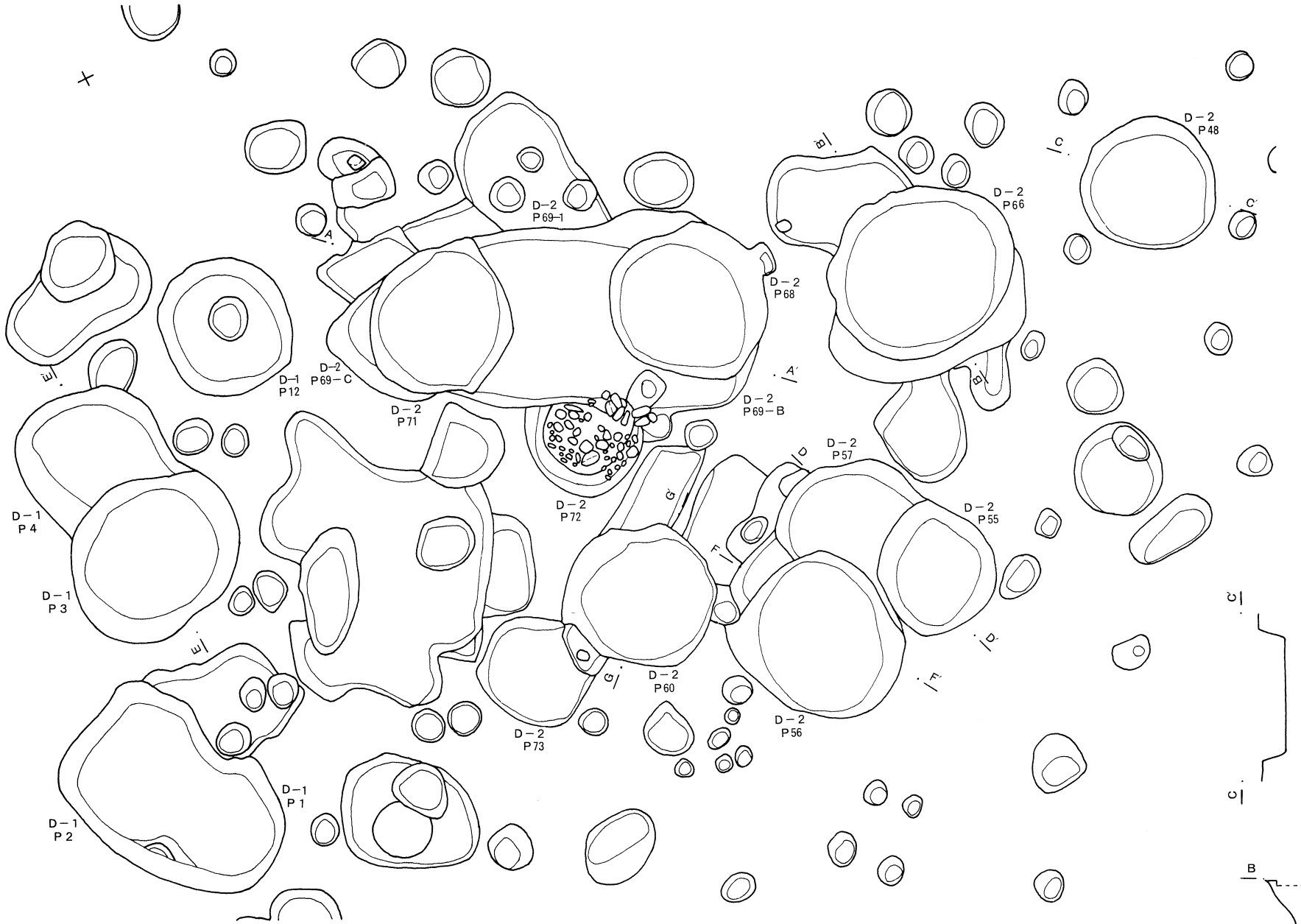
中世の所産と考える。

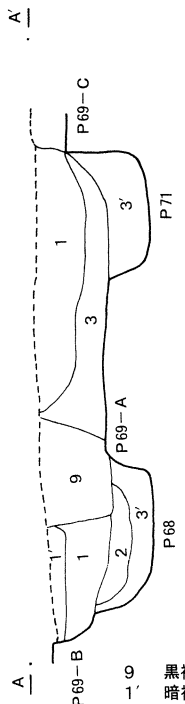
個々の土坑の規模・形状などについては、次表に示しておく。

土　坑　一　覧　表

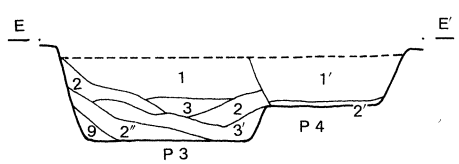
位置	番号	平面形	平面寸法(cm)	深さ(cm)	その他	位置	番号	平面形	平面寸法(cm)	深さ(cm)	その他
B－3	P.19	長方形	146 × 120	38		E－3	P. 1	円　形	130×130	70	
	P.13A	長方形	(140)× 120	43		E－4	P. 1	円　形	130×130	73	
	P.13B	楕円形	150 ×(110)	45			P. 2	不正楕円形	150×120	55	
B－6	P.114	円　形	100 × 100	25			P. 3	円　形	145×145	67	
	P.123	円　形	95 × 90	38			P. 4	楕円形	145×125	74	
C－3	P.46	長方形	140 × 80	48			P. 5	楕円形	150×120	68	
	P.48	円　形	115 × 110	63			P. 6	円　形	150×150	78	
	P.51	円　形	120 × 120	40		E－5	P. 1	円　形	120×120	24(80)	
C－5	P.23	円　形	160 × 155	41			P. 7	円　形	150×140	47(75)	
C－6	P.12	円　形	110 × 110	51			P. 8	楕円形	145×130	86	
D－1	P. 1	円　形	130 × 130	50			P. 9	楕円形	160×135	74	
	P. 2	楕円形	170 ×(150)	57			P.10	楕円形	175×130	78	
	P. 3	楕円形	190 × 170	76			P.11	楕円形	140×120	53(76)	
	P. 4	楕円形	170 × 150	53			P.12	円　形	130×130	35	
	P.12	楕円形	150 × 135	61	ピット1	F－3	P. 1	円　形	140×140	58	
D－2	P.48	円　形	140 × 140	40			P. 4	円　形	130×120	53	
	P.55	円　形	125 × 125	62			P. 6	円　形	130×130	75	
	P.56	楕円形	180 × 160	86			P. 7	楕円形	140×100	56	
	P.57	楕円形	(220)× 150	60		F－4	P. 1	円　形	115×115	75	
	P.60	楕円形	155 × 140	70			P. 3	円　形	130×130	66	
	P.66	楕円形	200 × 180	91			P. 4	円　形	155×155	60	
	P.68	楕円形	170 × 150	80			P. 5	楕円形	150×130	60	
	P.69A	楕円形	(200)× (95)	60			P. 6	楕円形	185×155	75	
	P.69B	楕円形	(190)×(140)	45							
	P.69C	楕円形	(250)×(180)	62							
	P.71	楕円形	170 × 150	99							
	P.72	円　形	120 × 120	50	集石						

注……平面寸法で(　)は推定、深さで(　)は推定地山面からの数値である。

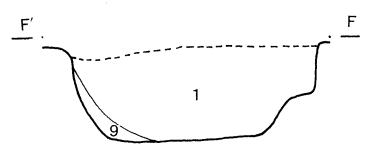




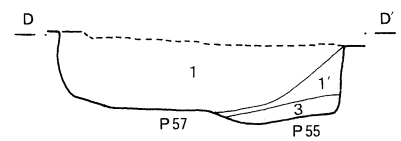
9　黒褐色砂質土
1′　暗褐色砂質土
（白色砂を含む）
1　暗褐色砂質土
2　黄褐色砂質土
3　黒褐色砂質土
3′　黒褐色粘質土
（砂質分を含む）



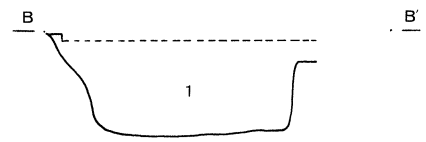
1・1′　暗褐色砂質土
2・2′・2″　黄褐色砂質土
（ローム粒を含む）
3・3′　黒褐色粘質土
9　黒褐色砂質土



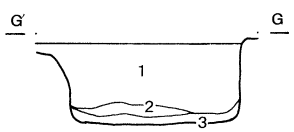
1　暗褐色砂質土
（ロームブロックを含む）
9　黒褐色砂質土



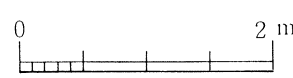
1　暗褐色砂質土
1′　暗褐色砂質土
（白色砂を多量に含む）
3　黒褐色粘質土



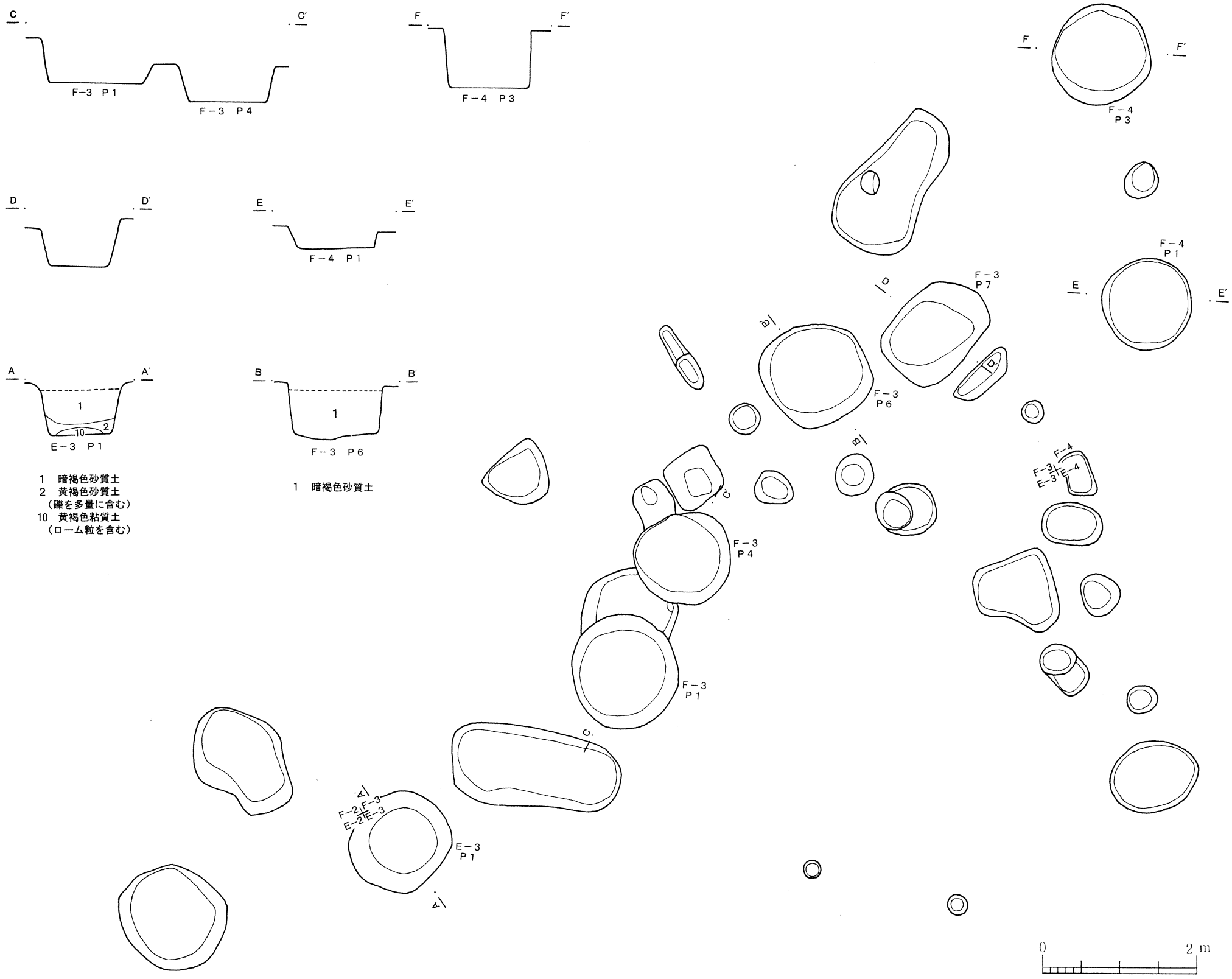
1　暗褐色破質土



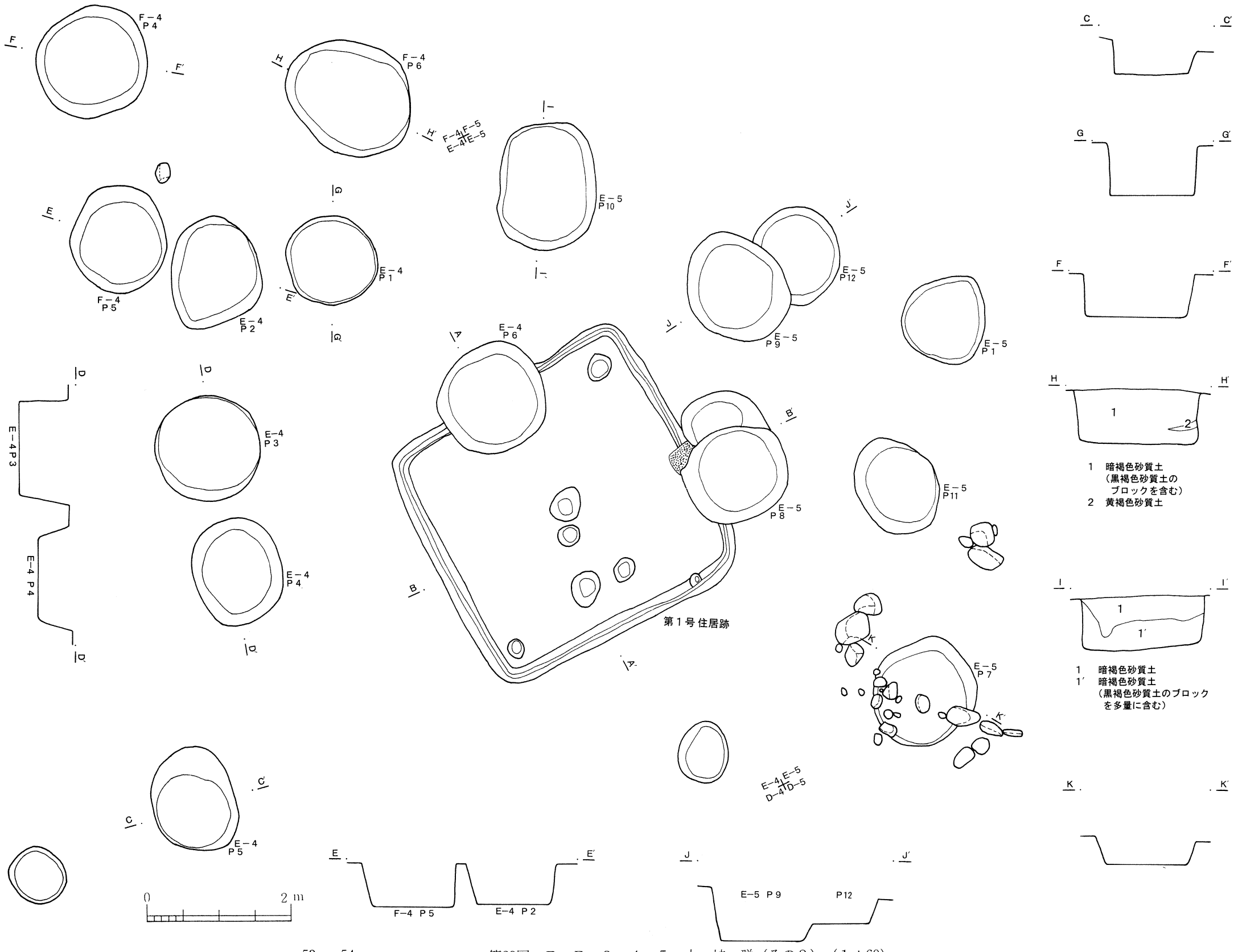
1　暗褐色砂質土
2　黄褐色砂質土
（ローム混じり）
3　黒褐色粘質土



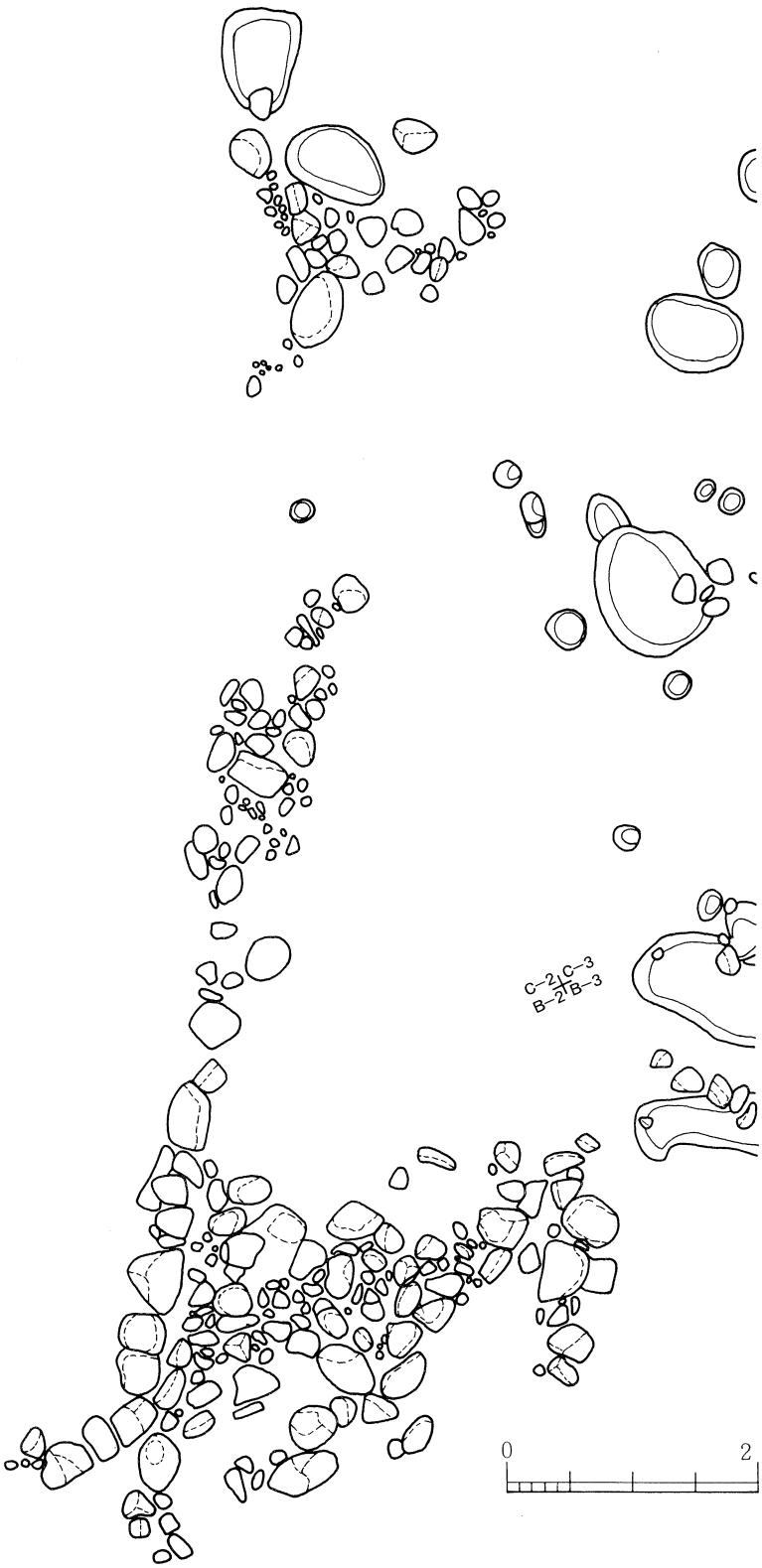
第27図　D－1・2　土　坑　群（1:60）



第28図　E・F－3・4・5　土　坑　群（その1）（1：60）



第29図　E・F－3・4・5　土　坑　群（その２）（1：60）



第30図　B－2・C－2・3 水路状遺構石組（1:60）

第７節　中世の水路状遺構（第８・30・31図、図版10・11）

調査区外の国道20号線下からＢ－２の石組部に入り、北方向に流れをかえ、Ｄ－３の円形石組部で北から東北東に向きをかえ、さらにＤ－４で再び北に向かい、Ｅ－５で東に流れを改め、Ｄ－５～Ｃ－７へと蛇行しながら、調査区を西から東へと走る溝である。ほぼ全体が確認できるが、Ｄ－５・Ｃ－７では水田造成時の削平により消失している。

確認できる部分での規模は、幅がＤ－３の 2.3ｍ、Ｄ－６の 0.7ｍを除くと平均 1.3m、深さは 0.1m程度を測る。

水路を形作る石組は、Ｂ・Ｃ－２・Ｄ－４・Ｄ－６で確認できる。また、水を貯める桝の用途を果したと考えられる円形の石組はＤ－３・Ｅ－５の水路の流れが大きく変わる部分で確認できる。なお、Ｅ－５の石組はＥ－５・Ｐ７の覆土上面に構築されている。

覆土は、比較的粒子の粗い白色砂で覆われて、

第31図　D－3　水路状遺構内石組（1:60）

地山面直上では酸化鉄が付着している。

出土遺物は、内耳土器を中心にかなりの量にのぼっている。また、この遺構の周辺からは多量の内耳土器、擂鉢等の中世遺物が出土している。

B－2・C－2・3石組

水路が東から北へ方向を変換する部分にある。形状はかなり壊れているが、西側に辺30～40cmの側石をおよそ6mにわたって並べている。東側の側石は確認されていない。なお、石組下層は南にのびる沢筋になっており、平安時代の遺物が出土している。

D－3石組

水路が北から東へ流れを変える部分にある。水路幅を3m前後に広げたなかに、直径 2.2m程度の円形の石組を構築する。石組の外側は暗褐色砂質土により埋めたて、漏水しないよう工夫されている。この施設は、水を貯める桝のような用途と考えられ、礫上面からの深さは平均30cmを測る。なお、石組北側の礫上面付近より完形の土師質土器が出土している。

小結　本遺構は、水をくみ上げるための桝状施設を2ヵ所に設置した水路と考えられる。覆土から内耳土器などの中世遺物がかなり出土していることから、生活用水確保のために作られたものと思われる。

第8節　中世遺物

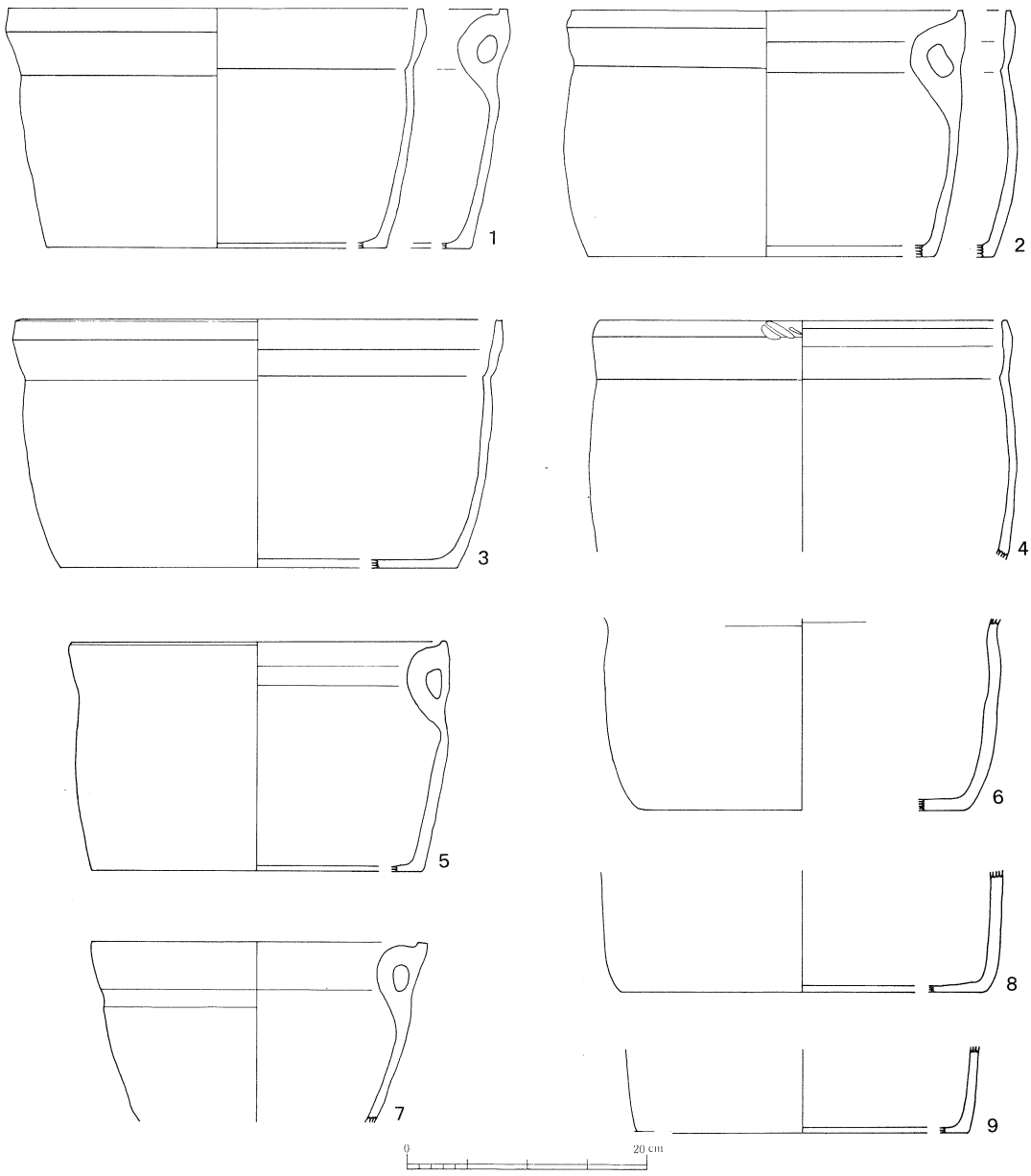
本遺跡出土の中世遺物は、内耳土器・擂鉢・土師質土器（小皿・皿・足のついた鉢）・中世陶器（天目茶碗・小皿）・凹石状石器・刀子・鋤先・古銭などがある。このうち、内耳土器と凹石状石器が量的に多く見られる。

これらの遺物で実測できたものは、ほとんど遺物包含層からの出土品で、遺構に伴ったものは、土坑上面より出土した土師質土器、水路状遺構より出土した鋤先、水路状遺構の周辺より出土した内耳土器などに限られる。

内耳土器（第32～34図・図版15・16）

内耳土器は、内耳部の破片を見る限りにおいては50点以上にのぼる。実測できたものは26点

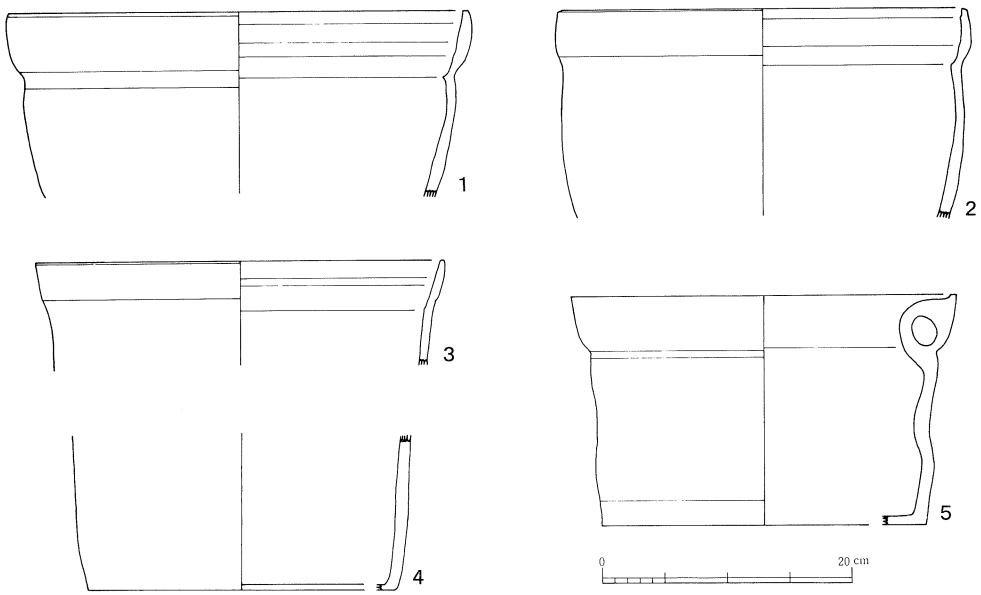
あり、うち第32図の９点が、水路状遺構の周辺より出土したものである。



第32図　水路状遺構周辺出土内耳土器（１：６）

１．口径推定34.8cm、器高20.0cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。胴部と口縁部は明瞭に区切る。口縁部内面は弱い凹面をつけ、端部は面をもつ。胎土に砂粒を多く含み、内面茶褐色を呈する。外面は煤が付着している。　２．口径32.8cm、器高20.6cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。胴部と口縁部は明瞭に区切る。口縁部内面に凹面をつけ、端部は面をもつ。胎土に砂粒を多く含み、内面淡茶褐色を呈する。外面は多量の煤が付着している。　３．器高

20.8cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。胴部と口縁部は明瞭に区切る。口縁部内面に凹面をつけ、端部は面をもつ。胎土に砂粒を多く含み、内面黄褐色を呈する。外面は煤が付着する。　4．口径推定34.0cm、器高推定20.4cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行い、特に口縁部内面は強いナデによる凹面をつける。胴部と口縁部は明瞭に区切る。口縁端部はやや丸みのある面をもつ。胎土に砂粒を多く含み、内面暗茶褐色を呈する。外面は煤が付着している。口縁部外面に、斜めのヘラ痕が見られる。　5．口径推定30.8cm、高さ19.0cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。胴部と口縁部は、内面は明瞭に区切られているが、外面は明瞭ではない。口縁部内面に凹面をつけ、端部は面をもつ。胎土に砂粒を多く含み、内面は褐色を呈する。外面は煤が付着している。　6．胴部の高さは15.5cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。胴部と口縁部は明瞭に区切る。底部端部は丸みをもつ。胎土に砂粒を多く含み、内面茶褐色を呈する。外面には煤が付着する。　7．内外面ともロクロ撫でを行い、胴部と口縁部の境は強い撫でを行い、外面に凹面、内面に稜を作り区切る。口縁端部は面をもつ。胴部は張りがほとんどない。胎土に砂粒を含み、内面褐色を呈する。外面は煤が付着している。　8．内外面ともロクロ撫でを行う。底部との稜は丸みをもつ。胎土に砂粒を多く含み、内面褐色を呈する。外面には煤が付着している。　9．内外面ともロクロ撫でを行い、底部とは明瞭な稜によって区切る。胎土に砂粒を多く含み、内面黄褐色を呈する。外面は煤が付着している。

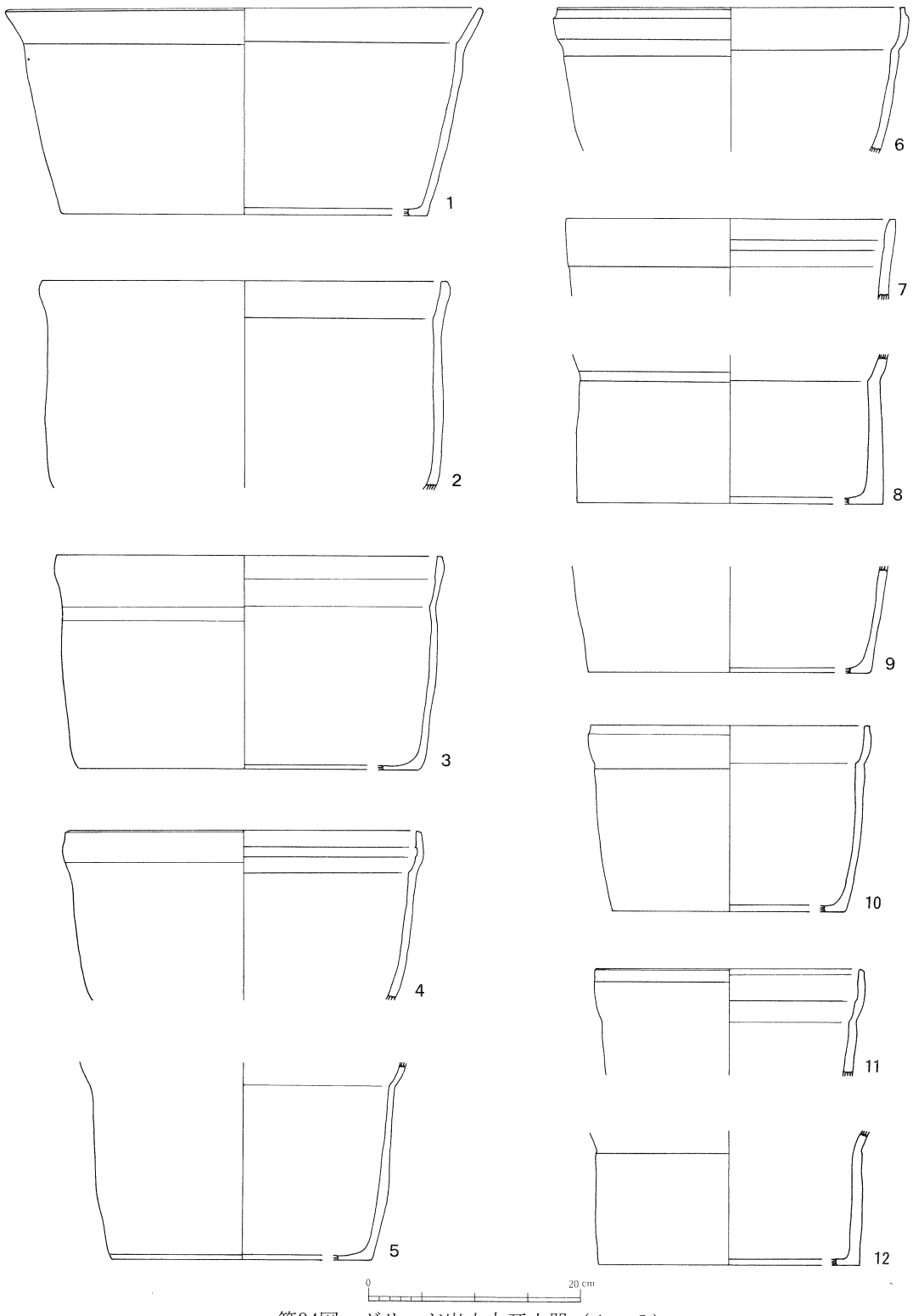


第33図　グリッド出土内耳土器（1：6）

1．内外面ともロクロ撫でを行い、胴部と口縁部の境は特に強い撫でにより、外面に凹面、内面に稜をつくり区切る。口縁部内面には凹面をつけ、端部は面をもつ。胎土に砂粒を多く含み、内面黄褐色を呈する。外面は煤が付着する。　2．内外面ともロクロ撫でを行う。胴部と口縁部は明瞭に区切る。口縁部内面に凹面をつけ、端部は面をもつ。胎土に砂粒を多く含み、

内面暗茶褐色を呈する。外面は多量の煤が付着する。　3．内外面ともロクロ撫でを行う。胴部と口縁部は明瞭に区切る。口縁部内面に凹面をつける。端部は面をもつ。口縁部は直線的に開く。胎土に砂粒を多く含み、内面黄褐色を呈する。外面には煤が付着する。　4．内外面ともロクロ撫でを行う。胴部は底部と明瞭な稜によって区切り、直線的に立ち上がる。胎土に砂粒を多く含み、内面茶褐色を呈する。外面には煤が多量に付着する。　5．器高18.4cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。胴部は底部と明瞭な稜によって区切り、直線的に立ち上がるが、輪積痕が残り凹凸が著しい。胴部と口縁部は、内面は稜で、外面は沈線により区切る。口縁部は直線的に開き、端部に面をもつ。胎土に砂粒を含み、内面褐色を呈する。外面には煤が付着する。

第34図1．器高19.5cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。胴部は直線的に開き、口縁部との境は外面がやや不明瞭である。口縁部は短く、直線的に開く。端部は丸みをもつ。胎土に砂粒を多く含み、内外面とも淡茶褐色を呈する。外面の煤の付着は少ないが、磨滅が著しい。2．器高推定20.0cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。胴部は直線的に立ち上がり、口縁部との境は外面が不明瞭である。口縁部は短く、直線的に開く。内面に弱い凹面があり、端部はやや丸みのある面をもつ。胎土に砂粒を多量に含み、内面は褐色を呈する。外面は煤が付着する。　3．口径推定36.0cm、器高20.2cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。口縁部と胴部は明瞭に区切る。口縁部内面に凹面をつける。端部は面をもつ。胎土に砂粒を含み、内面黄褐色を呈する。外面下半に煤が付着する。　4．内外面ともロクロ撫でを行い、器壁は薄手である。胴部と口縁部は明瞭に区切る。口縁部内面に凹面をつける。端部はやや外に開き、面をもつ。胎土に砂粒を含み、内外面とも赤褐色を呈する。外面は磨滅が著しい。　5．胴部器高は16.4cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。底部とは明瞭な稜によって区切る。口縁部との境は外面が不明瞭となっている。胎土に砂粒を含み、内面暗茶褐色を呈する。外面は煤が付着する。　6．内外面ともロクロ撫でを行い、口縁端部及び胴部との境に沈線を巡らす。口縁部は内彎し、端部に面をもつ。胎土に砂粒を含み、内面黒褐色を呈する。外面には煤が付着する。　7．内外面ともロクロ撫でを行う。胴部と口縁部は弱い凹面によって区切られているが、ほぼ直線的に口縁端部に立ち上がる。器壁は厚手で、口縁端部は広い面をもつ。胎土に砂粒を含み、内面茶褐色を呈する。外面は煤が付着する。　8．胴部器高11.6cmと底く、器壁は極めて厚手となっている。内外面ともロクロ撫でを行う。底部及び口縁部と胴部の境は、強い撫でによる稜で区切る。胎土に砂粒を含み、内外面とも黒褐色を呈する。外面には煤が付着する。9．内外面ともロクロ撫でを行う。胴部と底部は明瞭な稜によって区切る。胎土に砂粒を含み、内面下半は黒褐色を呈する。外面は多量の煤が付着する。　10．器高17.6cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。胴部と口縁部とは、内面が弱い稜、外面が凹面によって区切る。口縁部はやや内彎し、端部の平坦面の下に沈線を巡らす。胎土に砂粒を含み、内面黒褐色を呈する。外面は若干煤が付着している。　11．内外面ともロクロ撫でを行う。胴部と口縁部は弱い稜及び凹面によって区切る。口縁部内面に凹面をつくり、端部に面をもつ。端部下に強い撫で痕が



第34図　グリッド出土内耳土器（１：６）

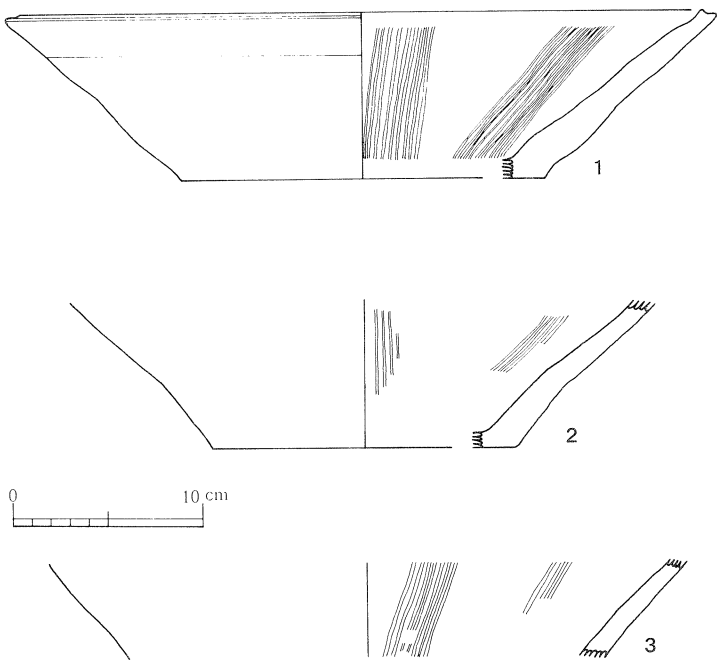
見られる。胎土に砂粒を多く含み、内面茶褐色を呈する。外面には若干煤が付着する。　12. 胴部器高10.3cmと低く、器壁は極めて厚手となっている。内外面ともロクロ撫でを行う。底部とは明瞭な稜によって区切る。胎土に砂粒を含み、内面褐色を呈する。外面は煤が多量に付着している。

小結　本遺跡出土の内耳土器は、大きく二つの種類に分類できる。前者は胴部の高さが14～16cmで、器壁が 0.8cm以内のもの、後者は胴部の高さが12cm以下で、器壁が１cm以上のものである。実測図で取り上げたものの大半は前者に属し、後者は第34図－８・12に限られる。なお、後者の破片では口縁部が欠損しているため、全体の形状は不明である。

擂鉢（第35図、図版16）

擂鉢は、Ｄ・Ｅ－６から内耳土器と共伴に近い状態で、３点出土している。いずれも土師質である。

１．器高 8.8cmを測る。体部は直線的に大きく開き口縁部に至る。外面体部はロクロ撫でを行わず、輪積痕、指頭痕をそのまま残し、粗い器面となっている。口縁部はロクロ撫でを行う。端部はロクロ撫でにより稜をたて、内側に凹面をつくる。内面は、丹念なロクロ撫でを行い、器面を整え、９条単位の櫛状工具による線条を、間隔をあけて刻している。胎土は全雲母を含み、焼成は堅緻であり、茶褐色を呈する。　２．体部は底部からやや強い傾斜で立ち上がり、体部上半は大きく開く。外面は輪積痕をそのまま残す粗い器面となっている。内面はロクロ撫で後、７条単位の櫛状工具による線条を、間隔をあけて刻す。器面は磨滅が著しい。胎土は砂粒を含み、焼成は堅緻であり、茶褐色を呈する。　３．体部下半の破片で、内外面とも丹念なロクロ撫でにより器面を整えている。内面には櫛状工具による、７条単位の太くて粗い線条を、間隔をあけて刻している。線条は曲線になっている部分も見られる。胎土は砂粒を含み、焼成は堅緻であり、茶褐色を呈する。



第35図　グリッド出土擂鉢（１：４）

土師質土器（第36図、図版17）

本遺跡から出土した土師質土器は、小皿・皿を中心にかなりの量にのぼる。実測できたものは30点で、そのうち土坑上面より出土した３点を除けば、他はグリッド出土品である。

なお、ここでは便宜的に口径11cm以上のものを皿、11cm未満を小皿とした。

１、２は、Ｅ－６の旧河道跡上面より、内耳土器と共伴して、二枚重ねで出土した小皿である。　１．口径 9.5cm、底径 6.0cm、器高 2.7cmを測る。内面ロクロ撫でを行い、見込み中央が凹む。見込みにヘラ削り痕がある。外面はロクロ撫でを行うが、粗い調整である。口縁端は丸みをもっておさめる。底部は糸切りである。胎土はわずか砂粒を含み、焼成は良好で、淡黄褐色を呈する。内外面とも多量のタール状物質が付着する。　２．口径 7.8cm、底径 4.7cm、器高 2.0cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行うが、外面は調整が粗い。口縁端は稜をつけ、わずかに丸みのある面をもつ。底部は糸切りである。胎土は金雲母を含み、焼成は良好で、淡黄褐色を呈する。口縁部にタール状物質が厚く付着する。

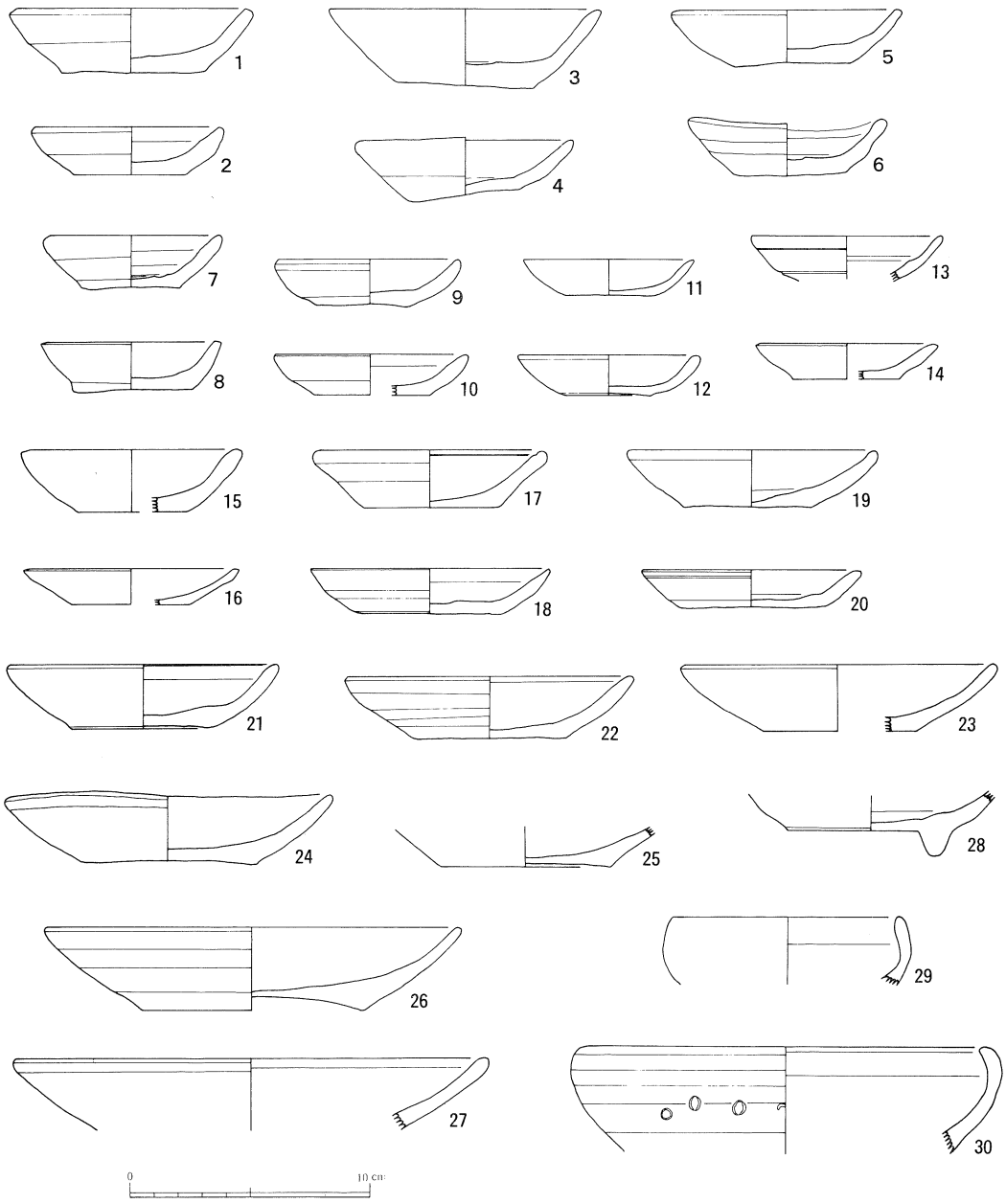
３、４は、Ｃ－３の水路状遺構付近より、二枚重ねで出土した皿と小皿である。　３．口径 11.4cm、底径 5.8cm、器高平均 3.2cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行い、見込み中央が凹む。口縁端は稜によりおさめる。底部は糸切りである。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、赤褐色を呈する。口縁部にはタール状物質が付着する。　４．形状に歪みがあり、口径 9.0cm、底径 5.1cm、器高最大 2.5cm、最小 2.1cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行うが、外面は調整が粗く剥落が目立つ。口縁端は丸くおさめる。底部は糸切りである。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、黒褐色を呈する。内面には厚くタール状物質が付着する。

５、６は、Ｅ－３より、二枚重ねで出土した小皿である。　５．口径 9.4cm、底径 4.4cm、器高 2.2cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行い、見込み中央が凹む。口縁端はわずかに外反するが丸くおさめる。底部は糸切りである。胎土は黒雲母を含み、焼成は良好で、褐色を呈する。内外面ともタール状物質が付着する。　６．形状に歪みがあり、口径 7.8cm、底径 4.5cm、器高最大 2.4cm、最小 1.8cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。口縁端は面をもつ部分と丸くおさめている部分とがある。底部は糸切り後、細かい線条を刻む。胎土は粒子の粗い砂粒を含み、焼成は良好で、褐色を呈する。内面にタール状物質が付着する。

７、８、９は、Ｆ－３・Ｐ６（土坑）の上面より、３枚重ねで出土した小皿である。　７．口径 7.0cm、底径 4.1cm、器高 2.2cmを測る。内面はロクロ撫でを行い、見込み中央から渦状の調整が顕著である。外面は粗いロクロ撫でを行う。口縁端は内彎し、丸くおさめる。底部は糸切りである。胎土は金雲母を含み、焼成は良好で、淡茶褐色を呈する。　８．口径 7.0cm、底径 5.0cm、器高 2.0cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行うが、外面は粗い調整である。口縁端は面をもつ。底部は糸切りである。胎土は金雲母を含み、焼成は良好で、淡茶褐色を呈する。　９．口径 7.6cm、底径 4.0cm、器高 1.9cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行うが、外面は粗い調整である。口縁端はやや内彎し、丸くおさめる。底部は糸切りである。胎土は金雲母を含み、焼成は良好で、淡茶褐色を呈する。

10．Ｂ－５出土。小皿。器高 1.7cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。口縁端はわずか

に丸みのある面をもつ。底部は糸切りである。胎土は金雲母をかなり含み、焼成は良好で、暗茶褐色を呈する。　11，Ｄ－６出土。小皿。器高 1.5cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う口縁端は丸くおさめる。底部は糸切りである。胎土は精選され、焼成も良好で、淡茶褐色を呈する。　12．Ｅ－６出土。小皿。底径 3.5cm、器高 1.7cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行うが、剥落が目立つ。口縁端は稜をもち、内側を丸くおさめる。底部は糸切りである。胎土は金雲母を含み、焼成は良好で、黒褐色を呈する。口縁部に多量のタール状物質が付着する。



第36図　土坑上面及びグリッド出土土師質土器（１：３）

13．Ｃ－５、第３号住居跡上層より出土。小皿。磨滅が著しいため調整痕は不明瞭である。内外面ともロクロ撫でと見られる。内面は強い撫でによる渦状の凹面がある。外面には口縁部と体部に沈線がある。口縁端は丸くおさめる。胎土は金雲母を含み、焼成は良好で、赤褐色を呈する。　14．Ａ－６出土。小皿。器高 1.5cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。口縁端はやや丸みのある面をもつ。底部は糸切りである。胎土は金雲母を含み、焼成は良好で、赤褐色を呈する。　15．Ｅ－７出土。小皿。器高 2.6cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。口縁端は面をもつ。底部は糸切りである。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、黒褐色を呈する。口縁部に煤が付着する。　16．Ｃ－２出土。小皿。器高 1.5cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行うが、外面の調整は粗い。口縁端は面をもつ。底部は糸切りである。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、赤茶褐色を呈する。　17．Ｆ－６出土。小皿。器高 2.4cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。口縁端は丸くおさめ、内面に沈線を巡らす。底部は糸切りで、器壁が極だって薄くなっている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、褐色を呈する。　18．Ｄ－３出土。小皿。器高 1.9cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。口縁部は細く調整する。底部は糸切りである。胎土は比較的精選され、焼成も良好で、淡茶褐色を呈する。　19．Ｃ－３出土。小皿。口径10.4cm、底径 5.4cm、器高 2.4cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行うが、外面の調整はやや粗い。見込み中央が凹む。口縁端は丸くおさめる。底部は糸切りである。胎土は黒雲母を含み、焼成は良好で、褐色を呈する。　20．Ｅ－３出土。小皿。器高 1.9cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。口縁端は面をもち、外面に沈線を巡らす。底部は糸切りで、器壁は薄い。胎土は比較的精選され、焼成も良好で、淡茶褐色を呈する。

21．Ｆ－３出土。皿。器高 2.7cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行うが、外面は剥落が著しい。見込み中央は凹む。口縁端は丸くおさめる。底部は糸切りである。胎土は金雲母を含み、焼成は良好で、淡茶褐色を呈する。　22．Ｄ－３水路状遺構石組上面出土。皿。口径11.8cm、底径 6.5cm、器高 2.6cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行うが、外面の調整は粗い。見込み中央が凹む。口縁端は面をもつ。底部は糸切りである。胎土は金雲母を含み、焼成は良好で、褐色を呈する。　23．Ｄ－２出土。皿。器高 2.8cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。口縁端はやや丸みのある面をもつ。底部は糸切りである。胎土は比較的精選され、焼成も良好で、茶褐色を呈する。　24．Ｄ－２出土。皿。形状に歪みがあり、口径13.5cm、底径 7.4cm、器高最大 3.0cm、最小が 2.7cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行うが、外面の調整は粗い。口縁端は丸くおさめる。底部は糸切りであり、器壁は薄い。胎土は比較的精選され、焼成も良好で、茶褐色を呈する。　25．Ｂ－５出土。皿。内外面ともロクロ撫でを行う。底部は糸切りで、器壁は極めて薄い。胎土は比較的精選され、焼成も良好で、茶褐色を呈する。　26．Ｅ－６出土。皿。器高 3.5cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。口縁端は丸くおさめる。底部は糸切りで、端部を接地面として上げ底となっている。器壁は中心では極めて薄い。胎土は精選され、焼成も良好で、褐色を呈する。　27．Ｃ－３出土。皿。内外面ともロクロ撫でを行う。口縁端は丸くおさめる。胎土は精選され、焼成も良好で、淡茶褐色を呈する。

28．Ｃ－３出土。脚のついた鉢と見られる。底径 7.0cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行

う。底部は糸切りで、器壁は薄い。糸切り後、脚を貼り付ける。胎土は精選され、焼成も良好で、淡黄褐色を呈する。残存部には１脚見られるのみである。

29．Ｃ－６出土。小皿。内外面ともロクロ撫でを行う。口縁端はやや丸みのある面をもつ。体部は強く内彎している。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、茶褐色を呈する。　30．Ｃ－２出土。皿。内外面とも丹念にロクロ撫でを行う。口縁部は強く内彎し、端部は稜をもつ。体部外面に円形の文様を刻む。胎土は精選され、焼成も良好で、褐色を呈する。

小結　本遺跡出土の土師質土器は、遺構内出土品ではないという点と年代の明らかな陶器類と共伴関係をもたないという点で、時期決定するのはやや困難と考える。

ここでは、主な特徴をあげておく。ただし、11、13、14、16、23の５点は、他よりも器壁が薄いので、年代を異にする可能性があるので除外する。

１、皿・小皿とも、外面の調整が粗く、粘土のたれを残したままのものが多い。

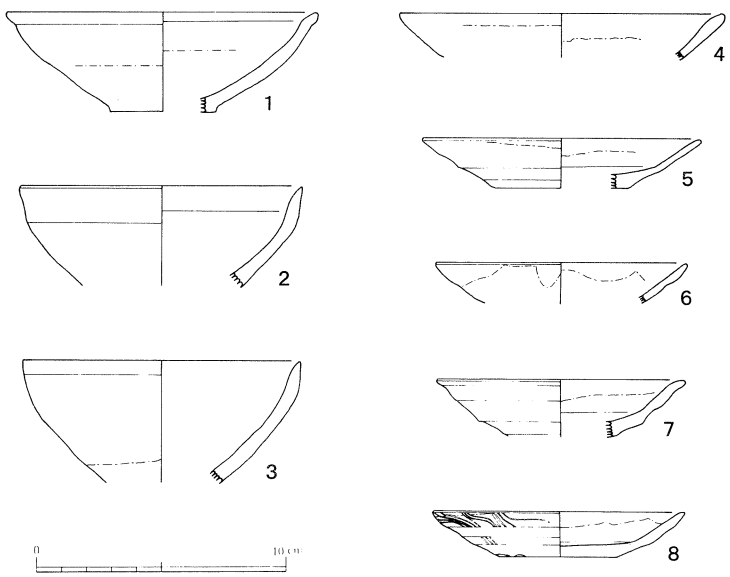
２、すべての器種で、見込み中央を凹めているものが目立つ。

３、皿・小皿にタール状物質の付着しているものがあり、燈明皿として使用したものと思われる。

４、脚を貼り付けた鉢と思われる器種の破片が数点見られる。

中世陶器（第37図、図版19）

中世陶器は、天目茶碗３点と灰釉ないしは鉄釉小皿５点を取り上げた。いずれも、瀬戸ないしは美濃焼と考えられる。



第37図　グリッド出土中世陶器（１：３）

１．Ｂ－３出土。天目茶碗。器高 4.0cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行う。口縁部はＳ字状にくびれ、端部は外に開き、稜をもつ。体部はほぼ直線的に立ち上がる。底部は削り出し高台である。施釉は鉄釉を内面の体部上半、外面の体部中段まで施す。　２．Ｄ－６出土。天目茶碗。内外面ともロクロ撫でを行う。口縁部はわずかにＳ字状のくびれがあり、端部は稜をもつ。体部はわずかに

丸みをもつ。施釉は鉄釉をハケ塗りで、内外面とも現存部全体に施す。　３．Ｄ－６出土。天目茶碗。内外面ともロクロ撫でを行う。口縁部のＳ字状のくびれはかすかに残る程度で、端部は稜をもつ。体部にふくらみはほとんどなく、口径に比べて丈が長い。施釉は鉄釉をハケ塗りで、外面は体部下半、内面は現存部全体に施す。

４．Ｃ－４出土。鉄釉小皿。内外面ともロクロ撫でを行う。体部は直線的に開き、口縁端部を丸くおさめる。施釉は内外面とも口縁部のみに行う。　５．Ｂ－６出土。灰釉小皿。器高は2.0cmを測る。内外面ともロクロ撫でを行うが、外面の体部中ほどに段をつける。口縁部は丸くおさめる。底部は削り出し高台に近く、糸切りを残す。施釉は内外面とも口縁部に施す。６．Ｂ－７出土。灰釉小皿。内外面ともロクロ撫でを行う。体部はややくびれをもつが、ほぼ直線的に開く。端部は丸くおさめる。施釉は口縁部内外面に施す。　７．Ｄ－３出土。灰釉小皿。内外面ともロクロ撫でを行う。体部外面には段をつけ、口縁部はくびれ外反する。施釉は口縁部内面にのみ、ハケ塗りで施す。　８．Ｂ－６出土。灰釉小皿。底径 4.8cm、器高 1.9cm、を測る。内外面ともロクロ撫でを行うが、外面は櫛状工具による線条を刻んだ後、体部をナデ調整で消している。口縁部は直線的に開き、端部に稜をもつ。底部は糸切りである。施釉は内外面とも口縁部に施す。

これらの天目茶碗や小皿は、瀬戸ないしは美濃で焼かれたものと考える。特に、３点出土している天目茶碗は、胎土、器形（特に口縁部のくびれ）、鉄釉状態などが三者三様で、製作年代の差もあろうが、窯が異なっているものと考えられる。

凹石状石器（第38～40図、図版４・18）

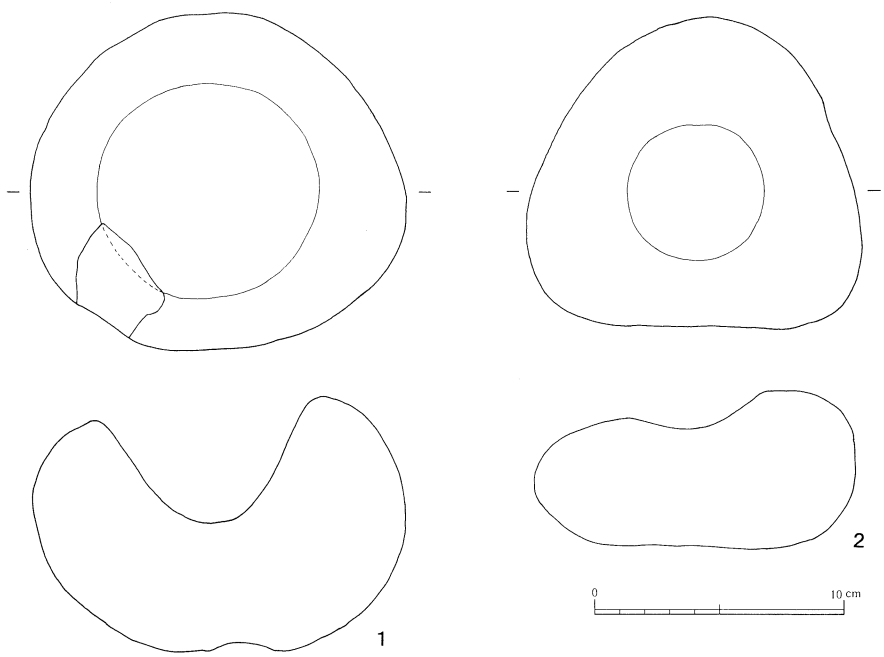
本遺跡からは、安山岩で偏平な礫ないしは楕円体の礫で曲面の一部を凹めた石器が19点出土している。この石器は、縄文時代の凹石とは凹み部の直径、深さとも全く異なり、はるかに大きい数値を測る。また、Ｄ－６より出土したものは、内耳土器と共伴関係にあり、中世に位置づけられることは間違いない。しかし、明確な用途がわからないため、便宜的に「凹石状石器」と呼ぶこととした。

本遺跡出土の凹石状石器には、使用開始時期に近いものから、廃棄段階のものまである。また、使用している礫は、大小さまざまな形状をしている。凹みをつける部分は一定せず、楕円体の先端に凹みをつけているものもあり、凹み部を上面にした時、安定感のないものも多い。

個々のデータは、70ページの一覧表のとおりである。

１．Ｄ－４水路状遺構脇出土。本遺跡から出土したなかでは最大である。底面に安定をよくするためと考えられる浅い凹みがあり、接地面を広くしている。凹み内は滑らかである。かなり使用期間の経たものである。　２．Ｂ－６出土。偏平な礫を使用しているため安定している。凹みは浅く、外周の稜も明瞭ではない。凹み内は滑らかさはない。使用直前の段階を示すものと考えられる。

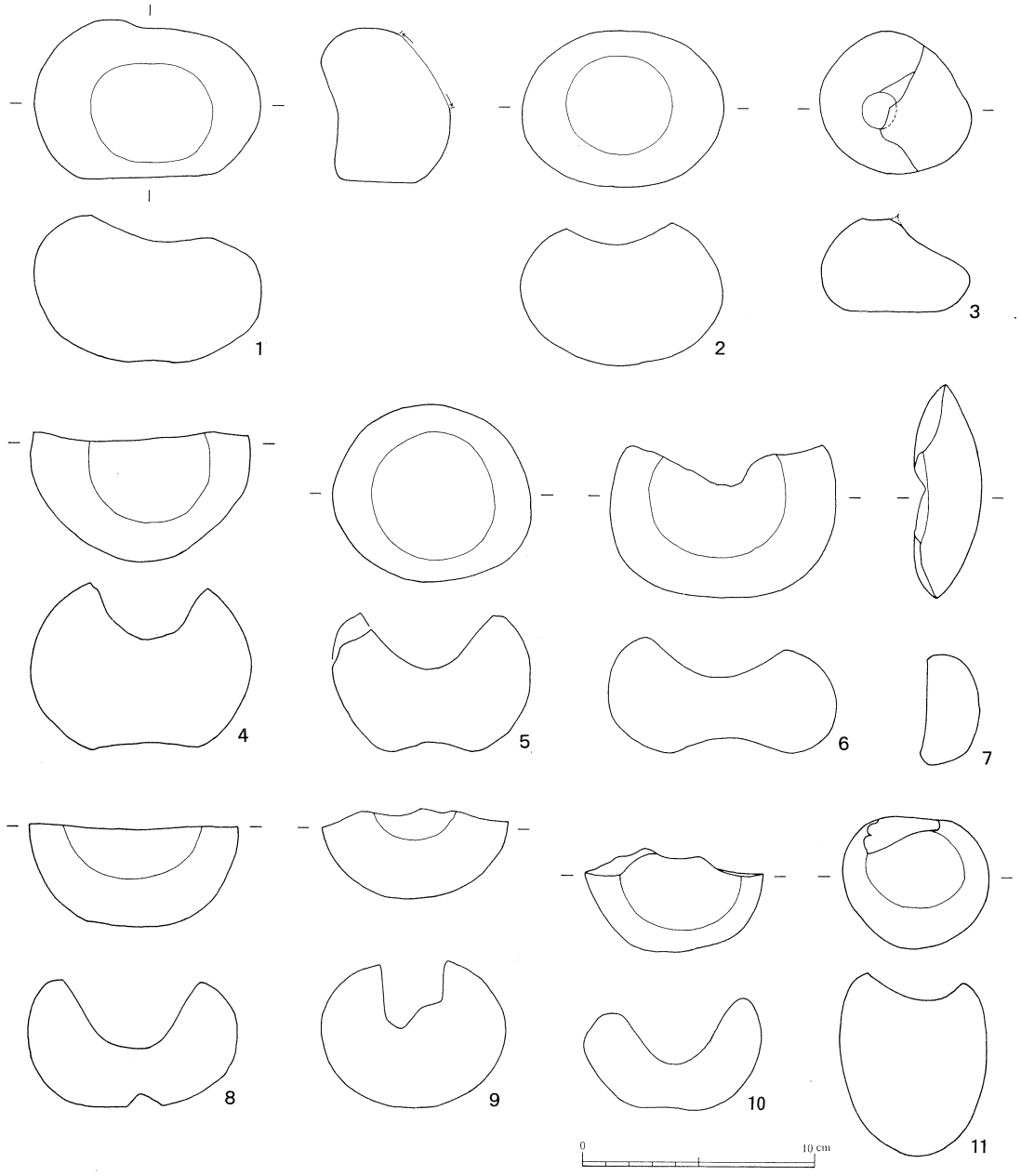
第39図－１．Ｃ－６水路状遺構脇出土。比較的平坦な面に浅い凹みをつくる。凹み内は滑らかではない。外周は明瞭ではなく、使用直前の段階とみられる。なお、裏面によく磨かれた面



第38図　グリッド出土凹石状石器（１：３）

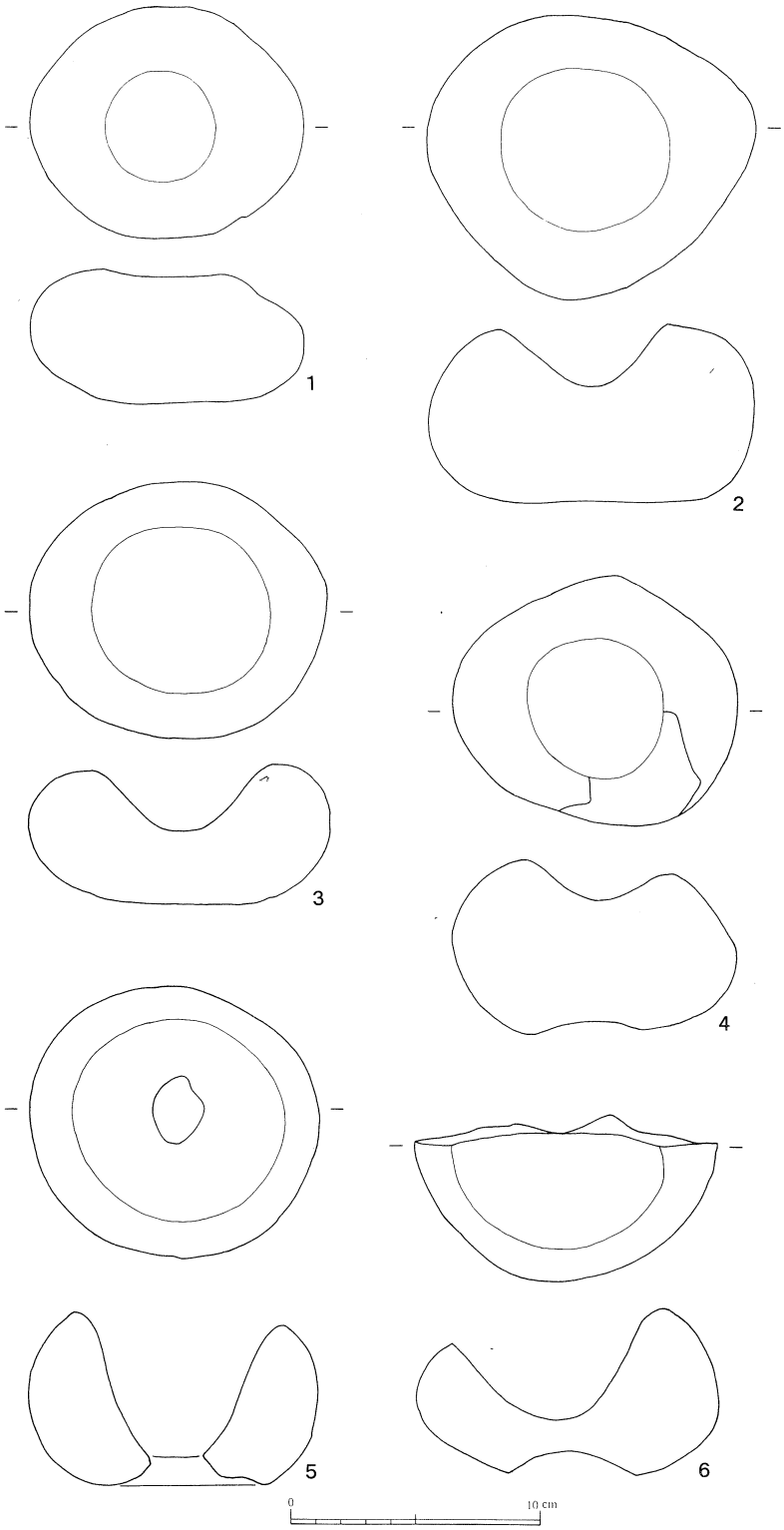
がある。　２．Ｄ－６水路状遺構脇出土。楕円体の礫を使用しているため、安定しない。凹み部は比較的浅いが、外周は明瞭で、内面も滑らかなことから、使用されたことがわかる。　４．一部欠損している。底面を平坦に加工し、安定をよくしている。凹み部は比較的深いが、滑らかな面とはなっていない。　５．Ｅ－５水路状遺構脇出土。底面を平坦に加工している。凹み部は、４と似かよった法量であるが、内面は滑らかとなっている。　６．Ｄ－６水路状遺構脇出土。両面に凹みをもつ。上面は稜が明瞭で、何回か使用されたようであるが、裏面は稜がはっきりせず、最初の加工と思われる。直径 5.0cm、深さ 0.5cmを測る。凹み面はいずれも滑らかではない。　８．Ｃ－２水路状遺構脇出土。半分欠損している。凹み面は滑らかであり、使用中に割れたものと思われる。　10．Ｄ－６水路状遺構脇出土。半分欠損している。礫の大きさに比して、凹み部が大きい。凹み面は若干磨滅しているので、使用中に割れたものと思われる。　11．Ｄ－３水路状遺構脇出土。楕円体の礫の先端部を加工したもので、他に例がない。凹み面は磨滅し、滑らかとなっている。３、７、９は破損品である。

第40図－１．Ｂ－６出土。偏平な礫を使用。凹み部は極めて浅く、外周の稜も明瞭ではない。凹み面は磨滅してはいない。製作途中と見られる。　２．Ｄ－６出土。内耳土器の共伴関係にある。平坦な面を底面として製作しているため、安定は極めてよい。凹み部の外周の稜は明瞭で、凹み面は多少磨滅して滑らかとなっている。使用可能な状態で廃棄されたものと考えられる。　３．Ｄ－４、Ｅ－６出土の破片が接合し完形となった。比較的平坦な面を底面としている。凹み部の直径、深さとも比較的大きい。凹み面は磨滅しておらず、滑らかではない。再加工した状態と考えられる。　４．Ｃ－６出土。円礫に近いもの使用し、安定させるために底面



第39図　グリッド出土凹石状石器（１：３）

に浅い凹みをつくり接地面を大きくしている。凹み部の稜は丸くなって不明瞭、内面も磨滅し、滑らかとなっている。使用され、再加工を必要とする状態と考えられる。　５．Ｄ－６出土。２．と同様に内耳土器と共伴関係にある。凹み部は外周の稜は明瞭で、内面は滑らかとなっている。使用中に底面が抜けた状態と考えられる。礫の外形が、直径11cm前後、厚さ 6.5cm程度に対し、加工を繰り返し、凹み部の直径 8.5cm、深さ 5.5cm程度になるまで使用されたことが



第40図　グリッド出土凹石状石器（１：３）

認められる。　６．Ｃ－６出土。半分欠損している。凹み面は磨滅し滑らかとなっている。破損の状況等からみて、５と同様に使用中に底面が抜けて、廃棄されたものと考える。

小結　凹石状石器は、物をすりつぶすための石器である。

まず、礫面に直径４cm台、深さ１cm以内の凹みを刻み使用する。そして、凹みの刻みが磨滅し、滑らかな面になった時点で再加工を行い、再び使用する。

この繰り返しにより、凹みは次第に大きく、深くなる。最後は、加工の際に礫が割れるか、使用中に底面が貫通し、使用不能になるかなどの要因により、廃棄されることになるものと考える。

一覧表でもわか

るように、凹み部の直径と深さは、若干のばらつきはあるものの、相関関係が認められる。それに対して、礫の大小との関係は、あまりはっきり出ていない。

さて、何をすりつぶしたかが今後の課題として残されるが、出土位置が水路状遺構の周辺に比較的集中していることや内耳土器と共伴関係にあることは、用途を考える上での手がかりとなろう。

凹　石　状　石　器　一　覧　表

図面番号	出土地点	外形(cm)		凹み部(cm)		備考
		平面寸法(長径×短径)	厚さ(最小～最大)	直径(最小～最大)	深さ(最小～最大)	
38図－1	D－4－17	15.0×13.5	9.2～10.2	8.6～8.9	4.1～5.0	底面に凹みあり
38図－2	B－6－12	13.0×12.5	5.1～ 6.3	.5 5	0.4～1.5	偏平礫使用
39図－1	C－6－25	9.7× 6.5	5.5～ 6.3	4.2～5.2	0.2～1.0	側面に擦痕あり
39図－2	D－6－17	8.7× 6.7	5.8～ 6.1	4.2～4.6	0.6～0.9	
39図－3	E－6－6	6.5× 6.1	4.0	1.5	0.1	一部欠け
39図－4	E－6－6	9.5×	6.7～ 7.2	～5.2	2.2～2.5	底面に凹みあり・半欠
39図－5	E－5－1	8.5× 7.7	5.7	4.5～	2.2	底面に凹みあり
39図－6	D－6－22	9.7×	4.4～ 5.0	～5.9	1.2～1.7	底面凹み大・一部欠
39図－7	D－6－14		(5.3)			一部残存
39図－8	C－2－21	9.0×	5.3	～5.8	3.0	半欠
39図－9	E－5－1		(6.0～6.2)	4.0～4.7		一部残存
39図－10	D－6－17	7.7×	4.1～ 4.8	～5.2	2.1～2.8	半欠
39図－11	D－3－11	6.3× 5.6	7.4～ 7.8	3.3～4.3	0.6～1.1	円礫をたてに使用
40図－1	B－6－18	11.0× 9.3	5.2～ 5.4	4.5	0.1～0.2	
40図－2	D－6－14	13.2×11.4	6.8～ 7.1	6.6	2.3～2.5	底面は平坦
40図－3	E－6－6 D－4－17	12.0×10.3	5.4～ 5.6	6.7～7.2	2.5～2.8	接合 E－6－6 ・ D－4－17
40図－4	C－6－11	11.5×10.0	6.3～ 7.0	5.5	1.1～1.6	底面に凹みあり
40図－5	D－6－14	11.6×10.9	6.4～ 6.9	8.1～8.6	(5.3～5.8)	底面へ貫通
40図－6	C－6－17	12.2×	5.1～ 6.5	～8.5	3.1～4.6	底面に凹み・半欠

注１　外形の厚さは、凹み部を上面にした時の凹み部外周と接地面との最小値～最大値を表示する。

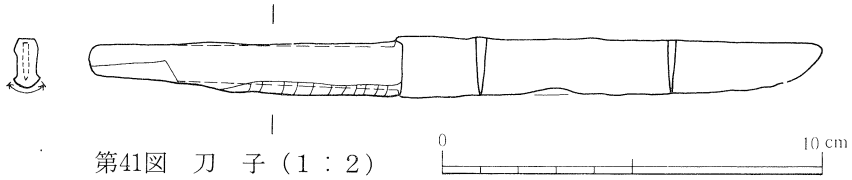
注２　凹み部の直径は、円形でないため、最大値と最小値を表示する。

注３　凹み部の深さは、注１で述べたように、外周の高さが異なるため、最深部までの最大値と最小値を表示する。

注４　(　　)内は、推定寸法である。

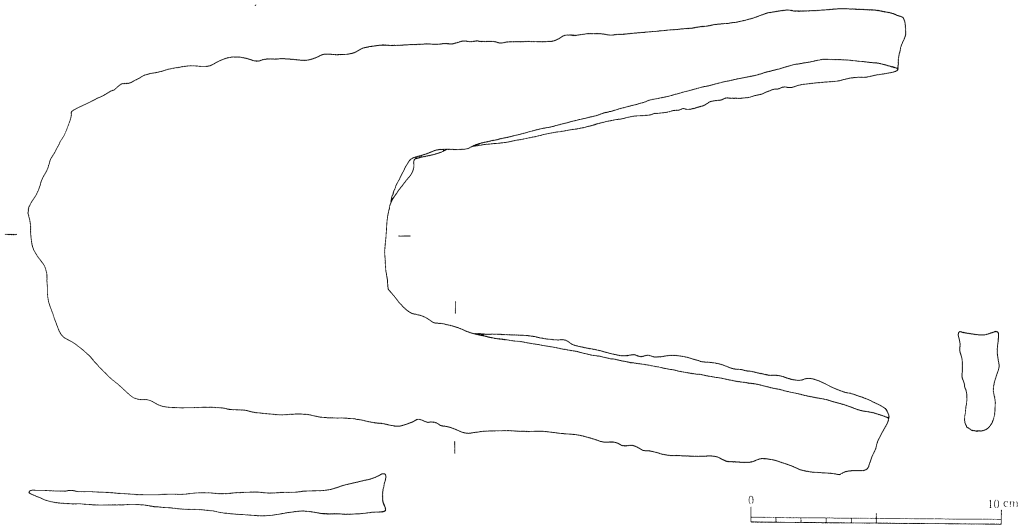
刀子（第41図、図版５・18）

土坑群の集中しているＤ－２より出土。全長19.3cmの平棟造りの刀子である。遺存状態は極めてよく、身は刃こぼれが１か所あるほかは、切先から茎まで完全で、両関とも原形を保っている。茎には木質の柄が一部残っている。目釘穴は判然としない。



第41図　刀　子（１：２）

鋤先（第42図、図版５・18）



第42図　水路状遺構内出土鋤先（１：３）

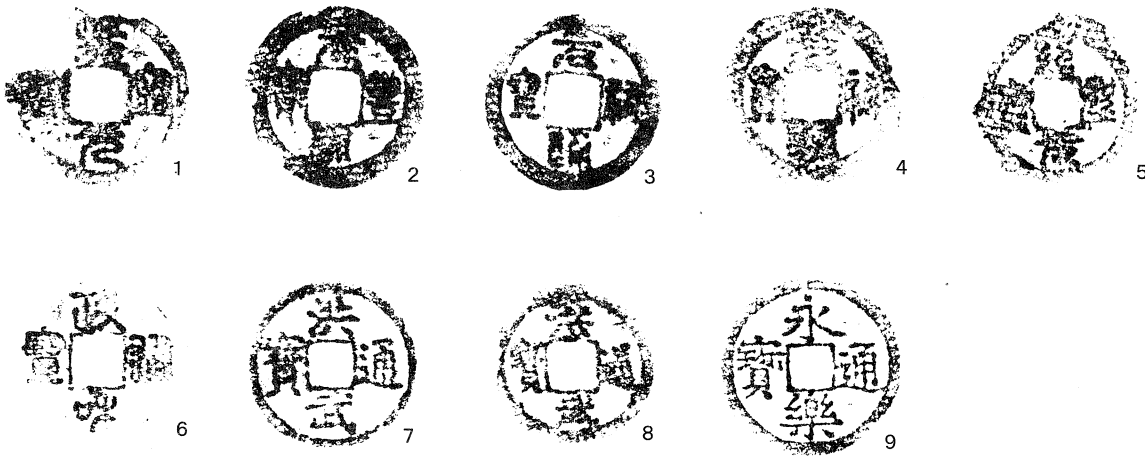
Ｃ－７水路状遺構内出土。全長35.0cm、基部での幅15.0cmの鋤先である。Ｕ字形で先端に刃部をもち、基部には木質部をはめこむ溝がある。刃部は磨滅して鋭利ではない。

なお、水路状遺構内にあったため、多量の白色砂礫が付着している。

古銭（第43図）

本遺跡からは、19点の古銭が出土している。いずれもグリッドからである。その大半は北宋銭である。また、洪武通宝及び永楽通宝は、材質等からみて、明銭よりも国内模造銭ないしは鐚銭の可能性がある。また、唐銭である開元通宝が当地まで入りこむか疑問であったが、字体から判断した。※注

※注　　日本貨幣商協同組合編　『日本貨幣型録1982年版』　1982



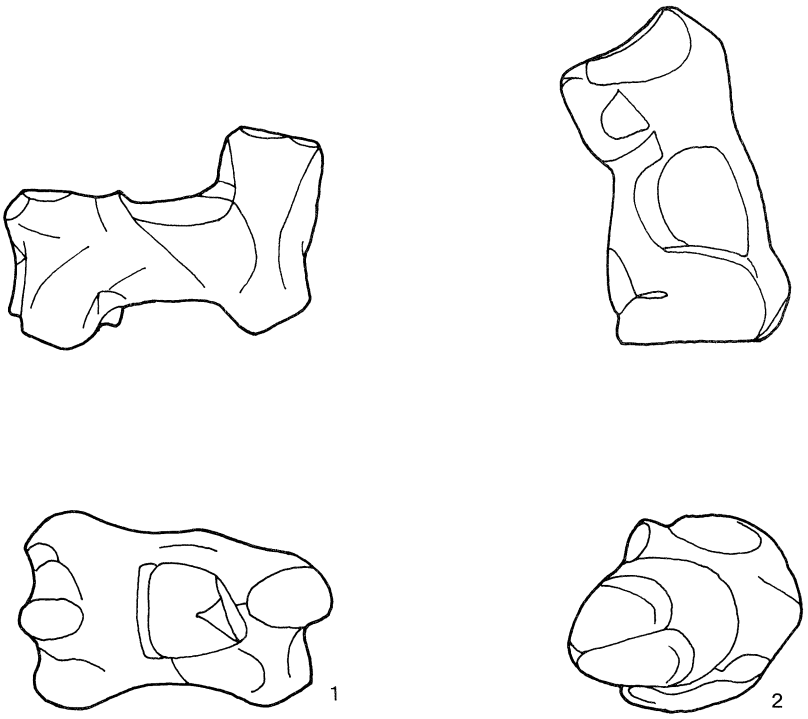
第43図　グリッド出土古銭（１：１）

図番	出土地点	名　称	年　代	西　暦	記　事	
2	D－1－22	元豊通宝（篆）	北宋　元豊元年	1078		
	D－2－ 8	□□□宝（篆）			錆のため判読不能	
9	D－2－16	永楽通宝	（明　永楽６年）	（1408）	国内模造銭の可能性あり	
5	B－3－20	紹聖元宝（篆）	北宋　紹聖元年	1094	一部欠け	
1	C－3－ 1	熙寧元宝（篆）	北宋　熙寧元年	1068	一部欠け	
	D－3－24	紹聖元宝（篆）	北宋　紹聖元年	1094	割れ	
	B－4－ 9	嘉祐通宝（真）	北宋　嘉祐元年	1056	半分欠け	
7	B－4－ 9	洪武通宝	（明　洪武元年）	（1368）	鐚銭の可能性あり	同一地点出土
	B－4－ 9	嘉祐通宝（真）	北宋　嘉祐元年	1056	半分欠け	
	B－4－ 9	嘉祐通宝（篆）	北宋　嘉祐元年	1056	半分欠け	
4	C－4－20	元祐通宝（篆）	北宋　元祐元年	1086	一部欠け	同一地点出土
	C－4－20	開元通宝	唐　武徳４年	621	割れ	
	D－4－ 4	天□□□			３／４欠け	
6	D－4－21	政和通宝（篆）	北宋　政和元年	1111	一部欠け	
3	D－4－22	元祐通宝（篆）	北宋　元祐元年	1086		木片付着同一地点出土
	D－4－22	淳熙元宝	南宋　淳熙元年～	1174～	一部剥落	
	D－4－22	熙寧元宝（篆）	北宋　熙寧元年	1068	割れ	
8	C－6－ 9	洪武通宝	（明　洪武元年）	（1368）	鐚銭の可能性あり	同一地点出土
	C－6－ 9	元祐通宝（真）	北宋　大観元年	1107	２／３欠け	

注　洪武通宝及び永楽通宝が国内鋳造品の可能性があるので、（　）の年代、西暦はあくまでも明で鋳造された時期を指す。

第９節　その他の遺物

土製品（第44図、図版19）



第44図　土　製　品（１：１）

本遺跡からは、年代は不明ながら２点の動物を形どった土製品が出土している。

１．Ｃ－６出土。馬形土製品。頭部・左前足・尾部は欠損しているが、鞍部を丹念に表現している。胎土は精選され、焼成も良好で、赤褐色を呈する。

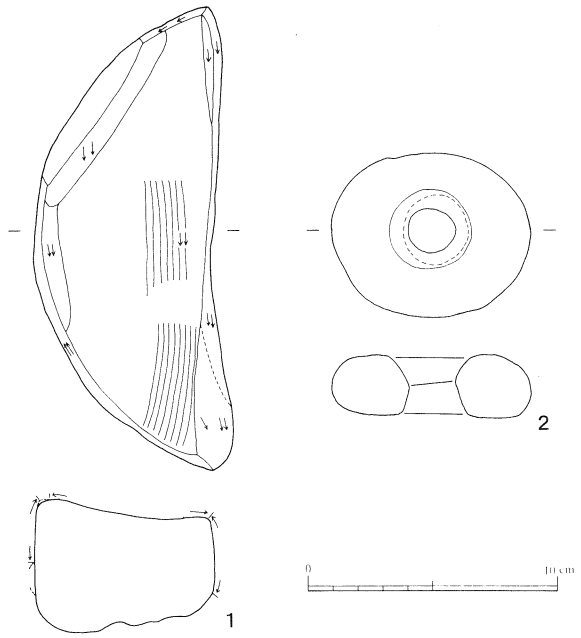
２．Ｃ－７出土。猿形土製品。前足と右足部を欠くが、直立した姿を表現している。足は安定するよう丹念な調整を行う。胎土は精選され、焼成も良好で、褐色を呈する。

その他の石器（第45図、図版19）

本遺跡から出土した石器のほかで、年代の不明な２点を取りあげた。いずれもグリッド出土である。

１．Ｃ－７出土。砥石。長さ18.5cm、最大幅 7.3cm、厚さ最大 5.3cmを測る。半月状に加工された砂岩製である。熱をうけて表面の一部が剥落している。研磨痕は、平面、側面に多数観察され、器面は滑らかとなっている。

２．Ｄ－２出土。ドーナツ状石器。平面形は楕円で、長径 8.0cm、短径 6.4cm、厚さ 2.6cmを測る。孔の外周の直径は 4.0cmである。偏平な安山岩礫を左右より刻み、ドーナツ状の孔をあけたものである。前述した凹石状石器の底の抜けたものとは全く異なる。



第45図　その他の石器（１：３）

第10節　五輪塔群（第46～49図、図版13）

本遺跡に隣接する国道20号線は、大正年間にバイパスとして建設工事が行われた。その際、宝篋印塔の残欠を含む多数の五輪塔群が、偶然に発見された。発掘調査時、これらの石塔群は、水田用水脇の土手に放置された状態だったものを収集したものと、Ｂ－２の水路状遺構の石組に組み込まれていた火輪、地輪をも含んでいる。

現存するものは、五輪塔の空風輪　17点、火輪　８点、水輪　８点、地輪　２点、及び宝篋印塔の相輪部２点であり、完形になるものは１基も見られない。

五輪塔群の個々の形状・法量には大きなばらつきがあるが、主な特徴は次のとおりである。

１．すべて安山岩製である。

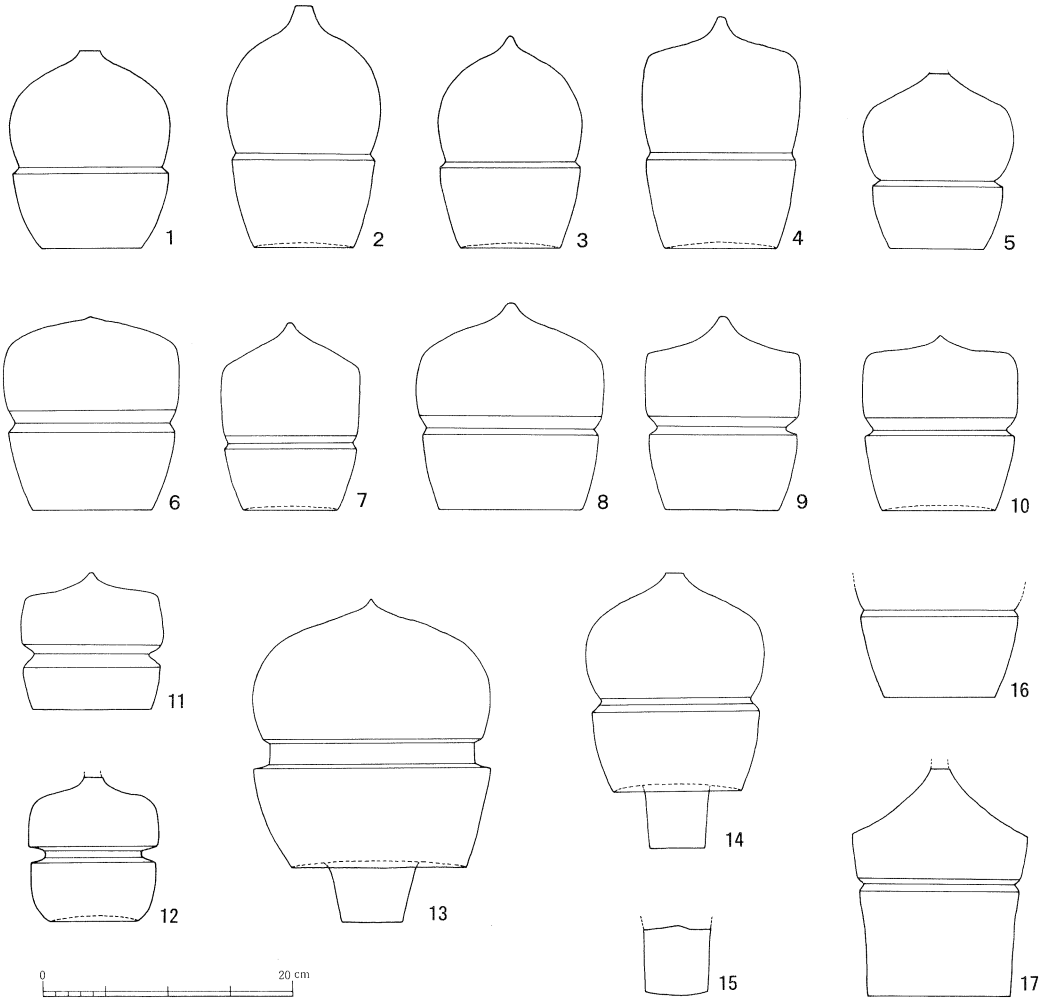
２，風化があまり見られず、ノミによる加工痕の残っているものが多い。

３．空風輪は、円形に近い曲線のものと平たいものとがあるが、空輪の最大径より風輪のそれが上まわるものはない。枘をもつものは３点見られる。

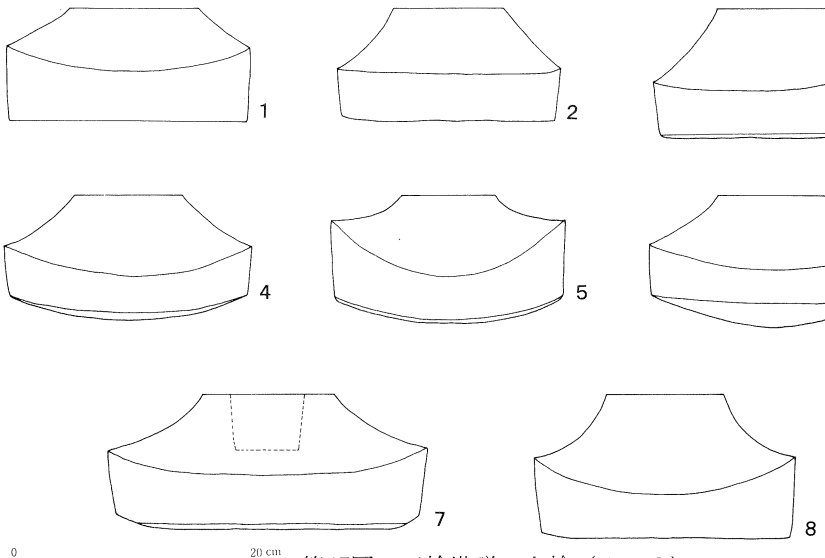
４．火輪は、軒反りの大きいものと比較的平らなものがある。第47図－５はかなり反りの強いものである。枘穴をもつものは１点見られる。

５．水輪は、全体に重心の高さが低く、特に第48図－３・７・８はかなり低くなっている。しかし、下ぶくれを呈するような安定感のあるものとは異なる。いずれにも、上下両側に同規模の凹みがある。種子を刻したものは１点もない。

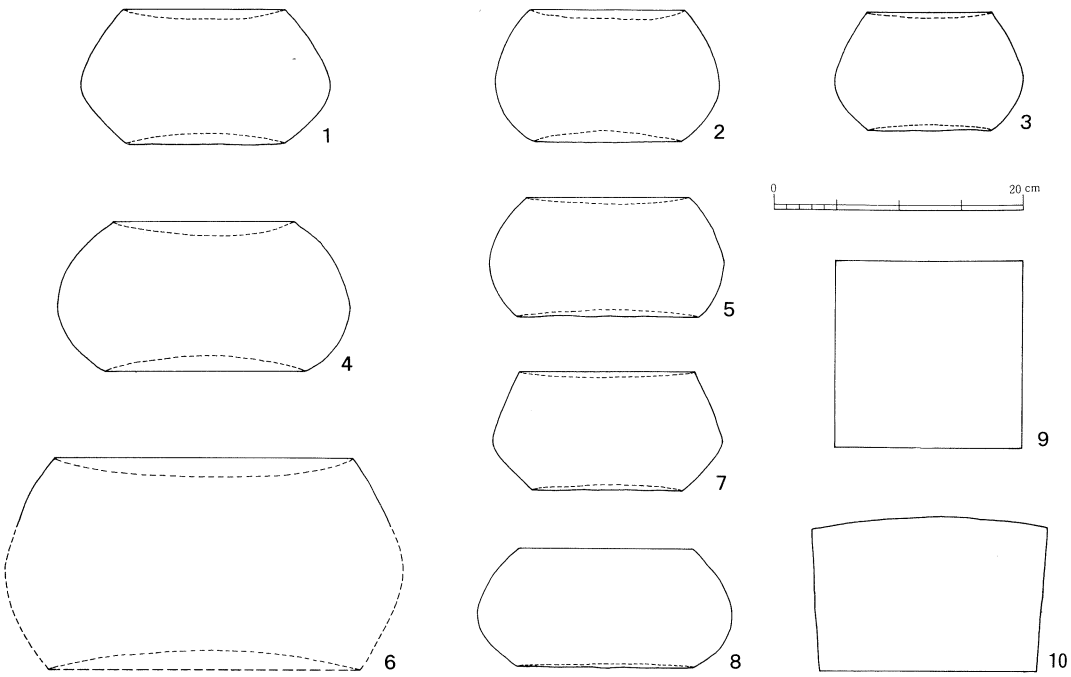
６．地輪は、第48図－９は均整はとれているものの小ぶり、10は形状が一般的なものと異なるため、いずれも五輪塔の残欠か疑問が残る。



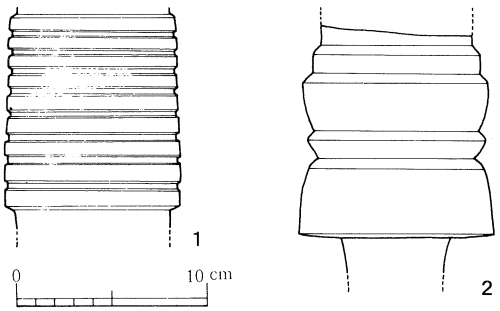
第46図　五輪塔群　空風輪（１：６）



第47図　五輪塔群　火輪（１：６）



第48図　五輪塔群　水輪　地輪（１：６）



第49図　宝篋印塔残欠（１：４）

７．宝篋印塔残欠の１は、相輪の丸輪の部分たあたる。２は、請花が刻まれてはいないが、相輪の伏鉢から九輪の下までと考えられる。伏鉢の下に枘がある。

これらの五輪塔群の年代は、特徴から見て中世（室町時代～戦国時代）のものと考えて差し支えないと考える。

さらに、中世の水路状遺構の石組に火輪・地輪が組み込まれていることから、本遺跡の中世の遺構は２時期あるものと考えられる一方、五輪塔群のほとんどが、明瞭な製作ノミ痕を見せ、ほとんど風化していないため、本遺跡で五輪塔が製作され、不要になった残欠を石組内に組み入れたものとも考えられる。

いずれにしても、国道建設工事に伴う五輪塔群の発見された状況が明らかでないため、推測の域を出ない。

第Ⅳ章　ま　と　め

坂下遺跡出土の土師器と灰釉陶器

本遺跡では、平安時代の住居跡が４軒検出され、うち第１・３号住居跡から良好な資料が出土したほか、グリッド遺物でもかなりの資料が出土している。ここでは、それらの資料のなかで、年代決定が可能な暗文付坏、灰釉陶器について触れてみたい。

土師器は坏、皿、甕が出土している。坏は、暗文を施すものと黒色処理されたものが主体となる。暗文を施した坏は、口径10.5cm、底径 4.6～ 5.6cm、器高 3.7～ 4.7cm程度の範囲におさまる。内外面ともロクロ撫で後、内面に暗文を施し、外面は体部下半を中心にヘラ削りを行う。底部は糸切り後、ヘラ削りを端部ないしは全面に行う。ヘラ削りにより底部と体部との稜の明瞭でないものが多い。体部はゆるやかに曲がり、口縁部に至る。口縁端部はほとんど外反せず、丸くおさめている。暗文は見込みの外周で止まっている。これらの特徴は、ほとんどの坏に共通し、９世紀第４四半期に位置づけられている。[※注1]

例外としては、第３号住居跡出土の墨書「浄」のある坏などは、口縁部が若干外反し、暗文も他が口縁端部近くまでのびているのに対し、口縁部下で止まっている。この特徴は、10世紀第１四半期に位置づけられよう。[※注2]

次に、灰釉陶器の椀は、体部はゆるやかに立ち上がり、口縁端部はやや外反し、比較的薄手である。底部には比較的細長くてハの字形に外に開き、内面下端が内彎し、外面下半が内傾して稜を作り出す断面が三日月形を呈する、三日月高台が付けられる。内外面ともロクロ撫でを行う。施釉は刷毛塗りで、主として体部上半に施す。見込みには直接重ね焼き痕がある。この椀の特徴は黒笹90号窯式の時期のそれと一致し、９世紀後半～10世紀前半に位置づけられる。[※注3]

このように、暗文土師器と灰釉陶器の年代はほぼ一致することから、坂下遺跡の平安時代の遺構の年代は、９世紀末から10世紀初頭と位置づけられる。

中世遺物について

本遺跡出土の中世遺物は、内耳土器、土師質土器（皿・小皿）、中世陶器などがある。

内耳土器は、大きく分けて二つの種類がある。前者は胴部の高さが14～16cm、器壁が 0.8cm以内で、底部が極端に薄いもの、後者は胴部の高さが12cm以下で、器壁が１cm以上、底部が極端に厚手のものがある。これらは、共存して出土していることから、年代の差とは考えにくく、用途が異なっているものと考える。

土師質土器には、皿と小皿とがあるが、いずれも身は浅い。大半のものは、稜をもたず厚手であるが、見込みに凹面をもつ。他のものは、稜をもち薄手で、底部が中心に向かって薄くなっている。これらの特徴から、土師質土器の年代は、15世紀後半～16世紀前半と見られる。[※注4]

注１、２　長沢宏昌他　1985　「北掘遺跡出土の土師器について」『北掘遺跡』
注３　斎藤孝正　1982　「猿投窯における灰釉陶の展開」『考古学ジャーナル211』
注４　坂本美夫　1983　「山梨県に於ける15世紀以降の土師質土器編年」『甲斐考古　20の１』

参考文献

○白州町誌編纂委員会	1986	『白州町誌』	白州町
○会田　進　他	1974	『扇平遺跡』	岡谷市教育委員会
○赤星直忠　他	1977	『尾崎遺跡』	神奈川県教育委員会
○武藤雄六　他	1978	『曽利』	富士見町教育委員会
○白石浩之　他	1981	『細田遺跡』	神奈川県教育委員会
○佐々木藤雄	1986	『小黒坂南遺跡群』	境川村教育委員会
○長沢宏昌　他	1985	『北堀遺跡』	山梨県教育委員会
○森　和敏　他	1984	『石橋条里制遺構他』	山梨県教育委員会
○山下孝司　他	1987	『中本田遺跡他』	韮崎市委育委員会
○山路恭之助	1984	『中尾城遺跡他』	須玉町教育委員会
○宮沢公雄	1987	『普門寺遺跡』	明野村教育委員会
○雨宮正樹	1985	『旭東久保遺跡』	高根町教育委員会
○保坂康夫	1987	『横畑遺跡他』	山梨県教育委員会
○佐野勝広	1986	『宮原遺跡』	小淵沢町教育委員会
○坂井秀弥　他	1984	『今池遺跡他』	新潟県教育委員会

○斎藤孝正　1982　「猿投窯における灰釉陶の展開」『考古学ジャーナル　211』

○斎藤孝正　1981　「尾北窯における灰釉陶器の展開」
『桃山台ニュータウン遺跡調査報告書Ⅲ』

○斎藤孝正　他　1983　「猿投窯編年の再検討について」
『愛知県陶磁資料館研究紀要２』

○田口昭二　他　1985　『美濃窯の一三〇〇年』

○坂本美夫　1983　「山梨県に於ける15世紀以降の土師質土器編年」
『甲斐考古　20の１』

○小林秀夫　1982　「長野県における内耳土器の編年と問題」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野市　その５』

○庚申懇話会　1980　『日本石仏事典〈第二版〉』　雄山閣

○加藤唐九郎　1972　『日本陶器大辞典』　淡交社

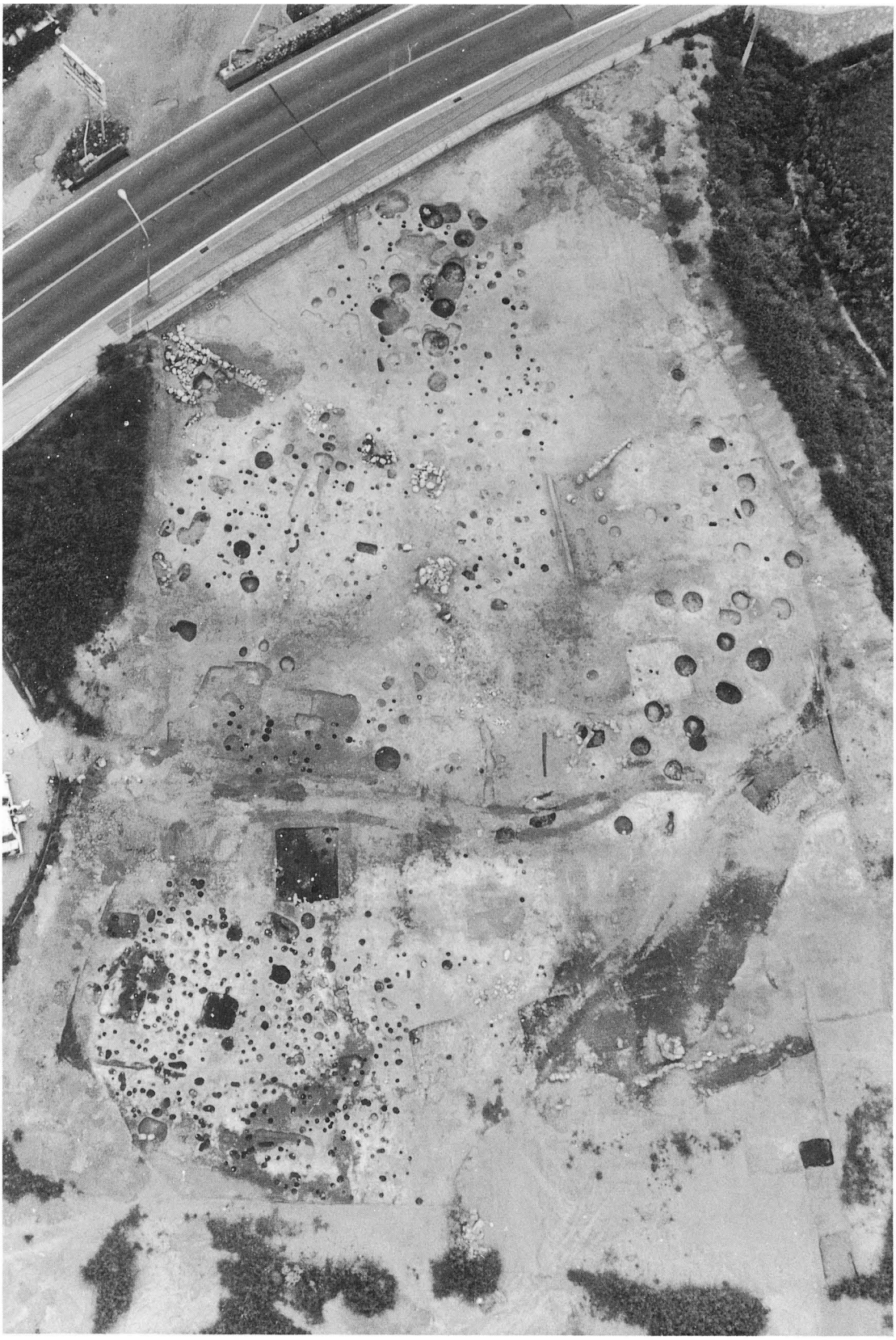
○矢部倉吉　1973　『古銭と紙幣　収集と鑑賞』　金園社

○日本貨幣商協同組合　1982　『日本貨幣型録　1982年版』

○山梨県立考古博物館　1985　「山梨の中世陶磁」『第３回特別展図録』

○楢崎彰一　他　1976　「瀬戸　美濃」『日本陶磁全集　第９巻』　中央公論社

図　　版



坂下遺跡全景

図版2

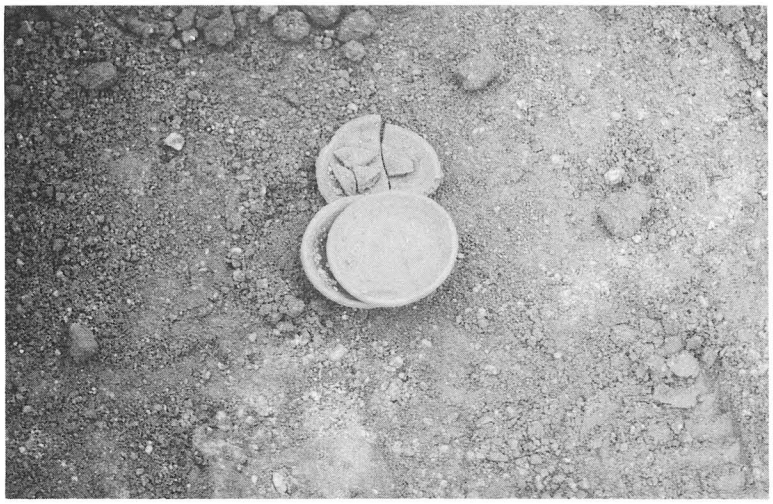
重機による
表土剥ぎ状況

遺物包含層発掘風景

遺構検出状況

図版3

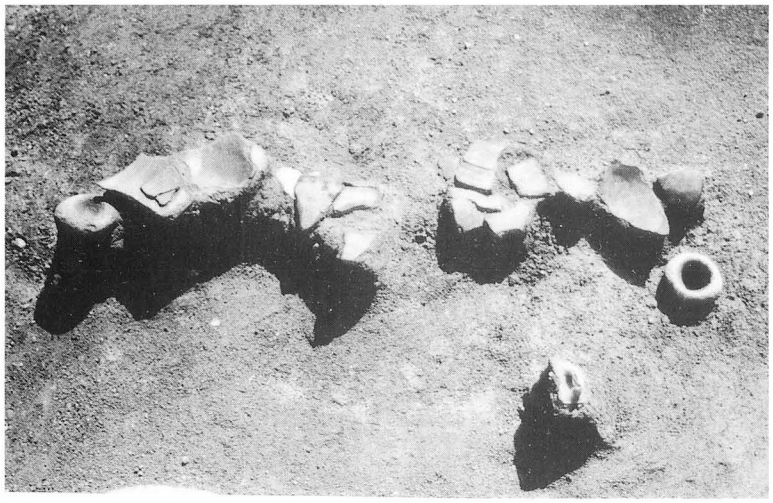
Ｅ－６
土師質土器出土状況



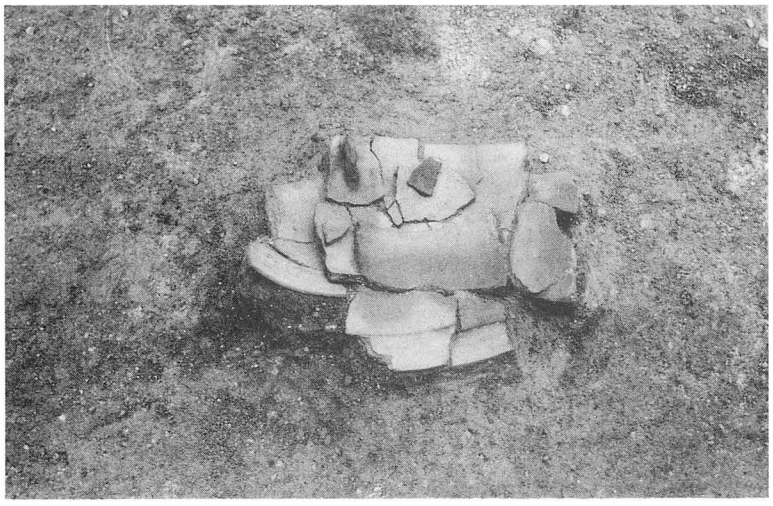
Ｆ－３・Ｐ６上面
土師質土器出土状況

Ｃ－３・水路状遺構脇
土師質土器出土状況

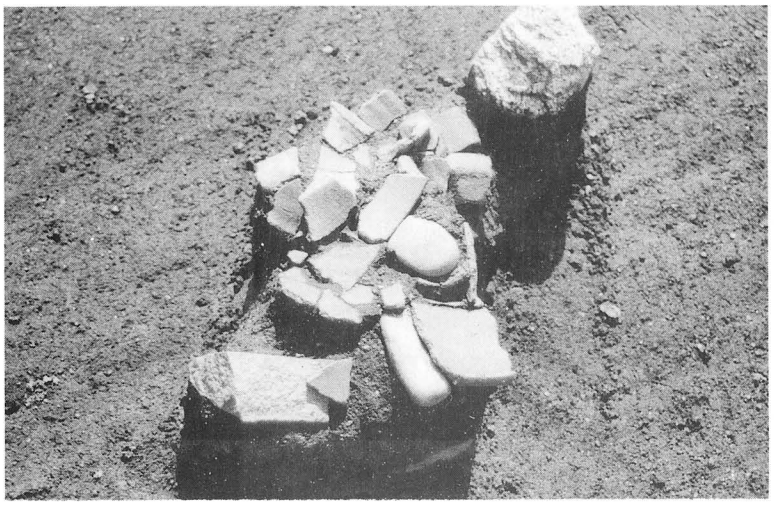
図版4



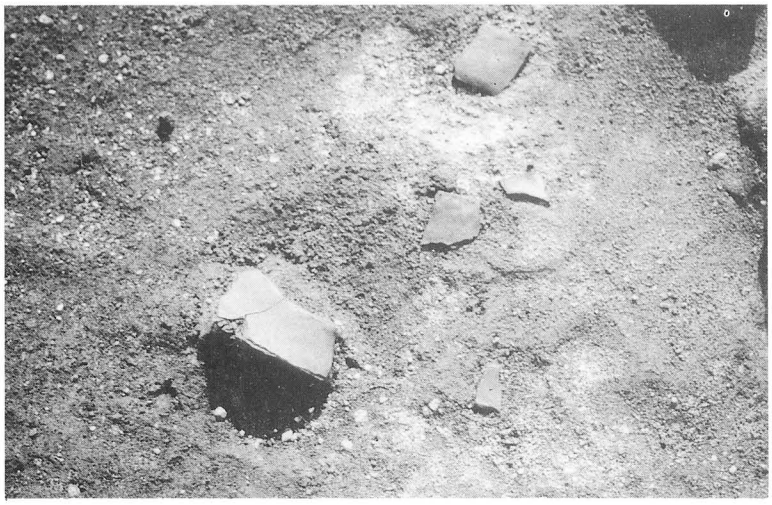
D－6
水路状遺構付近
内耳土器
凹石状石器出土状況



D－6
水路状遺構付近
内耳土器出土状況



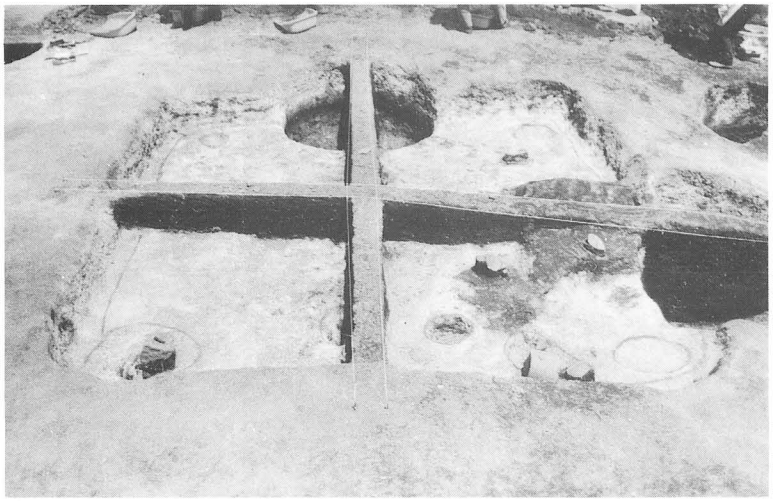
E－6
遺物出土状況



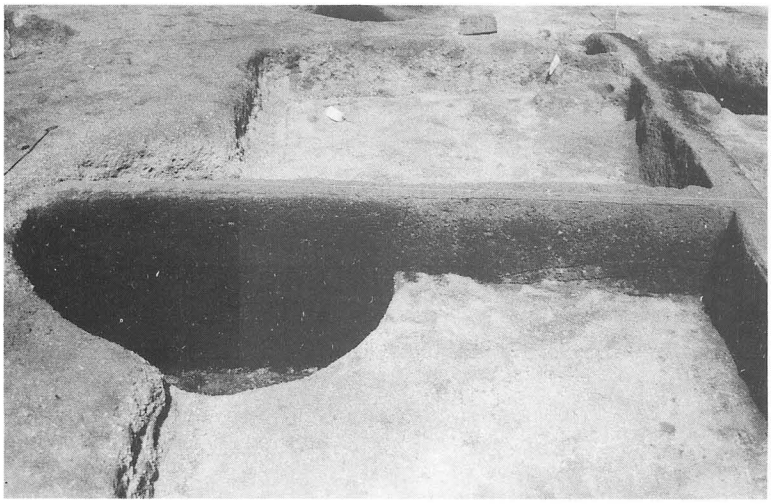
D－6
水路状遺構付近
擂鉢出土状況

C－7
水路状遺構内
鋤先出土状況

D－1・2
土坑群上面
刀子出土状況

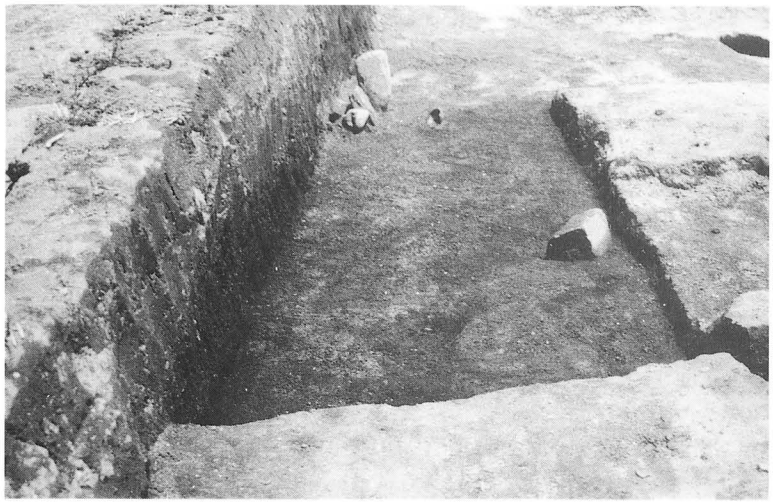


第１号住居跡
遺物出土状況

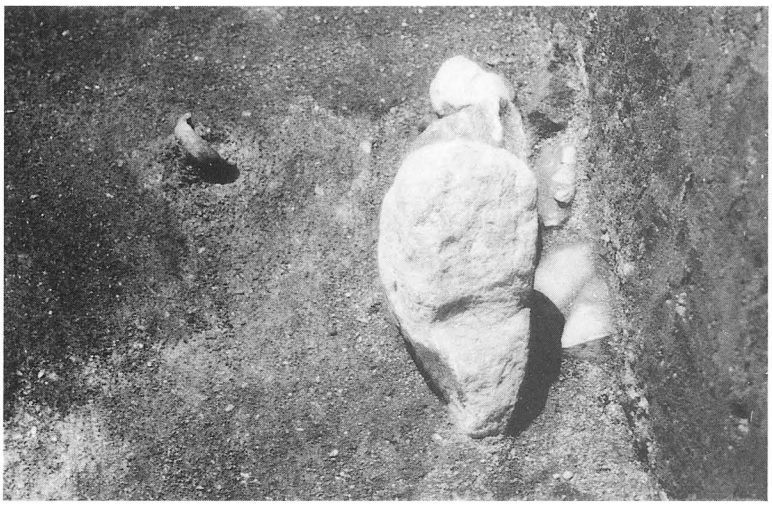


Ｅ－４　Ｐ６と
第１号住居跡
重複状況

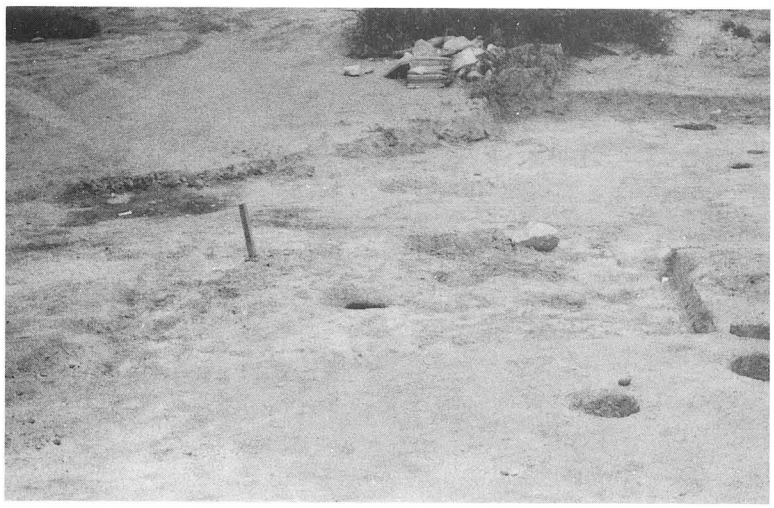
第１号住居跡
完掘状況



第２号住居跡
炭化物分布状況

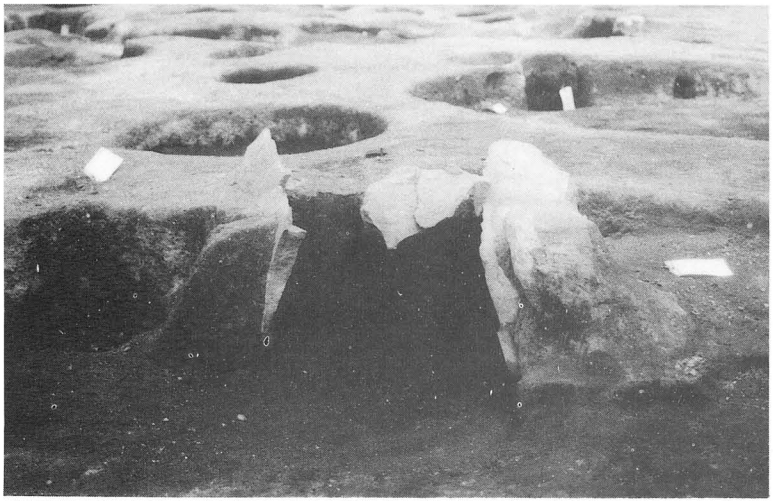


第２号住居跡
カマド袖石状況

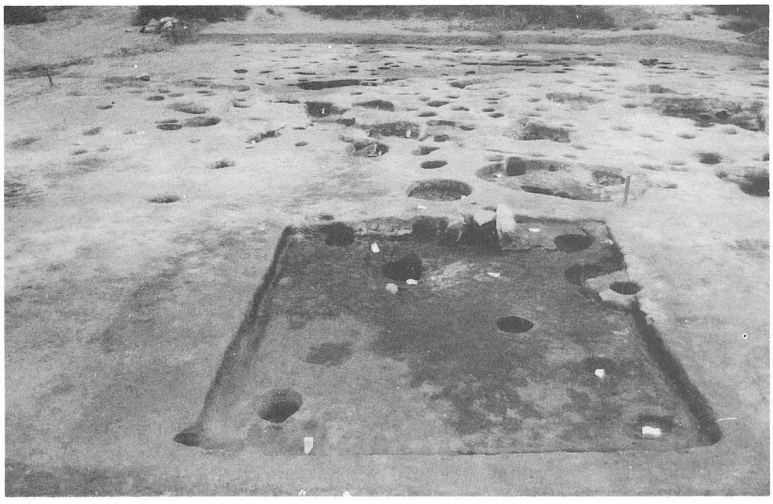


第２号住居跡
完掘状況

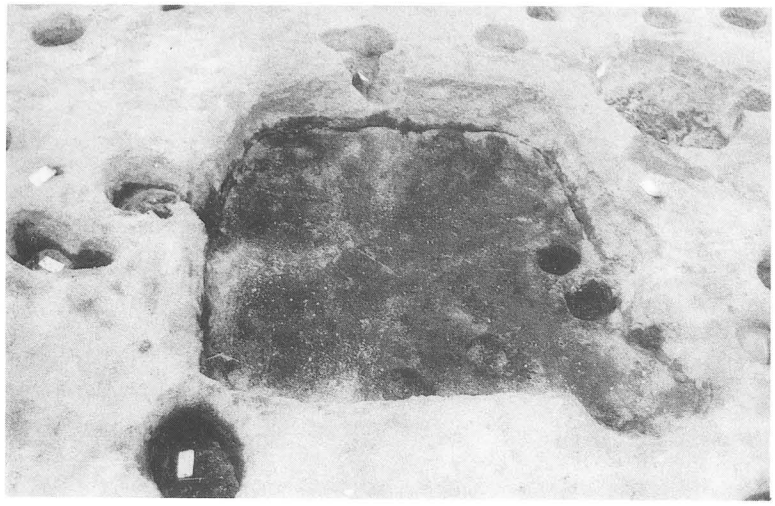
第３号住居跡
カマド完掘状況



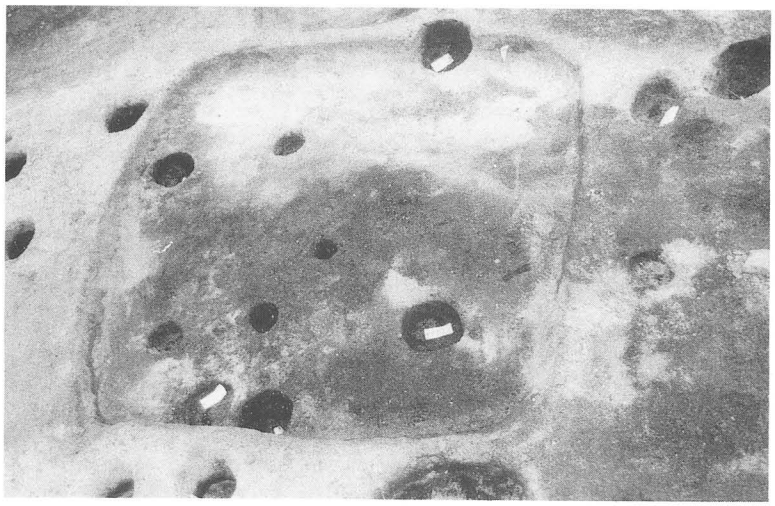
第３号住居跡
カマド完掘状況



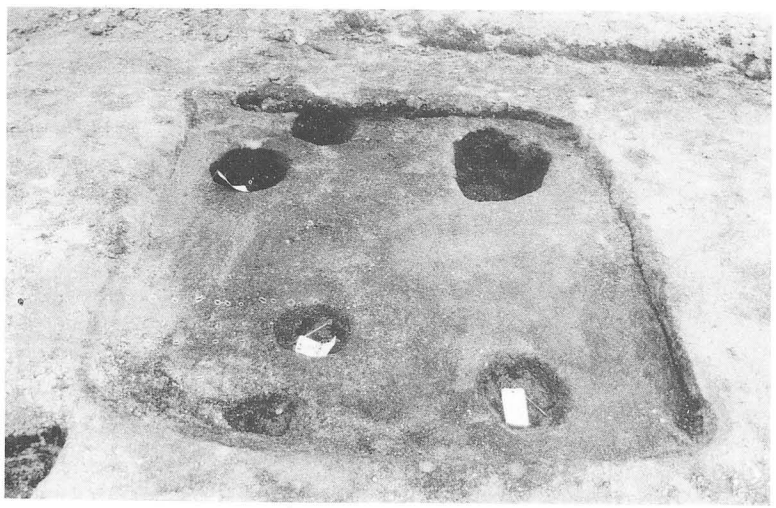
第３号住居跡
完掘状況



第1号小竪穴
完掘状況



第2号小竪穴
完掘状況

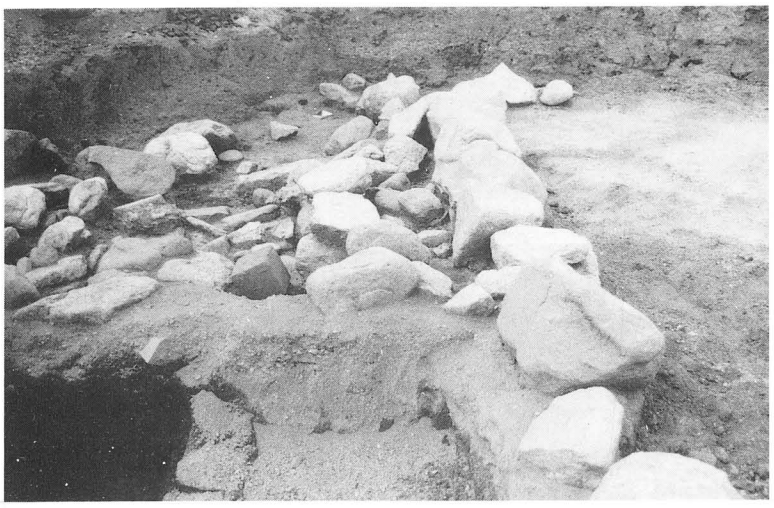


第3号小竪穴
完掘状況

図版10

第1号掘立柱建物跡
完掘状況

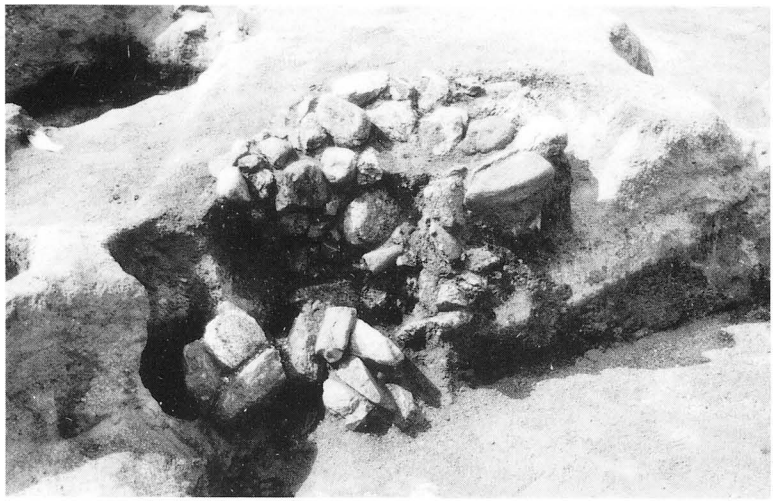
水路状遺構
完掘状況



水路状遺構
石組部完掘状況

D－3
水路状遺構内石組
完掘状況

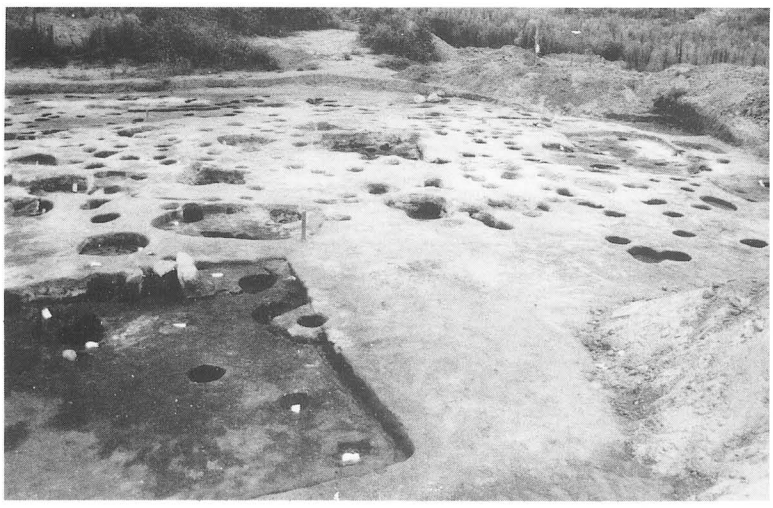
同上石組内
土師質土器出土状況



D－2　P72
集石土坑

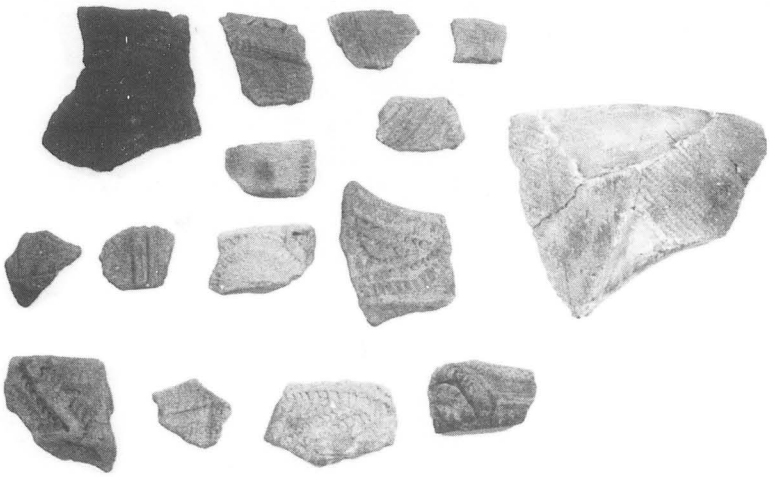
D－1・2
土坑群
完掘状況

E・F－4・5
土坑群
完掘状況

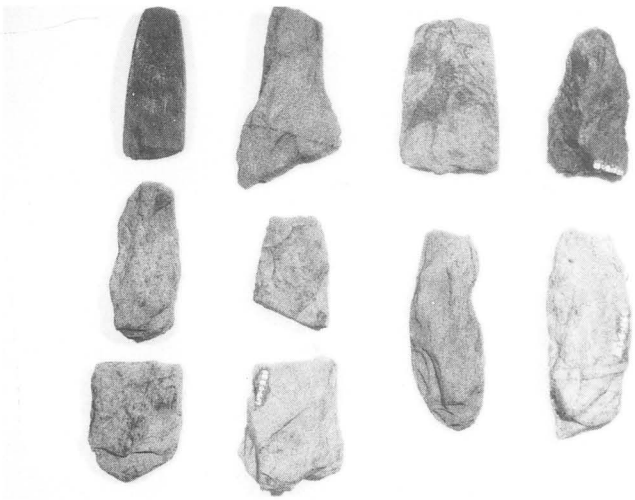


B・C－5・6
遺構群
完掘状況

国道建設時発見
五輪塔群

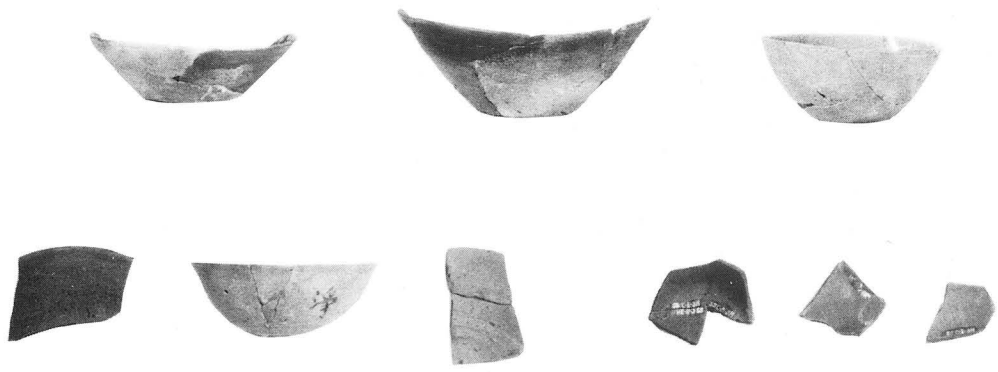


グリッド出土
縄文土器

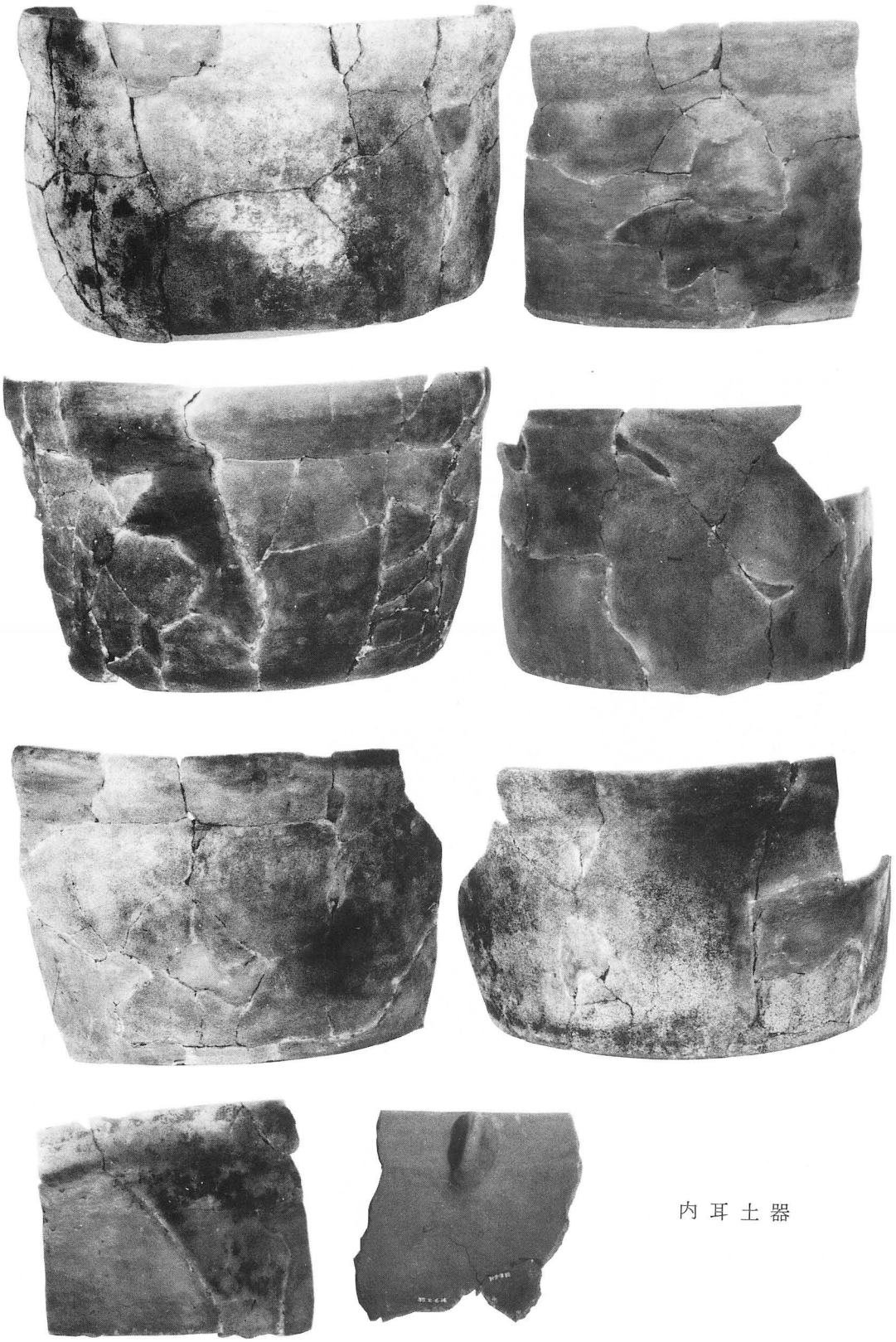


グリッド出土
縄文時代石器

第１号住居跡 出土遺物

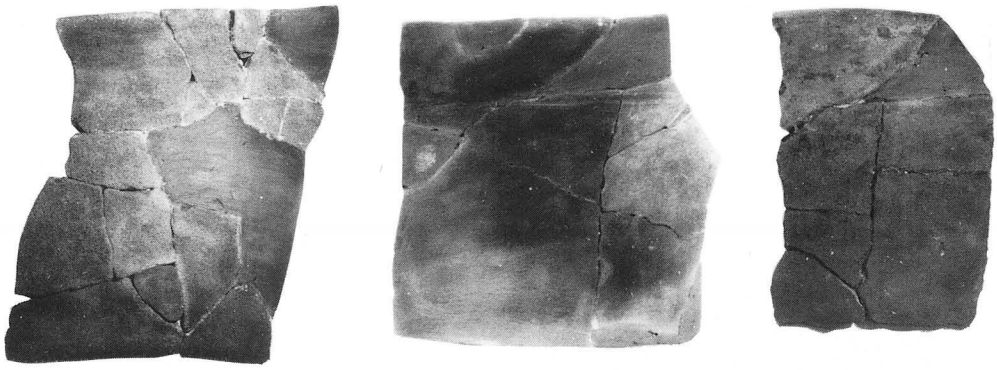


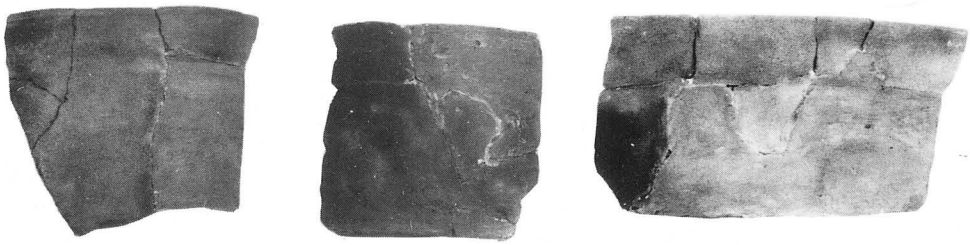
第３号住居跡 出土遺物

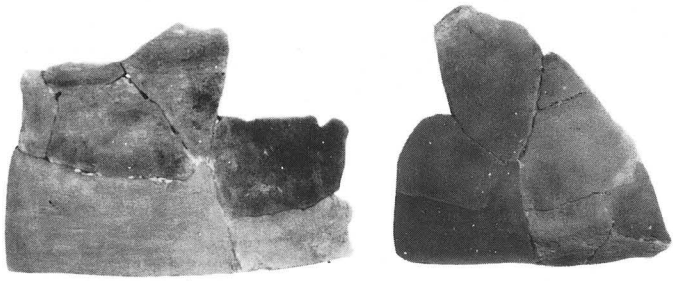


内耳土器

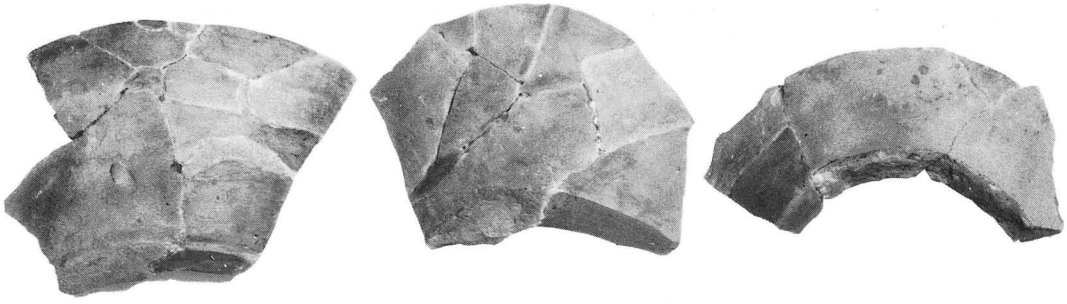
図版16

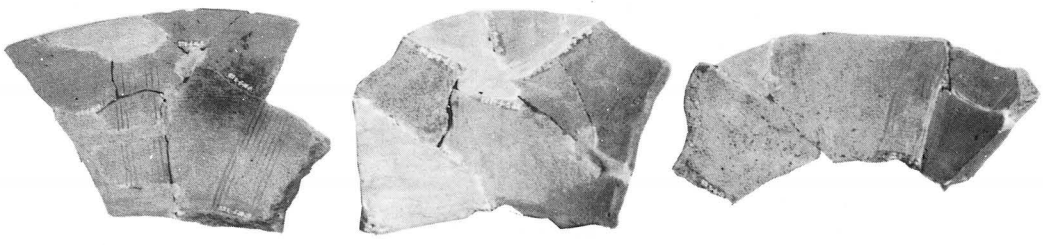




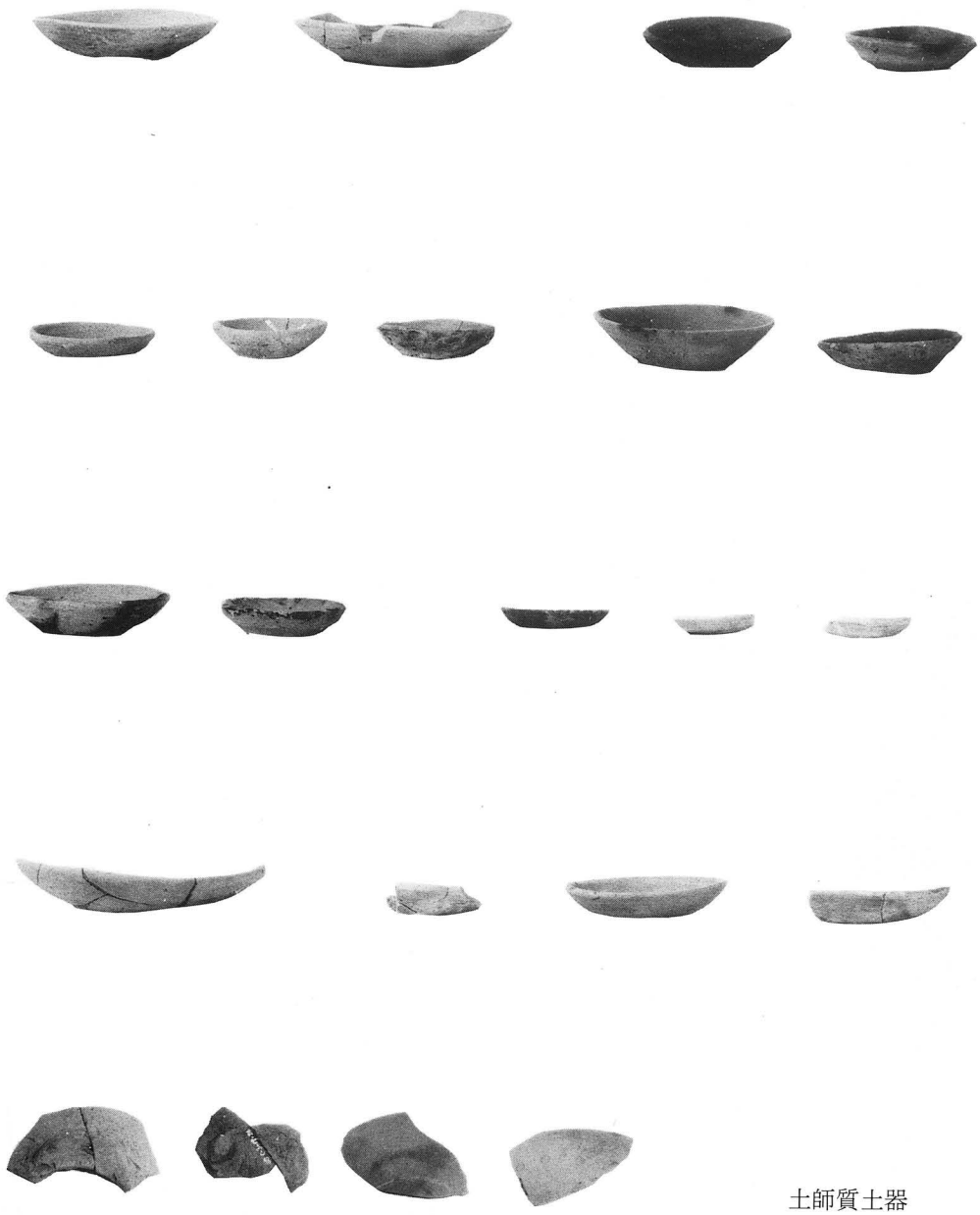


内耳土器

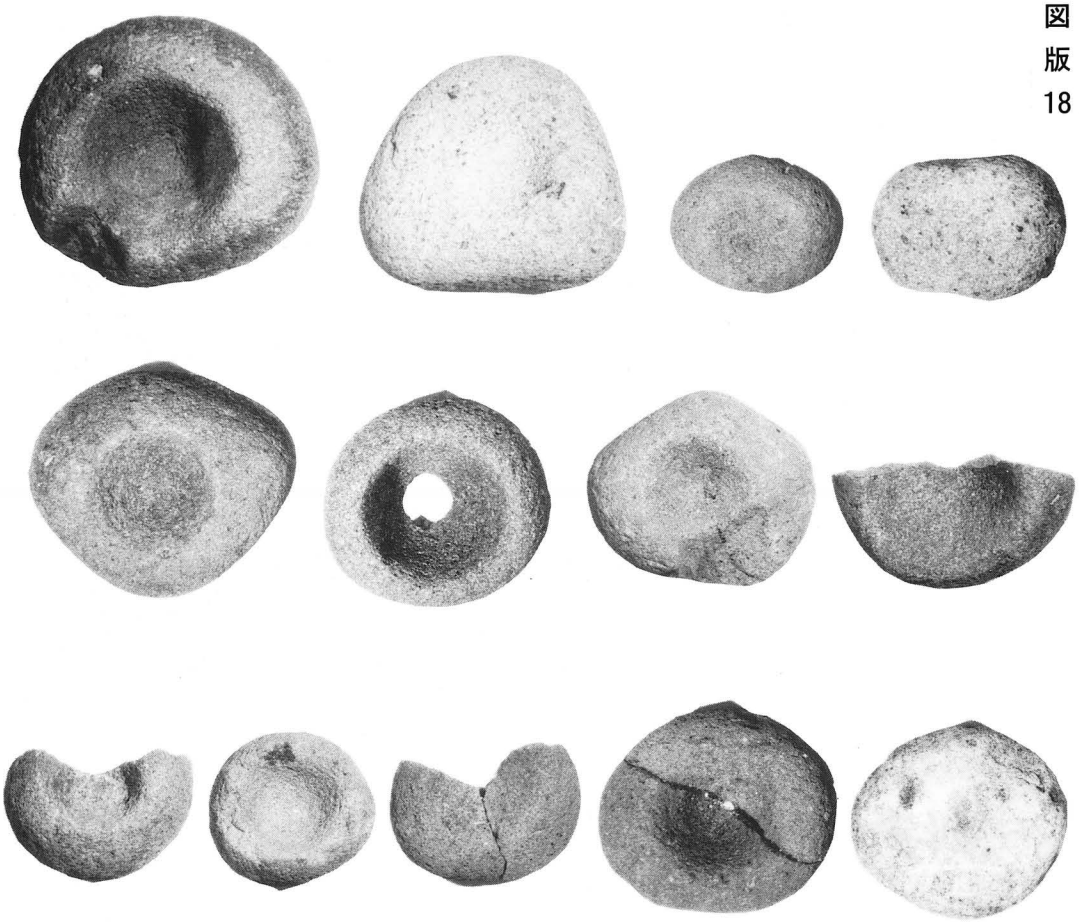




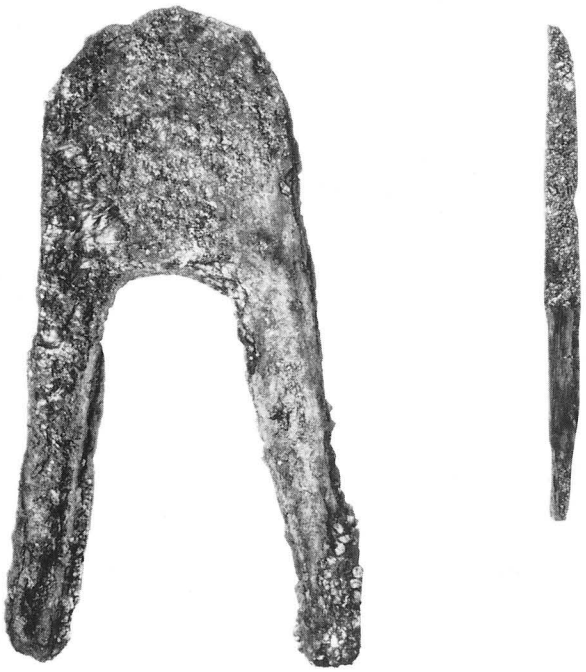
擂　鉢（上、表面、下、内面）



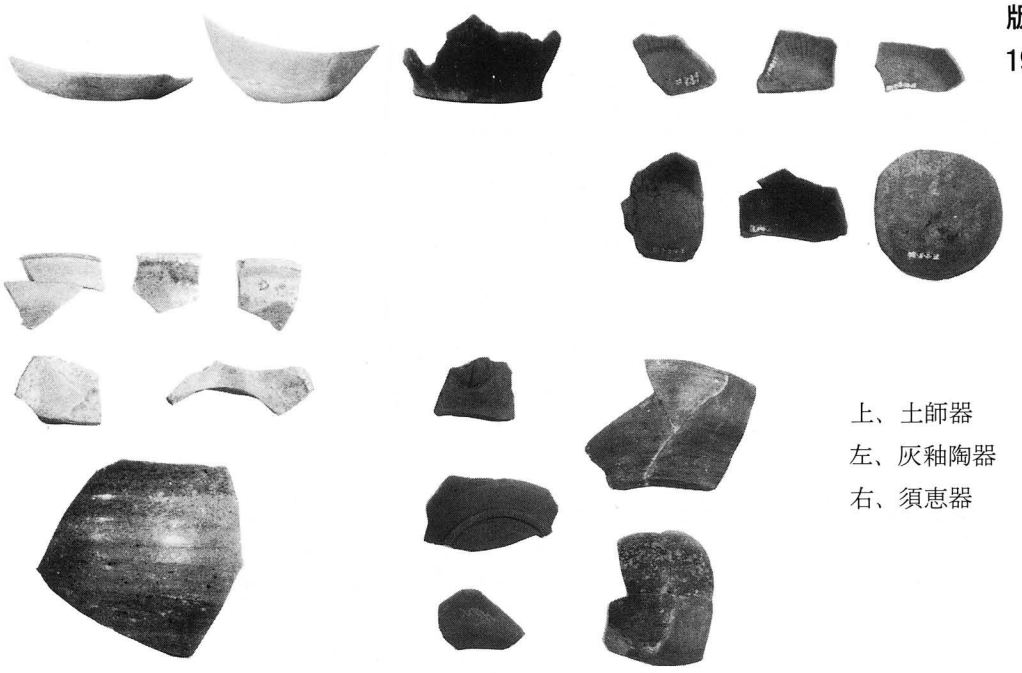
土師質土器



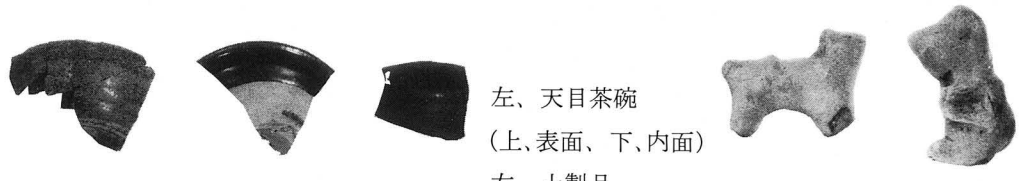
上、凹石状石器



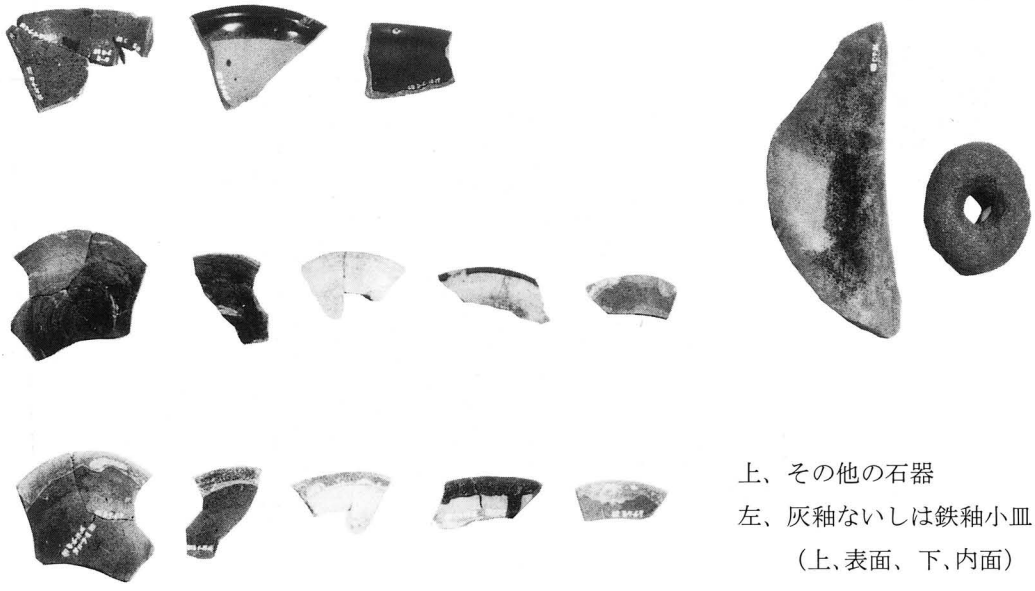
左、鋤先
右、刀子



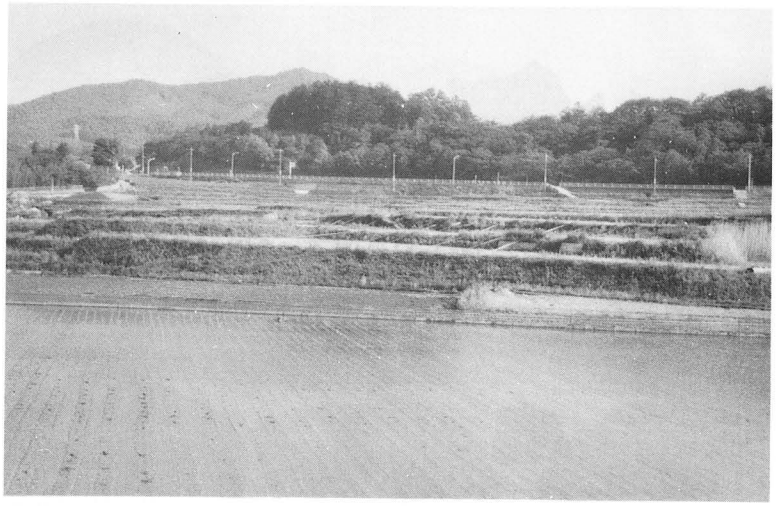
上、土師器
左、灰釉陶器
右、須恵器



左、天目茶碗
（上、表面、下、内面）
右、土製品



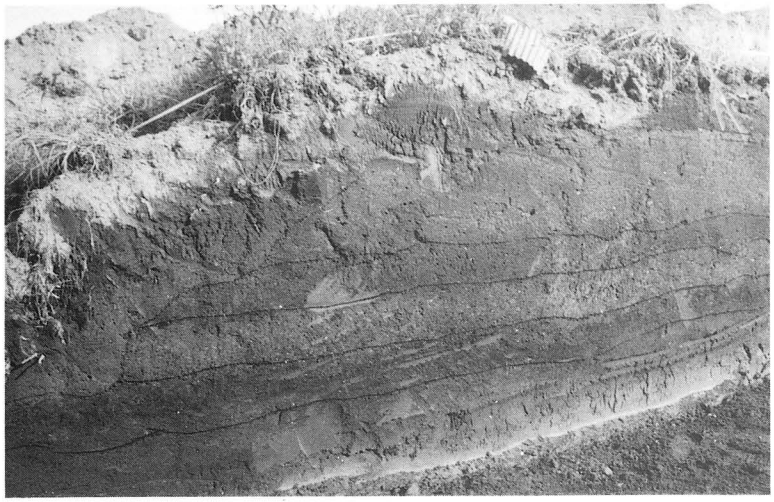
上、その他の石器
左、灰釉ないしは鉄釉小皿
（上、表面、下、内面）



下地区全景

下地区作業風景

下地区　３トレンチ
完掘状況



下地区　3トレンチ
土層断面

下地区　5トレンチ
完掘状況

下地区　5トレンチ
土層断面

坂　下　遺　跡

昭和63年３月25日印刷
昭和63年３月31日発行
編集・発行　白州町教育委員会
山梨県北巨摩郡白州町白須312
電話　0551－35－2121
印　　刷　峡北印刷株式会社
山梨県北巨摩郡長坂町長坂2313
電話　0551－32－3245